

長崎県文化財調査報告書 第215集

県立ろう学校移転改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

## 黒丸遺跡

2016

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書 第215集

県立ろう学校移転改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

## 黒丸遺跡

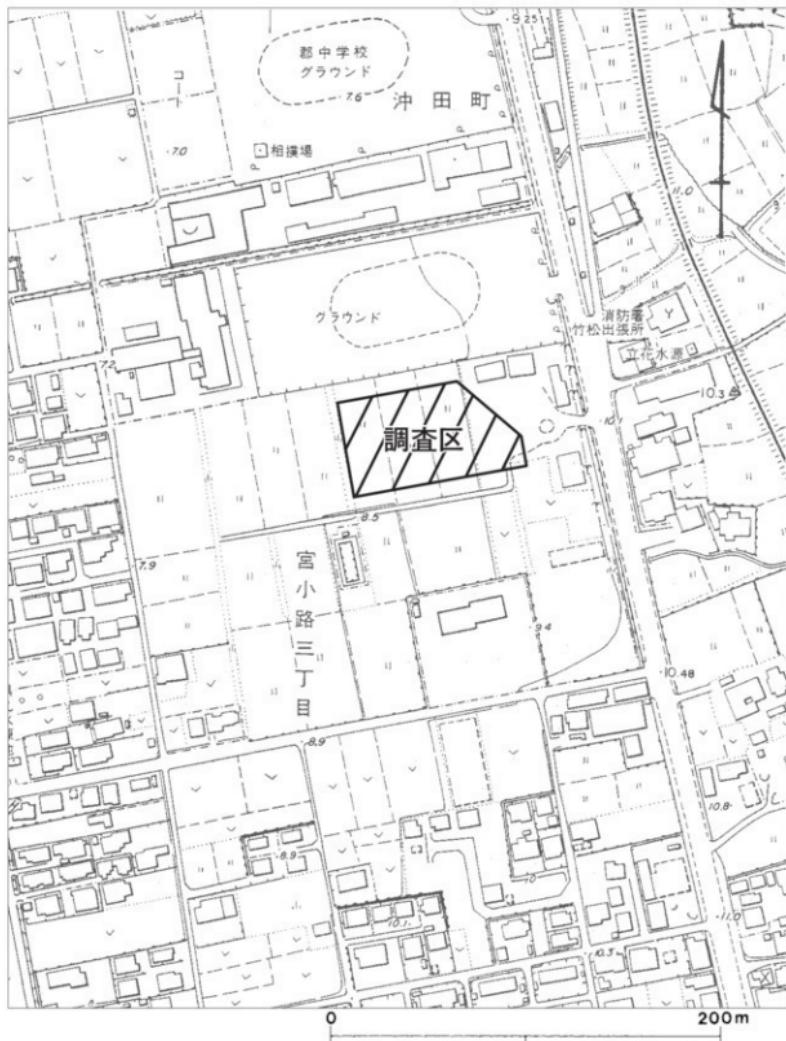


中表紙写真 国土地理院電子国土 web より作成

2016

長崎県教育委員会

卷頭地図



黒丸遺跡調査区周辺地図 (1/2,500 大村市地形図 1列3番より作成)

中表紙写真 国土地理院電子国土 web

URL : [http://maps.gsi.go.jp/?ll=37.666429,135.373535&z=5&base=std&cd=f0%2Ff0\\_10&vs=c1j0l0u0f0&d=l#5/33.092646/130.402879/&base=std&ls=std%7C\\_ort&disp=11&lcd=\\_ort&vs=c1j0l0u0f0](http://maps.gsi.go.jp/?ll=37.666429,135.373535&z=5&base=std&cd=f0%2Ff0_10&vs=c1j0l0u0f0&d=l#5/33.092646/130.402879/&base=std&ls=std%7C_ort&disp=11&lcd=_ort&vs=c1j0l0u0f0)



調査区全景 完掘状況（南から）



調査区遠景（東から）



埋壺（S T O 2）



有孔円盤形土製品

# 序

本書は、県立ろう学校移転に伴い、長崎県教育委員会が行った黒丸遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

黒丸遺跡は、縄文時代から中世に至る人々の生活の跡が残る遺跡で、これまでにも30回以上にわたり、発掘調査が行われています。

今回の発掘調査では、縄文時代早期の落し穴や後期末から晩期にかけての埋甕、弥生時代末や古墳時代中期の竪穴建物などの遺構が確認されました。

また、縄文時代の大量の打製石斧などの石器や土器などの遺物が出土し、大村における縄文時代の暮らしを知る上で重要な成果を得ることができました。

さらに、調査区を東西に流れる旧河川からは中世の石塔の部材や近世のキリスト教のコンタツの珠（コンタ）も出土したことは、この地域の宗教の歴史を考える上で興味深いものです。

今回の発掘調査および本書の刊行にあたり、発掘調査や整理作業に従事された方々をはじめ、ご協力をいただいた関係各位の皆様に深く感謝を申し上げますとともに、調査結果が学術的に広く活用され、地域の皆様の郷土を知る資料となれば幸いです。

平成28年12月

長崎県教育委員会教育長  
池 松 誠 二

## 例　　言

- 1 本書は平成27年度県立ろう学校移転に伴う黒丸遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査区は大村市宮小路3丁目に所在する。
- 3 黒丸遺跡の発掘調査は長崎県教育庁が担当し、発掘調査業務を黒丸遺跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体に委託した。

調査組織 新幹線文化財調査事務所所長 副島 和明(平成25年度) 古門 雅高(平成26年度~)  
課長 田尻 清秀(~平成27年度) 杉原 敦史(平成26年度~)  
小島 克孝(平成28年度~)  
係長 村川 逸朗  
主任主事 浜口 広史

### 範囲確認調査担当

平成25年度 文化財保護主事 本田 秀樹 山梨 千晶  
平成26年度 主任文化財保護主事 中尾 篤志  
文化財保護主事 本田 秀樹

### 本調査担当 文化財保護主事 浦田 和彦

黒丸遺跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体  
現場代理人 大成エンジニアリング株式会社 浅見 克己  
調査員 大成エンジニアリング株式会社 板野 伸彦 原 みちる 上野 優真  
株式会社 创建 楠 秀行

### 4 黒丸遺跡発掘調査期間および調査面積

平成25年度 範囲確認調査 平成26年1月28日~2月18日 108m<sup>2</sup>  
平成26年度 範囲確認調査 平成27年1月26日~2月20日 64m<sup>2</sup>  
平成27年度 本調査 平成27年8月6日~平成28年1月27日 1813m<sup>2</sup>

### 5 黒丸遺跡の本調査の資料整理は発掘調査と平行して出土遺物の洗浄・分類・注記・接合を進め、遺物台帳の作成、一部遺物については実測も行った。その他の報告書掲載遺物の実測は新幹線文化財調査事務所久原現場事務所において行った。

6 本調査での現場記録は写真撮影を浦田が、実測図作成は浦田の指示の下共同企業体の調査員を行った。遺構図の方針は真北である。

7 本報告書の作成は浦田と文化財調査員堀内和宏・東郷一子が行った。また、主任文化財保護主事白石渙洋の協力も得た。

8 本報告書の執筆担当者は本文目次に( )で示している。Xの範囲確認調査結果については平成25年度は本田が平成26年度は中尾がまとめた結果報告より浦田が編集して作成した。

9 本報告書の掲載遺物の撮影は浦田が行った。

10 本報告書の編集は浦田が行った。

11 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

土坑…SK 埋葬施設…ST 集石…SS 竪穴建物…SC 挖立柱建物…SB ピット…SP  
自然流路…NR 溝…SD

12 本書の作成にあたり以下の文献を土器等の編年の基礎資料として用いた。

縄文土器：水ノ江和同『九州縄文文化の研究』雄山閣 2012

弥生土器：柳田康雄『九州弥生文化の研究』学生社 2002

甕棺：橋口達也『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣 2005

土師器：柳田康雄『九州土師器の編年』『九州弥生文化の研究』学生社 (初出1991) 2002

須恵器：舟山良一編『牛頭窯跡群 總括報告書』大野城市文化財報告書第77集 2008

貿易陶磁：山本信夫『太宰府条坊跡 XV』(太宰府市の文化財第49集) 太宰府市教育委員会 2000

瓦質土器：荻野繁春『解説 東播磨須恵器系陶器の編年』私家版 1988

石鍋：木戸雅寿『石鍋の生産と流通について』1993 (中世土器研究会編 1993『中近世土器の基礎研究9』所収)

13 遺跡調査番号はKRM201507である。

## 目次

I 調査の経緯	1 (浦田)
II 歴史的・地理的環境	
1 地理的環境	2 (浦田)
2 歴史的環境	3 (浦田)
III 過去の調査	3 (浦田)
IV 調査方法	5 (浦田)
V 土層	6 (浦田)
VI 遺構とその遺物	
1 繩文時代	9 (浦田)
(1) 土坑（落し穴）	9 (浦田)
(2) 墓葬	13 (浦田)
(3) 土坑（土壙墓）	16 (浦田)
(4) 墓葬について	19 (浦田)
(5) 集石	24 (浦田)
(6) 壁柱穴	28 (浦田)
2 弐生時代	29 (浦田)
(1) 配石墓	31 (浦田)
(2) 竪穴建物	31 (浦田)
3 古墳時代以降	
(1) 土坑	32 (浦田)
(2) 竪穴建物壁周溝	34 (浦田)
(3) 捏立柱建物	35 (浦田)
VII 自然流路（N R O 1）の遺物	36 (浦田)
1 自然流路出土の宗教的遺物	36 (浦田)
2 その他の遺物	
(1) 土器	39 (堀内)
(2) 石器	44 (堀内)
VIII 各層の遺物	
1 1・2層の遺物	
(1) 土器	48 (堀内)
(2) 石器	49 (堀内)
2 3層の遺物	
(1) 土器	51 (堀内)
(2) 石器	53 (堀内)
3 4層の遺物	
(1) 土器 ①土器	56 (東郷)
②有孔円盤形土製品	60 (浦田)
(2) 石器 ①石錐・石錐	61 (東郷)
②打製石斧	62 (浦田)
③磨製石斧	67 (堀内)
④スクレイバー・石器	68 (堀内)
⑤円盤形石製品	69 (堀内)
⑥小型凹石	70 (浦田)
⑦その他の石器	71 (東郷)
IX まとめ	73 (浦田)
X 附編 範囲確認調査結果	
1 平成25年度調査	74
2 平成26年度調査	75
報告書抄録	78

## 表目次

表1 黒丸遺跡の過去の調査一覧	4
表2 県内縄文時代落し穴検出遺跡一覧	9
表3 S T O 4出土土器観察表	16
表4 S T O 4出土石器観察表	17
表5 県内、佐賀・熊本県埋甕出土遺跡一覧表	19
表6 県内縄文時代後期末から晩期の集石遺構一覧	24
表7 S S O 2出土土器観察表	26
表8 S S O 3出土石器観察表	27
表9 S S O 4出土土器観察表	27
表10 県内縄文時代後期末から晩期竪穴建物一覧	28
表11 S K O 1出土土器観察表	33
表12 S K O 2出土土器観察表	34
表13 カギチャ型コント出土遺跡一覧	38
表14 N R O 1出土土器観察表	43
表15 N R O 1出土土器観察表	44
表16 1・2層出土土器観察表	49
表17 1・2層出土土器観察表	49
表18 3層出土縄文土器観察表	52
表19 3層出土土師器・須恵器観察表	52
表20 3層出土土器観察表	53
表21 4層出土土器観察表	59
表22 4層出土石錐・石錐観察表	61
表23 出土石錐形状別一覧表	61
表24 4層出土打製石斧観察表	62
表25 出土打製石斧形状別一覧表	63
表26 4層出土磨製石斧観察表	67
表27 4層出土スクレイバー・石器観察表	68
表28 4層出土円盤形石製品観察表	70
表29 4層出土その他の石器観察表	71

## 挿図目次

第1図 黒丸遺跡周辺地形および遺跡分布図	2	巻頭地図 黒丸遺跡調査区周辺地図	
第2図 調査区およびグリッド配置図	5	巻頭図版1 調査区全景(南から)	
第3図 土層図位置図	6	巻頭図版2 墓壙	
第4図 B-1~4 北壁土層図	7	有孔円錐形土製品	
第5図 B-5~6 北壁。		<b>写真目次</b>	
A・B・C・F-1 北壁土層図	8	写真1 黒丸遺跡全景 東から	1
第6図 繩文時代遺構配置図	10	写真2 A-1区西壁	6
第7図 SK05実測図	11	写真3 SK05半載	11
第8図 SK06実測図	12	写真4 SK05完掘	11
第9図 SK08実測図	13	写真5 SK05ビット鍛込め状況	11
第10図 ST01実測図	14	写真6 SK06完掘	12
第11図 ST01 深鉢実測図	14	写真7 SK08完掘	12
第12図 ST02実測図	15	写真8 ST01検出状況	13
第13図 ST02 深鉢実測図	15	写真9 ST01半載	13
第14図 ST04実測図	16	写真10 ST01埋没深鉢	14
第15図 ST04出土土器実測図	17	写真11 ST02半載	15
第16図 ST04出土石器実測図	18	写真12 ST02埋没底部出土状況	15
第17図 墓壙容積度数分布図	19	写真13 ST02埋没深鉢	15
第18図 SS02実測図	25	写真14 ST04上部遺物状況	16
第19図 SS02出土石器実測図	25	写真15 ST04土坑	16
第20図 SS03実測図	26	写真16 ST04出土土器	17
第21図 SS03出土石器実測図	27	写真17 ST04出土石器	18
第22図 SS04実測図	27	写真18 SS02	25
第23図 SS04出土土器実測図	27	写真19 SS02出土石器	26
第24図 SC03実測図	28	写真20 SS03	26
第25図 弁生時代以降構配図	30	写真21 SS03出土石器	27
第26図 ST05実測図	31	写真22 SS04	27
第27図 SC01実測図	31	写真23 SS04出土土器	27
第28図 SK01実測図	32	写真24 SC03	28
第29図 SK01出土土器実測図	33	写真25 ST05	31
第30図 SK02実測図	33	写真26 SC01	31
第31図 SK02出土土碗実測図	34	写真27 SK01検出状況	32
第32図 SK02実測図	34	写真28 SK01半載	32
第33図 SB01実測図	35	写真29 SK01出土土器	32
第34図 調査区内自然流路図	36	写真30 SK02	33
第35図 自然流路出土宗教関係遺物実測図	38	写真31 SK02出土塊	34
第36図 NR01出土土器実測図1	40	写真32 SC02検出状況	34
第37図 NR01出土土器実測図2	42	写真33 SC02	34
第38図 NR01出土土器実測図3	45	写真34 SB01	35
第39図 NR01出土土器実測図2	47	写真35 SB01SP02断面	35
第40図 NR01出土土器実測図3	47	写真36 自然流路出土宗教関係遺物	38
第41図 1・2層出土土器実測図	48	写真37 NR01出土土器1	41
第42図 1・2層出土土器実測図	50	写真38 NR01出土土器2	42
第43図 1・2層出土石器実測図	50	写真39 NR01出土土器	46
第44図 3層出土土器実測図	51	写真40 1・2層出土土器	48
第45図 3層出土土器・須恵器実測図	52	写真41 1・2層出土土器	49
第46図 3層出土土器実測図	54	写真42 1・2層出土石器	50
第47図 3層出土石器実測図	55	写真43 3層出土土器	51
第48図 4層出土土器実測図	57	写真44 3層出土土器・須恵器	52
第49図 4層出土有孔円錐形土製品実測図	60	写真45 3層出土土器	54
第50図 4層出土石器・石錐実測図	62	写真46 3層出土石器	55
第51図 打製石斧形状別分類図	63	写真47 4層出土土器	58
第52図 4層出土打製石斧実測図1	64	写真48 4層出土有孔円錐形土製品	60
第53図 4層出土打製石斧実測図2	65	写真49 4層出土石器・石錐	61
第54図 4層出土磨製石斧実測図	67	写真50 4層出土打製石斧	66
第55図 4層出土スクリューバー・石甃実測図	68	写真51 4層出土磨製石斧	67
第56図 4層出土円錐形石製品実測図	69	写真52 4層出土スクリューバー・石甃	69
第57図 4層出土小型石甃実測図	70	写真53 4層出土円錐形石製品	70
第58図 4層出土その他の石器実測図	72	写真54 4層出土小型石甃	70
第59図 平成25年度調査試掘坑配置図	74	写真55 4層出土その他の石器	71
第60図 平成26年度調査試掘坑配置図	76		



写真1 黒丸遺跡全景 東から（写真の左から右（南北）に流れる郡川と大村湾の間に広がる）

## I 調査に至る経緯

九州新幹線（西九州ルート）の建設に伴い新大村駅が大村市植松3丁目の県立ろう学校西側に建設されることとなった。それに伴い大村市では新大村駅まちづくり計画が立てられ、「新大村駅前周辺ゾーン」の整備の為、長崎県が県立ろう学校を市内宮小路3丁目にある県立大村城南高校竹松農場に移転させることを平成26年3月に決め、平成29年度末までに新校舎が建設されることになった。当地には大村城南高校の前身たる大村市農業学校（昭和16年創立）が置かれ、昭和30年に現校地へ校舎が移転した後は、実習用の農場として使用してきた。

竹松農場は縄文時代から近世に至る遺物包含地として周知されている黒丸遺跡の東に位置するため、平成26年1月28日～2月18日にかけてと平成27年1月26日から2月20日にかけて予定地の試掘調査を行い、要調査地を設定し、その要調査区に係る新校舎の基礎部分、1813mについて平成27年8月6日～平成28年1月27日にかけて埋蔵文化財の本調査を実施することとなった。

## II 歴史的・地理的環境

### 1 地理的環境

大村市は県本土部の中央に位置し、西に大村湾、東に多良山系と接する。市内には多良山系を源として大村湾に注ぐ市内最大の二級河川郡川が流れ、この郡川と大上戸川が運搬した土砂によって東西約2.5km、南北約6kmの広がりを持つ県内最大の河成扇状地である大村扇状地が形成されている。

大村扇状地は矢次橋付近から郡川河口に向けて広がる完新世の新規扇状地と郡川下流部の黒丸・沖田・寿古に発達した三角州からなる。黒丸遺跡はこの大村扇状地の郡川の河口の南側に位置し、標高0m～10m前後を測り、東西約1km、南北約1.4kmの範囲に所在する。現在周辺は宅地、田畠として利用される。遺跡は縄文時代から中世の包蔵地として周知されており、本調査区はその東隅に位置する。(第1図)



第1図 黒丸遺跡周辺地形および遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1 武留路山より）

## 2 歴史的環境

黒丸遺跡では、過去の調査により遺跡の北東部より縄文時代晚期の住居跡やドングリ貯蔵穴、埋甕などの遺構が検出されている。遺物は縄文時代晚期の土器や打製石斧等の石器を中心に、弥生時代の農耕具、土師器、須恵器、中世の輸入陶磁器などが出土している。このことから縄文時代晚期から農耕が普及していく弥生時代中期を中心とし古墳時代、中世へと続く遺跡と考えられる。

また、沖田地区には、条里跡が残っており、黒丸遺跡周辺が、古くから農耕生産の中心を担っていたと思われる。この条里跡や、『郡（こおり）』の地名から古代、彼杵郡家が、この辺りに存在した事を想定させる要因になっている。

周辺には、多くの遺跡が存在する。東側の山麓台地には野岳遺跡があり、旧石器時代のナイフ形石器や細石核等が出土している。黒丸遺跡の東方には、縄文時代～中世までの遺物を包含する竹松遺跡、郡川を挟んだ所では、弥生時代終末期～古墳時代初頭のものとみられる、冷泉遺跡や岩名遺跡、黄金山古墳等がある。南方には弥生時代中期から後期にかけての大規模な集落址と考えられる富の原遺跡が位置する。（第1図）

## III 過去の調査

黒丸遺跡は南北約1.4km、東西約1kmで楕円形に拉がる広大な遺跡で、その調査は1977年の黒丸遺跡調査会によるものから今回の調査まで分かったものだけ23回を数える。その状況を主な遺構や遺物を見ながら表1にまとめてみた。そこから見えてくる本遺跡の特徴をまとめてみたい。

各調査での遺物の出土状況を見ると縄文時代晚期と弥生時代中期の遺物を中心として、縄文時代後期から弥生時代・古墳時代・奈良時代・中世までの遺物がある。各調査地域の状況は水田または畠であり、表土・床土は農耕土の可能性が高い。また、『新編大村市史』第1巻、自然編、第1章、第4節の大村平野によると黒丸遺跡内で2つに分かれるものも数えると郡川からの旧河川が5本あり、多くの遺物が上流から流れ込み、二次堆積したことが想定される。従って、表層部分と流路から出土した遺物は黒丸遺跡由来のものとはいいがたい。そこで、各調査で検出された遺構を見ていくと、埋甕・ドングリ貯蔵穴・集石など縄文時代晚期の遺構は遺跡全体から検出され、甕棺・石棺・矢板列など弥生時代中期の遺構は遺跡の北西部、郡川の河口付近を中心に検出されている。条里地割の畦畔状遺構は遺跡の北西にある。中世の建物遺構も検出されている。条里制については、金田章裕氏の研究（『条里編 IV条里 総論』『古代の都市と条里』条里制・古代都市研究会編 吉川弘文館 2015）によると条里地割と条里呼称が完成していくのは8世紀中頃ということである。

これらのことから、当黒丸遺跡では縄文時代晚期・弥生時代中期・奈良時代中期・中世の生活面があったと考えられる。

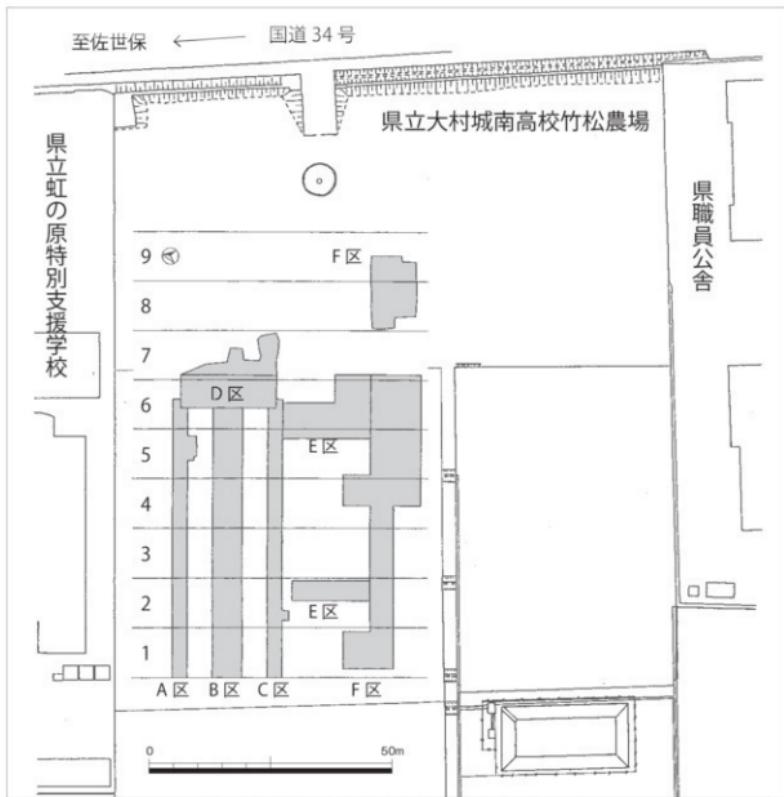
表1 黒丸遺跡の過去の調査一覧

調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	主な遺構	主な遺物	調査種別	報告書	発行年	備考
1 19770704～ 19770713		縄文晚期、弥生		範囲確認	「黒丸跡発掘調査報告書」 大村市黒丸跡調査会	1980	都市下水路整備事業
2 19780214～ 19780311	縄文晩期合口櫛 群	縄文晩期土器・石器		範囲確認	「黒丸道跡発掘調査報告書」 大村市黒丸道跡調査会	1980	都市下水路整備事業
3 19781121～ 19790531	900		縄文晩期土器・石器、弥 生中期土器・土器	本調査	「黒丸跡」長崎県文化財調査 報告書第127集	1980	都市下水路整備事業
4 19901203～ 19901214	120	柱穴・溝状遺構、 中世建物跡	T(16～21) / 弥生～古 墳土器	範囲確認	「黒丸跡Ⅰ」長崎県文化財調査 報告書第127集	1996	軒出津・松原線改良工事
5 19931025～ 19940215	4206?	弥生中期春日群、 中世柱穴・土壙	縄文晩期土器・石器、弥 生土器、須恵器(7世紀 前半)、須切口土器(13 世紀)、土器・玉緑白磁(N 型)、四神・龍泉窯青磁	本調査	「黒丸跡Ⅱ」長崎県文化財調査 報告書第127集	1996	軒出津・松原線改良工事
6 19941115～ 19950203	1767	ドングリ貯蔵穴、 住居跡、蚕群	縄文晩期土器・石器、弥 生土器、櫛口江戸土錐	本調査	「黒丸道跡」長崎県文化財調査 報告書第127集	1996	軒出津・松原線改良工事
7 1994～ 1997		縄文晩期石棺跡	舟形木製品、石台丁	範囲確認	「黒丸道跡Ⅲ」長崎県文化財調査 報告書第20集	1997	
8 19951101～ 19960315	1792	集石、埋甕、 縄文晩期住居跡1棟、 ドングリ貯蔵穴	縄文晩期土器・石器	本調査	「黒丸道跡」長崎県文化財調査 報告書第132集	1997	
9 19970402～ 19970409	40	西から南西向き に転じてく溝、 中世柱穴	かわらけ	範囲確認	「黒丸道跡Ⅳ」長崎県文化財調査 報告書第24集	2000	住宅建設 極楽寺北定地
10 1998～ 2002		弥生中期矢列、 腰桿・石棺	弥生中期土器・木製品	範囲確認	「黒丸道跡Ⅴ」大村市文化財調査報告書 25集	2003	
11 19990823～ 19990915	200	なし	弥生中期～古墳の土器石 器が混在	範囲確認	「埋蔵文化財調査年報Ⅷ」長崎県 文化財調査報告書第156集	2001	紅の原特別支援学校。都川 支流の二次堆積
12 1999～ 2001	184	畦畔状遺構	縄文晩期土器・弥生中期 木製品、8世紀須恵器	範囲確認	「黒丸道跡Ⅵ」大村市文化財調査報告書 28集	2005	区画整理
13 2000 年度	?	弥生中期棺墓、石 棺墓	弥生中期廬・縄文晩期土 器	範囲確認	「市内遺跡発掘調査概報7」大村 市文化財調査報告書第38集	2015	沖田町 216番地1 道物の 詳説は未報告
14 20010726～ 20010807	720	中世柱穴	土器群、青磁(龍泉窯)、 滑石製品	範囲確認	「黒丸道跡Ⅶ」大村市文化財調査報告書 28集	2005	日本のトレンド調査の後、 密度の濃い南北西を面向に 盆地。中央の南北に向ひ旧 河川。設計変更で遺構保護
15 20021202～ 20030320	1,030	畦畔状遺構・杭 列(森里型)	弥生中期土器・木製品	範囲確認	「黒丸道跡Ⅷ」大村市文化財調査報告書 27集	2004	船山運動公園 F・H・M 区トレンド調査
16 20040113～ 20040312	330	畦畔状遺構	弥生中期土器・木製品	範囲確認	「黒丸道跡Ⅸ」大村市文化財調査報告書 28集	2005	運動公園、本文で報告なし
17 20040128～ 20040219	88	縄文後期廬土 坑	縄文後期・晩期土器	範囲確認	「市内遺跡発掘調査概報2」大村 市文化財調査報告書第32集	2007	区画整理
18 20050222～ 20050331	550	畦畔状遺構、ド ングリ貯蔵穴	木製品、古式土器群	範囲確認	「市内遺跡発掘調査概報1」大村 市文化財調査報告書第31集	2007	運動公園
19 20050127～ 20060111	430	畦畔状遺構、ド ングリ貯蔵穴	木製品、古式土器	範囲確認	「市内遺跡発掘調査概報2」大村 市文化財調査報告書第31集	2007	運動公園
20 20050218～ 20050314	160		青磁、白磁	範囲確認	「市内遺跡発掘調査概報2」大村 市文化財調査報告書第32集	2008	区画整理
21 20070409～ 20070427	350	道路周囲の土器 集中	縄文晩期土器・石器群(古 墳中期)、須恵器の高台 付近(8世紀)	範囲確認	「市内遺跡発掘調査概報2」大村 市文化財調査報告書第32集	2008	宅地造成
22 20070118～ 20080305	1411	縄文晩期柱穴	縄文晩期土器・石器、弥 生中期土器	本調査	「黒丸道跡Ⅹ」長崎県文化財調査 報告書第201集	2009	都川改修工事
23 20090106～ 20090313	930	弥生前期柱穴・ 土坑	縄文晩期土器・石器、弥 生中期土器	本調査	「黒丸道跡Ⅺ」長崎県文化財調査 報告書第204集	2009	都川改修工事
24 20102616～ 20103023	166	古代集落に平行 する矢列(舟形)、 打斧	弥生中期粗削深鉢、打斧 等。弥生中期の高杯、土器、 輪	範囲確認	「市内遺跡発掘調査概報6」大村 市文化財調査報告書第37集	2014	運動公園
25 20120605～ 20120620	255	弥生柱穴・土坑、 古墳以降の柱穴	縄文晩期土器・丹波高杯、 彌生中期・奈良以康、台付 脚	範囲確認	「市内遺跡発掘調査概報6」大村 市文化財調査報告書第37集	2014	住宅建設
26 20120716～ 20120725	300	近世柱穴	近世陶器	範囲確認	「市内遺跡発掘調査概報6」大村 市文化財調査報告書第37集	2014	分譲宅地造成
27 20120819～ 20120829	172.5	古墳柱穴	弥生土器・黒曜石片	範囲確認	「市内遺跡発掘調査概報6」大村 市文化財調査報告書第37集	2014	宅地造成
28 20121022～ 20121030	130.5	U字形東西溝、 柱穴	古代土器群、須恵器、白 磁IV類・龍泉窯青磁	範囲確認	「市内遺跡発掘調査概報6」大村 市文化財調査報告書第37集	2014	宅地造成
29 20130109～ 20130116	90	古墳ないし中世 の木机	縄文晩期土器・石器	範囲確認	「市内遺跡発掘調査概報6」大村 市文化財調査報告書第37集	2014	宅地造成
30 20131118～ 20131206	114	方形壁状穴遺構	白磁好類、同安窯系、龍 泉窯系青磁、かわらけ、 近世陶器	範囲確認	「市内遺跡発掘調査概報7」大村 市文化財調査報告書第38集	2015	沖田町 216番地1 13調 査と同地番
31 20140410～ 20141002	1028	古代壁状穴遺 構・大型柱穴、 東西溝		範囲確認	「市内遺跡発掘調査概報7」大村 市文化財調査報告書第39集	2015	旧玉電社宅、柱穴並びを確 認できないトレンド調査

## IV 調査方法

調査は発掘対象となる県立ろう学校の新校舎・体育館等の基礎部分に応じて南北にA～Fの調査区を設け更に東西に10 mごとに任意のグリッドを設定した(第2図)。A・B・C・F-1・5区の西側とB区の北側にトレンチを設定し土層確認を行った。掘削は、表土を重機で、それ以後の包含層は全て人力で行った。調査区全体としては1万年以上前に形成されたと考えられる非常に硬い古土層(5層)まで掘り下げ、一部下層確認として5層下の6層を掘下げ、扇状地疊層まで検出した。

遺物は、グリッドごと層ごとに取り上げたが、遺構や遺物密集区から出土した遺物については位置を記録して取り上げた。また、掘立柱建物、竪穴住居、土坑、埋甕等の遺構及び土層は5分の1、10分の1または20分の1で実測し記録した。



## V 土層

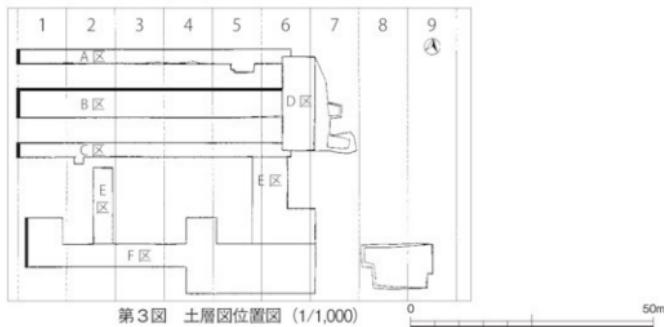
1層は表土で農場の水田の耕作土、2層はその床土で、どちらも農客土と考えられ、耕耘により縄文時代から現代までの遺物が混在する。各1.5cmほどの堆積である。3層は明黄褐色の砂質土でA・B・C-1区の西側のみ堆積し、土師器・須恵器および縄文晩期の土器・石器を包含する。遺構は古墳時代中期とみられる廐棄土坑・竪穴建物・掘立柱建物が検出され、古墳時代の包含層と考えられる。A・B・C-1区の西壁で2.5cmほどの堆積である。4層は暗褐色土の粘質土で調査区を南東から北西に途中2つに分かれ流れた自然路(旧河川)以外調査区全体に堆積する。調査区西側では7.0cmほどの堆積で、F-3~6区では農地をつくるための削平が酷く、1.0cm前後しか堆積が見られない。遺物は縄文時代晩期の土器・石器を包含し、遺構はA-5区の4層上面から弥生時代と考えられる配石墓と竪穴建物が4層中層からは縄文時代晩期の埋甕が検出され、農地造成のための削平を受けていない4層上面が弥生時代の包含層であり、4層中層以下が縄文時代晩期の包含層と考えられる。5層は灰黄褐色土の粘質土で粒子が細かくしまりがあり非常に硬質である。1万年以上前に堆積した風積土(古土層)であると考えられ無遺物層である。6層は橙色土で粘性が強くしまりがあり、黒曜石の小剥片が数点出土した。7層が3万年前までに形成されたと考えられている旧扇状地疊層であり、したがって6層は1~3万年前に堆積した層と考えられる。

### 基本土層



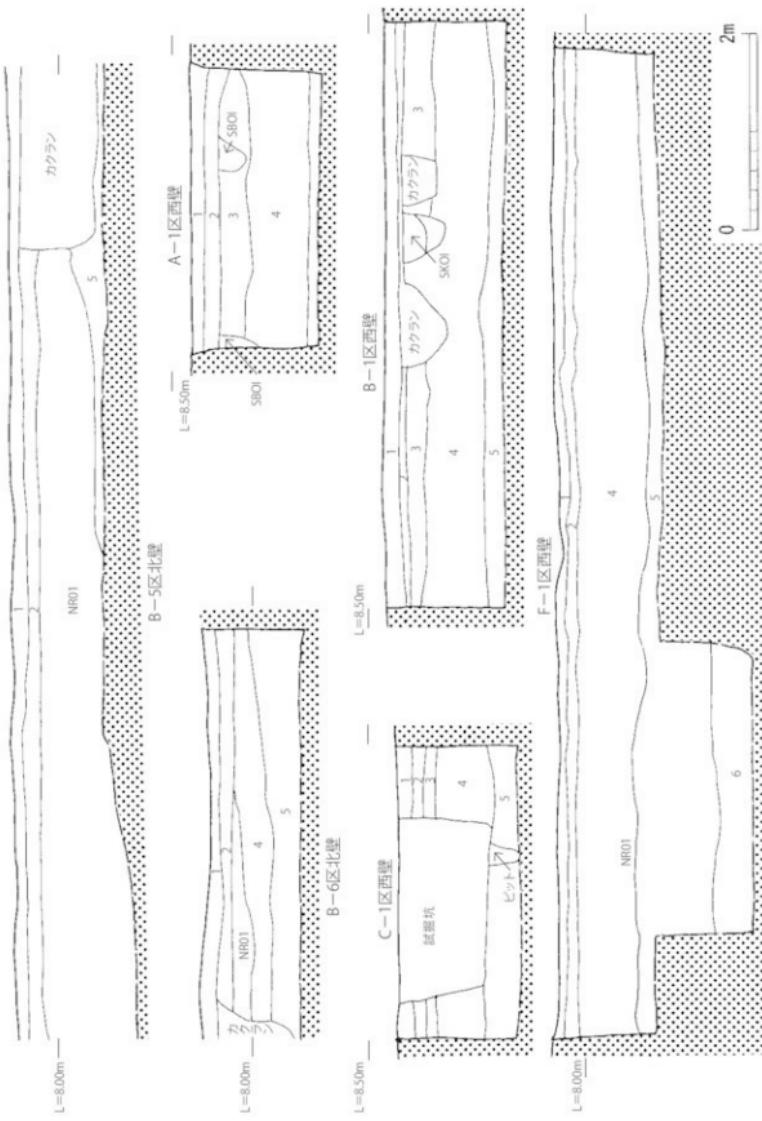
1層 表土（耕作土）褐灰色土 10YR1/5
2層 床土 灰黄褐色土 粘質 10YR2/5
3層 明黄褐色土 砂質 上面にマンガン層 10YR6/6
4層 暗褐色土 粘質 しまり有 明黄褐色土ブロック含む 10YR3/3
5層 灰黄褐色土 粘質 硬い 白色土粒子を含む 10YR2/2
※6層 橙色土 粘質 白色・黒色粒子を多く含む 7.5YR6/8

写真2 A-1区 西壁





第4図 B-1～4区北壁土層図 (1 / 50)



第5図 B-5・6区北壁、A・B・C・F-1区西壁土層図 (1/50)

## VI 遺構とその遺物

### 1 繩文時代

縩文時代の生活面と考えられる4層中層から5層上面にかけて、落し穴、土壙墓と考えられる土坑、埋甕、集石、壁周穴と考えられるピットなどが検出された。4層最下層から5層上面にかけて多くのピットが検出されたが、樹痕との判別が難しく、段下げ、半截をし、確実に樹痕を見られるものを外した41基を記録した。(第6図)

#### (1) 土坑(落し穴)

土坑は5層上面から掘り込むものが3基検出された。その内2基は土坑底中央にピット状施設があり、過去の研究の成果から動物を捕えるための落し穴であると考えられる。埋甕など縩文時代後期後葉から晩期にかけての生活面が4層中層であり、5層は1万年以上前に形成された古土層である。さらに、土坑内からは遺物の検出はないので縩文時代後期後葉には埋没していたと考えられる。遺構検出面の差から考えて、土坑が造られたのは縩文時代早期から後期中葉といえる。県内で検出された縩文時代の落し穴で土坑の底に礫を詰めたピットをもつものを見てみると例は3遺跡と少ないがすべて縩文時代早期のものである。また、東日本の例であるが佐藤宏之氏の研究によるとこの落し穴のタイプは縩文時代早期後半から前期初めのものとされている。これらのことから今回検出された落し穴も縩文時代早期後半頃のものと考えてよいと思われる。

次に、検出された落し穴の立地を見ると、自然流路(旧河川)の川淵にあり、水辺に水を求めてやってくる動物を対象として設置されている。これは、捕える獣種の限定ではなく、設置場所を優先してつくったものであり、季節性も乏しく、狙う獣種も多岐にわたると考えられる。従って縩文時代の早期後半頃にこの落し穴を設置した集団は、獲物を求めて移動の生活を送るより、罠をつくることによりある程度定住していたものと推測できる。

表2 県内縩文時代落し穴検出遺跡一覧 ※土坑中央に1ヶ所礫を詰めたピットを有するもの

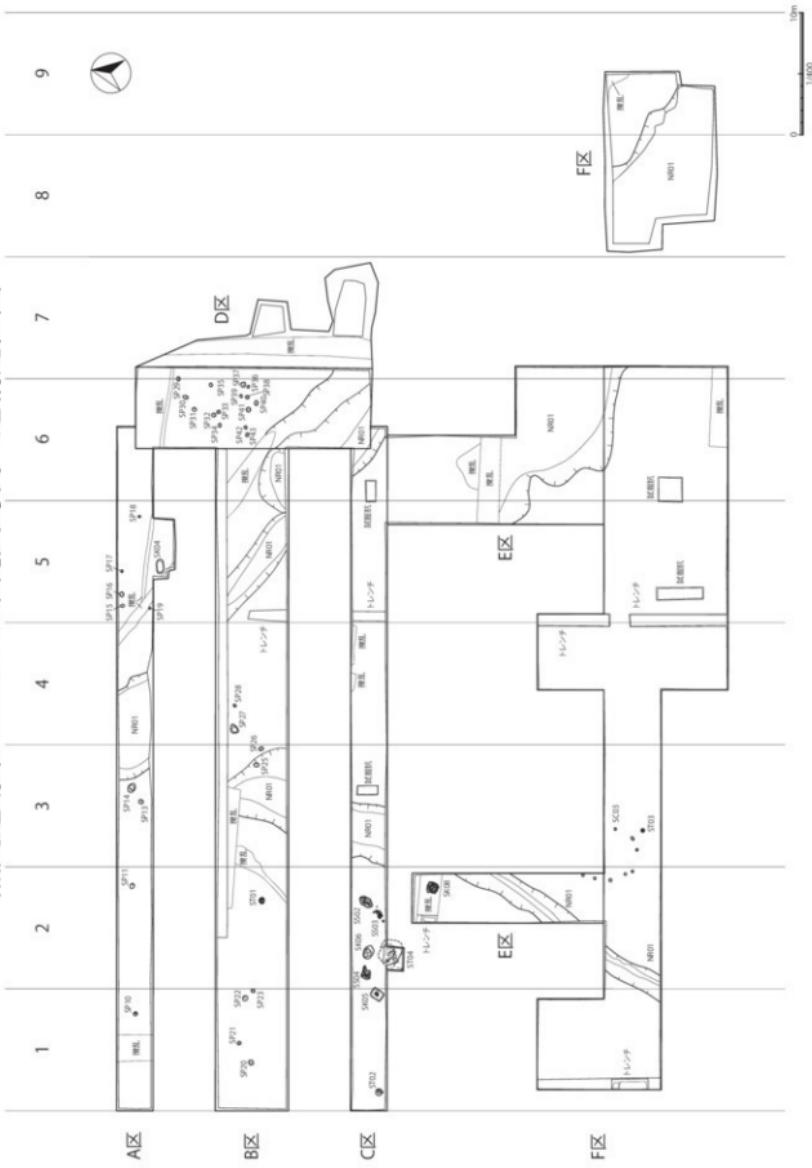
遺跡名	所在地	立地	時期	遺構名	報告書
牛込A・B遺跡	諫早市賀津牛込	丘陵	早期	1・2・3・4・5・9号土坑	【九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書】長崎県文化財報告書第56集 1982
鹿野遺跡	諫早市津久葉町	丘陵	不明	土坑7号	【諫早中島工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書】長崎県文化財報告書第85集 1996
龍王遺跡	雲仙市国見町土栗・今出・川原田	崩れ地	早期以降	5X-2	【龍王遺跡】(縩文時代・古墳時代編) 雲仙市文化財調査報告書第3集 2008

#### 参考文献

- 佐藤宏之「陥し穴獣の土俗考古学—狩猟技術のシステムと構造ー」「縩文式生活構造—土俗考古学からのアプローチ」同成社 1998  
佐藤宏之「陥し穴獣と縩文時代の狩猟社会」「考古学と民族誌」渡辺仁教授古希記念論文集 1989  
今村啓爾「陥穴(おとし穴)」「縩文文化の研究2」生業 雄山閣 1994  
今村啓爾「縩文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」「物質文化27」1976  
金持健司「多摩ニュータウン遺跡群における陥し穴土坑の形態別出現率」「生産の考古学II」同成社 2008

**SK05** C-1区5層上面から検出された土坑である。掘り方上端の平面プランは約105cm×80cmの長方形で非常に硬い5層を掘り抜き6層上層まで約70cm掘下げている。ほぼ垂直に掘られた壁には5層が硬質なので細い鋤状の道具で掘削した跡が残る。さらに、底の中央に径約30cm深さ約50cmのピットを堀り、逆茂木等を立てて礫を入れて固定したものと考えられる。

黒丸遺跡(KRM201507)縄文時代 遺構配置図



第6図 縄文時代遺構配置図 (1/400)

このことはピットの中央部は礫が抜けていたことからもうかがえる。土坑内の埋土は4層の土を基本として5層の硬い古土層のブロックが所々に入っていた。埋土中からの遺物の検出は見られなかった。以上のことから、この土坑は落し穴と考えられる。

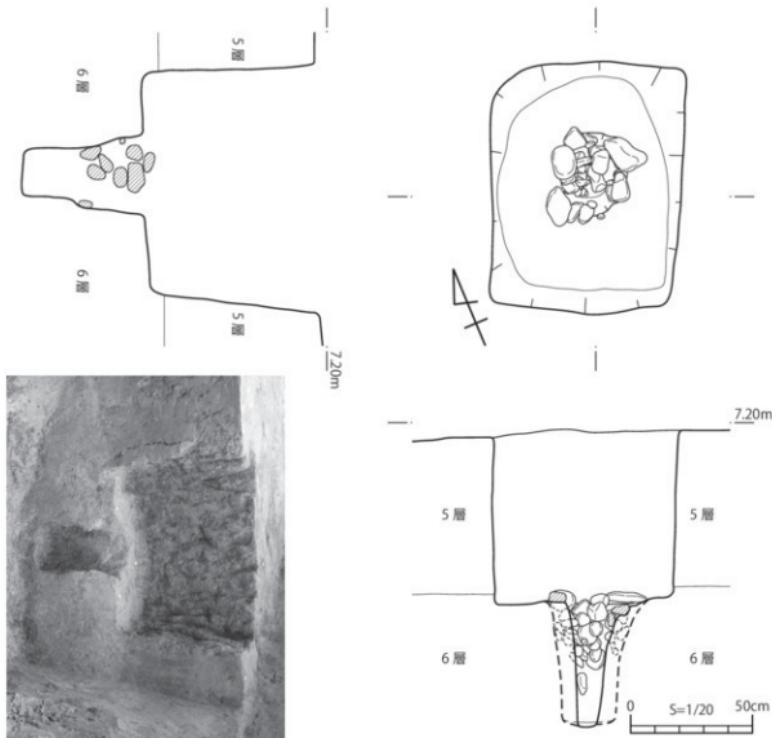


写真3 SK05 半截（北西から）

第7図 SK05 実測図（1/20）



写真4 SK05 完掘（北西から）

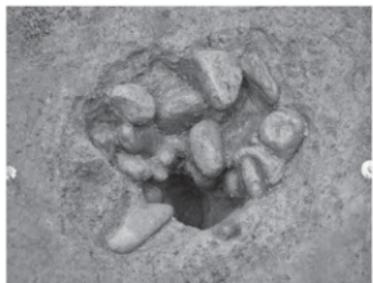


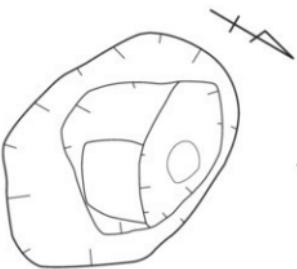
写真5 SK05ピット礫込め状況（南から）

**SK06** C-2区5層上面から検出された土坑である。掘り方上端の平面プランは110cm×80cmの楕円形で5層・6層を掘下げ、90cm程の所で一段あり、最終的には120cm掘下げている。埋土はSK05と同じく4層の土に5層のブロックが入る。検出面、土坑の規模からして落し穴とも考えられるが、形状の偏りや底に落し穴としての施設がないので確定できない。埋土中からの遺物の検出は見られなかった。



写真6 SK06 完掘状況（南から）

**SK08** E-2区5層下層から検出された土坑である。5層下層までは幅1.5mほどの溝状の近現代の搅乱によって消失していた。残存する掘り方上端の平面プランは約80cmの楕円方形で深さ15cmほどである。底は6層上面に河川の流れによつて堆積した薄い疊層となる。その底の中央の疊を抜き径約20cm、6層を40cm掘下げたピットがある。SK05・06と同じく5層上面から掘り込んだとすると溝の淵で残っている5層上面から測って約50cmほどの深さとなる。埋土はSK05・06と同じく4層の土である。埋土からの遺物の検出もなかった。やや浅くはあるが底に逆茂木等を立てたと考えられる施設があることから落し穴と考えられる。



7.00m

0 S=1/20 50cm

第8図 SK06 実測図 (1/20)

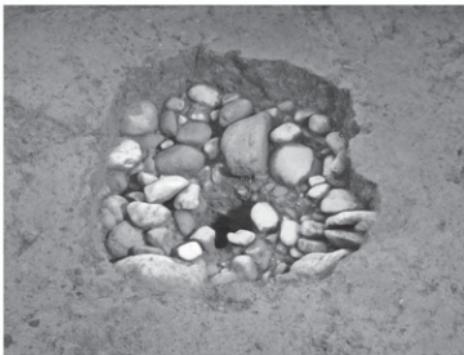
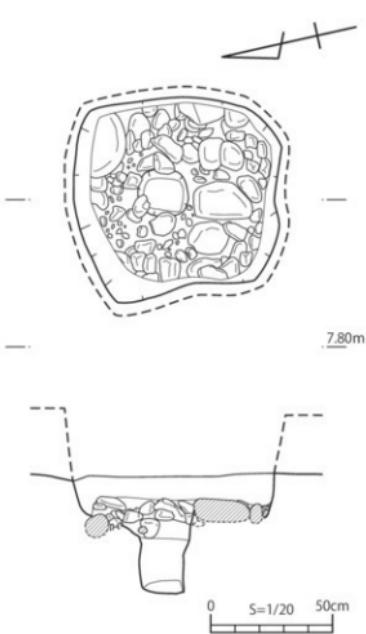


写真7 SK08 完掘状況（北から）



第9図 SKO8 実測図 (1/20)

調整は内外面ともに貝殻によるケズリで横・斜め方向の条痕が前面に残る。焼成はよく色調は明乳褐色を呈し、胎土には微細な雲母片・砂粒片を含む。口縁部下のくびれ部に1か所、穿孔がされている。内容量は約3.3.4ℓを測る。



写真8 S T O 1 埋甕検出状況（北から）

## (2) 埋甕

埋甕はB-2区(S T O 1)とC-1区(S T O 2)の4層中層から2基検出された。F-3区(S T O 3)の4層下層から5層上層にかけて浅い掘り込みと縄文土器の底部のみが検出されたが埋甕と確定するにはいかないためここでは除外する。

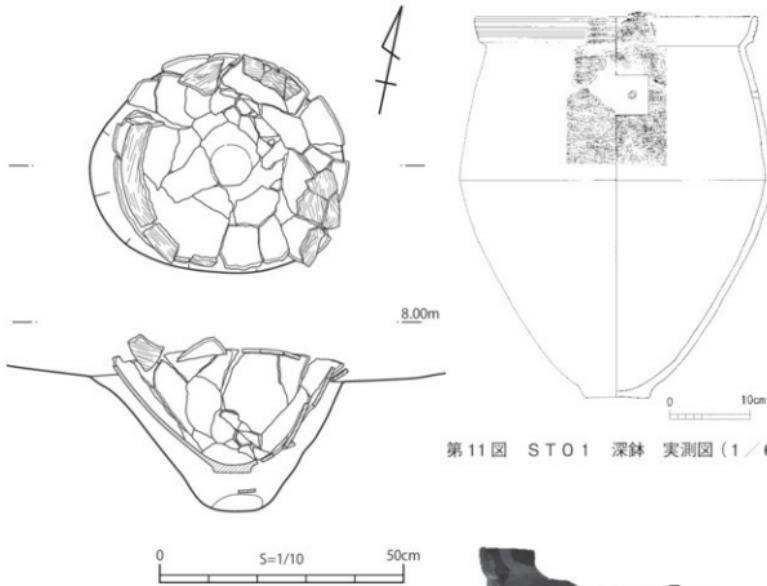
埋甕に使用された深鉢も容器であるのでその内容量を測定した。測定の方法は鉢の内面の高さを1cmの円柱の集合体と考えて、実測図の断面の内側の半径を器高1cmごとに測り計算した。

**S T O 1** B-2区4層中層から掘り込み非常に硬い5層上層まで径約50cm、深さ約30cmほど掘り込んだ土坑に直立に深鉢を据えている。深鉢の肩部から上は内側に崩れている。口縁部のほとんどは水田の耕作によって破壊されていた。深鉢の内部の埋土も半裁して観察したが4層の土と区別することはできなかった。また、深鉢の中からは遺物等は検出されなかった。この埋甕に使用された深鉢は縄文時代晩期前葉の古閑式の土器で、口縁部はやや外に開き、4本の沈線が引かれ、

写真9: SKO1 Burial Vessel Half-Cross-Section (View from the South). It shows a large, broken fragment of the vessel's base lying on the ground.



写真9 S T O 1 埋甕半截（南から）



第10図 STO 1 実測図 (1/10)

STO 2 C-1区4層中層から掘り込み非常に硬い5層上層まで径約5.5cm、深さ約3.5cmほど掘り込んだ土坑に直立に深鉢を据えている。深鉢の底部は抜かれ、掘り方上面に置かれていた。肩部より下を土坑に埋めていた。ほぼ完形で残存していたことから、肩部より上には盛り土等をしていたものと考えられる。抜いた底部を鉢を埋めた横に置いていたことは何らかの意味があるものと思われる。深鉢の埋土も半截して観察したが4層の土と区別することはできなかった。また、埋土中からは遺物等は検出されなかった。この埋甕に使用された深鉢は縄文時代後期後半の御領式の土器である。口縁部はやや内に傾き、2本の沈線が引かれている。肩部上にも1本の沈線が引かれている。調整は外面がヘラ削り・ミガキの後、丁寧にナデが施され、内面もヘラ削りの後ナデが施される。焼成はよく、色調は明乳褐色を呈する。胎土には微細な雲母片・砂粒を含む。内容量は約14.5ℓを測る。



写真10 STO 1埋甕 深鉢

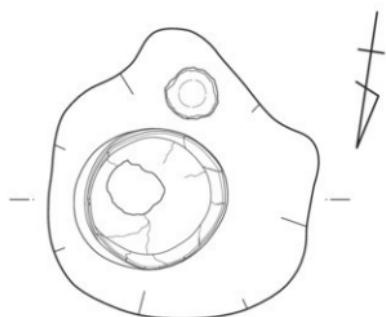


写真 11 STO 2 半截（北から）

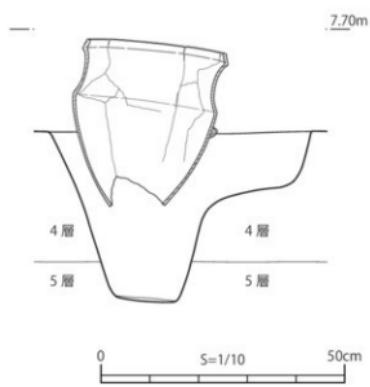
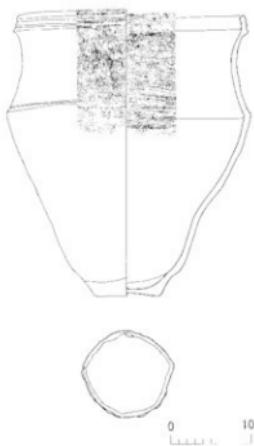


写真 12 STO 2 埋甕底部出土状況(北から)

第 12 図 STO 2 実測図 (1 / 10)  
0 S=1/10 50cm



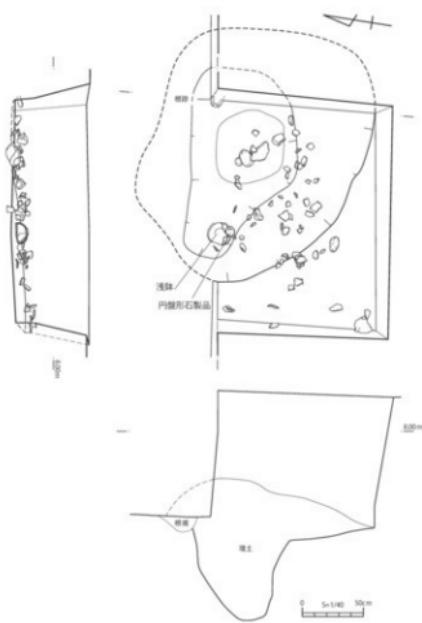
写真 13 STO 2 埋甕 深鉢



第 13 図 STO 2 深鉢実測図 (1 / 6)

### (3) 土坑（土壙墓）

C-2区、STO2より10mほど東の4層中層より土坑(STO4)が検出された。径約1.9m、深さ約80cmの土坑で5層下層まで掘り下げている。その上部には約30cmほどの盛土がなされ、その上面に浅鉢を伏せたもの、円盤形石製品、打製石斧、凹石、叩き石、縄文土器片などが置かれていた。浅鉢からSTO2の埋甕と同時期、縄文時代後期末から晩期初めのものと考えられる。STO1、STO2とそれぞれ10mほどの距離にあり、検出面も4層中層と同じであり、土坑上面の盛土、その上に置かれた遺物群を考えると土壙墓ではないかと思われる。



第14図 STO4 実測図 (1/40)



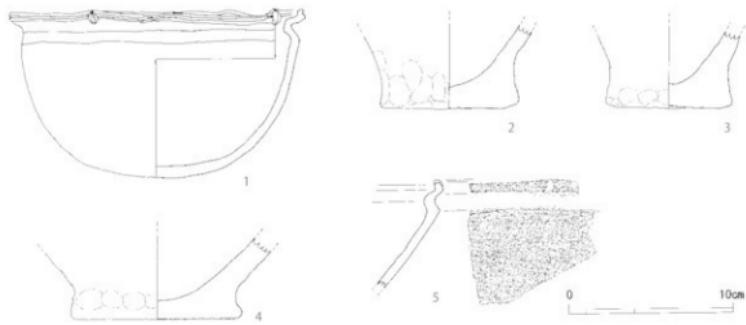
写真14 STO4 上部遺物状況(北から)



写真15 STO4 土坑(西から)

表3 STO4 出土 土器観察表

団版番号	器種	部位	法量(cm)		調整		色調		焼成	胎土
			口径	器高	器径	内面	外面	内面		
1	黒色磨研浅鉢		17.8	10.4	17	ミガキ	ミガキ	黒灰色	黒灰色	良
2	粗製深鉢	底部				ナデ	ヘラ削り・ナデ	黄灰色	黄褐色	あまり
3	粗製深鉢	底部				ナデ	ヘラ削り・ナデ	黒灰色	黄灰色	あまり
4	粗製深鉢	底部				ナデ	ヘラ削り・ナデ			微細な砂粒
5	黒色磨研浅鉢	口縁部				ミガキ	ミガキ	黒灰色	黒灰色	良



第15図 STO 4出土 土器実測図（1／3）



写真16 STO 4 出土土器

表4 STO 4 出土 石器観察表

図版番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	その他
1	打製石斧	安山岩	(10.6)	7.8	1.5	(125)	片側面に抉り
2	打製石斧	安山岩	6.5	(8.1)	1.4	(110)	横刃形
3	円盤形石製品	結晶片岩	6.9	7.7	2.9	190	
4	円盤形石製品	安山岩	8.1	8.8	2.1	170	
5	凹石	安山岩	4.6	(5.6)	1.7	(50)	小型
6	敲き石	安山岩	(10.6)	7.4	6.4	(855)	
7	石錘	安山岩	5.2	5.9	1.2	45	
8	スクレイバー	黒曜石	3.2	3.6	0.9	10	漆黒



第16図 STO 4 出土 石器実測図 (1 / 3)

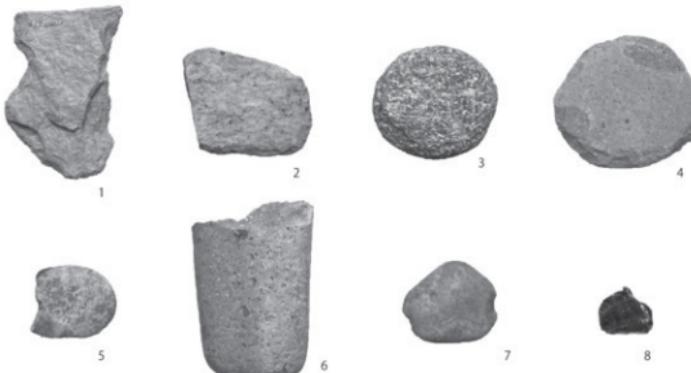


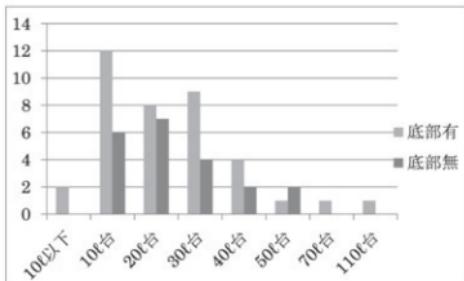
写真17 STO 4 出土 石器

#### (4) 埋甕について

九州地域では、埋甕は縄文時代後期から晩期にかけて出現する文化である。その用途については、胞衣・後産の処理・埋納、幼児葬、成人の二次葬などが考えられているが、まだ確定されるには至っていない。

今回の調査で検出された埋甕は底を抜いていないもの（ST01）と抜いたもの（ST02）があり、さらに、2基の埋甕からそれぞれ約10mほどのところに土壙墓と考えられる土坑（ST04）が検出された。

ここで、埋甕の底を抜く・抜かないで使用することに注目してその用途を考えると、あくまでも推論であるが、土壙墓が成人の埋葬用、小型で底を抜いている埋甕が胞衣の容器、大型で底を抜いていないものが幼児埋葬用と仮定することができないであろうか。そこで、県内、佐賀県、島原半島に埋甕が多いことから熊本県での出土例も加え縄文後期から晩期にかけての一覧を作り、さらに、上記の方法で図面上で内容量が測れるものを測定した。今回の調査で出土したものも含め59個の内容量が測定できた。そのうち、底を抜いていないものは38個測定できた。容量は6.2ℓから113.5ℓとなり、平均は30.2ℓであった。また、10ℓ毎に度数を調べると、10ℓ以下2個、10ℓ台12個、20ℓ台8個、30ℓ台9個、40ℓ台4個、50ℓ台1個、70ℓ台1個、110ℓ台1個となり、10～30ℓ台を中心とした大型のものまで幅広く使用されていた。底を抜いているものは、21個測定できた。容量は10.3ℓから58.6ℓとなり、平均は26.6ℓとなった。度数は10ℓ台6個、20ℓ台7個、30ℓ台4個、40ℓ台2個、50ℓ台2個となり、10～20ℓ台を中心とした大きさになっている。これらのことから、底を抜いていないものの中身の大きさは10～30ℓ台を中心として、さまざまなものであり、底を抜いているものの中身は10～20ℓ台を中心にある程度のものと考えられる。そこで、底を抜く・抜かないで埋甕の用途を推考すると上記のとおり底を抜いていない埋甕が乳児から幼児の埋葬用、抜いている埋甕が胞衣の容器と考えられなくはない。



第17図 埋甕容量度数分布図

表5 県内、佐賀・熊本県 埋甕出土遺跡一覧表

遺跡名	所在地	立地	時期	埋甕			報告書	遺跡名	調査年
				容量	型式	底部			
斑A遺跡	雲仙市（田東高来郡）国見町神代東里乙1618他（川北名、東里名）	標高8～12mの険高地					「斑遺跡」百人委員会埋蔵文化財調査報告 第4集・1974	1	
								2	
								3	
								4	
					径2類			5	
					径2類			6	
					径2類			7	
					径2～3類			20	
					径2～3類			21	
					径2類			22	
					径2類			23	
					径2類			24	
					径2類			25	

				種1 頭	26
				種2 頭	27
				種3 頭	28
				種4 頭	29
				種5 頭	30
				種6 頭	31
				種7 頭	32
				種8 頭	33
				種9 頭	34
				種10 頭	35
				種11 頭	36
				種3~4 頭	38
				種12 頭	39
				種13 頭	40
				種2~3 頭	49
				種14 頭	50
				種15 頭	51
				種16 頭	54
				「往古跡」百人委員会埋蔵文化財調査報告書第4集・1974	55
				〔6〕古田正隆・1974「高麗の鐵器時代カメツメ」『考古学論叢』2・高麗時代のカメツメ類考号・別府大学考古学研究会も参照	56
				0	1957
					第3.3章第1回
					第3.3章第2回
					第3.3章第3回
					第3.3章第4回
					第3.3章第5回
					第3.3章第6回
					第3.3章第7回
					第3.3章第8回
					第3.3章第9回
					第3.3章第10回
					第3.3章第11回
					第3.3章第12回
					第3.3章第13回
					第3.3章第14回
					第3.3章第15回
					第3.3章第16回
			23.8 三方面一例頭	有	「国内重要遺跡と埋蔵文化財調査報告書」第1集・1994
				有	「国内重要遺跡と埋蔵文化財調査報告書」第1~4集・1994
					1号カメツメ
					2号カメツメ
二ノ石道跡	島原市(田原高来郡)有明町 大三井町(芦原名字地辻)	丘陵上			「往古跡」前編
山原道跡	島原市(田原高来郡)有明町	台地			
野野道跡	南島原市(田原高来郡)有明町	台地			
波原道跡	南島原市(田原高来郡)有明町	海岸			古田正隆「高麗時代カメツメ」『考古学論叢』2・別府大学考古学研究会 1974
潮入道跡	南島原市(田原高来郡)布 施町(田原高来郡)	海岸			
中野舟川 道跡	南島原市(田原高来郡)深 江町				
京ノ汗道跡	雲仙市(田原高来郡)深地 町大字舟守字下坪	河岸段丘	23	無	「京ノ汗道跡」復興と文化財保護協会調査報 告書第2集・1994
			12.9	無	1号復興案
百花台	雲仙市(田原高来郡)久見 町大字百花台(或園)				2号復興案
柳石原道跡	島原市(田原高来郡)有明町 大野	畠状地上部			不詳
細中道跡	島原市下笠原町2435- 2.3445-3他	畠状台地下部			「柳石原道跡」百人委員会埋蔵文化財調査報 告第7集・1977.
					地相 40 粗製 有
					地相 粗製 有
					地相 粗製 有
					地相 21.3 粗製 有
					「長崎港埋蔵文化財調査年報」平成10年度調 査会 市155集・2000「概要の小報告、出土状況写真」1枚のみが掲載され、詳細不明
大野原道跡	島原市(田原高来郡)有明 町大字舟守名和田木丁・大三井乙B42-B46	台地			1号(仮) 2号(仮)
小原下道跡	島原市有明小原名和田 乙-B27・三之沢名和田 木丁・大三井乙B42-B46	海岸近くの丘陵上	後期 45.5 三方田式	有	「小原下道跡」島原市文化財報告 第12集
					SK60 2011
梅原道跡	南島原市深江町大木塙名 字塙原	畠状地先端	44.1	無	「梅原道跡」南島原市文化財調査報告書第 1集・2007
山の寺木 道跡	南島原市深江町山の寺木 原	畠状地頂部			「山の寺木道跡」島原市文化財報告 資料集
原山石石塁	南島原市北有馬町新田、原 ノ川	高原性台地上			資料集 資料集 資料集
下峰原道跡	諫早市鏡ヶ井町	山裾部		無 無	青島直康編「下峰原道跡」1990
					1号復興 2号復興
深遊道跡	長崎県深遊町 5丁目	海岸砂地	19.1	有	「深遊道跡」人類学者吉学研究報告 第1号・1967
			56.1	有	1号復興 2号復興 65
野田ノ久保 道跡	大村市立福寺・佐助町寺	尾根上			「九州横断自動車道跡」長崎県文化財 調査報告書第98集・1990
					埋蔵状構
基城遺跡	大村市荒崎町・荒瀬	丘陵先端部			第1号復興 第2号復興 第3号復興 第4号復興 第5号復興
					1966~ 87
黒丸道跡	大村市黒丸町 大村市黒丸町 507番地1~352 地	沖積地		無 —	「黒丸道跡」大村市文化財調査報告書第12集・1997
					カメツメ
黒丸道跡	大村市冲田町	沖積地	39.9	有	「大丸跡」大村市文化財調査報告書第201集・2009
					2007~8

ケイマン ゴー遺跡	西海市横瀬ケイマンゴー	台地上	12.3	右 書 第52集	「ケイマンゴー遺跡」長崎県文化財調査報告書 第178号 79
--------------	-------------	-----	------	-------------	-----------------------------------

## 埋甕 佐賀県内出土一覧

遺跡名	所在地	立地	時期	埋甕	報告書	遺構名	調査年
鍋上遺跡	鳥栖市鍋上町	椎高地斜面	後期後半	27.7 太郎泊 有	SJ1501		
				17.6 三万亩 有	SJ1502		
				無	SJ1503		
				30.6 有	SJ1504		
				32.4 有	SJ1505		
				無	SJ1506		
				18.4 有	SJ1507		
				17.6 有	SJ1508		
				18.4 有	SJ1509		
				26 有	SJ1510		
				21 有	SJ1511		
				33.6 有	SJ1512		
				46.1 有	SJ1513		
				40 有	SJ1514		
				32.6 角井原 有	SJ1515		
				無	SJ1516		
				島井原 有	SJ1517		
				無	SJ1518		
				御腰~広口 有	SJ1519		
				無	SJ1520		
				9.6 有	SJ1521		
				無	SJ1522		
				無	SJ1523		
				無	SJ1524		
				無	SJ1525		
				無	SJ1526		
				無	SJ1527		
				無	SJ1528		
				26.3 有	SJ1529		
				有	SJ1530		
				有	SJ1531		
				有	SJ1532		
				20.1 有	SJ1533		
				16.7 有	SJ1534		
				有	SJ1535		
				無	SJ1536		
鍋上遺跡	鳥栖市鍋上町	椎高地斜面	後期後半	有	SJ1537		
				有	SJ1538		
鍋上遺跡	鳥栖市鍋上町	椎高地斜面	後期後半	有	SJ1539		
				無	SJ1540		
玉室六本松遺跡	神埼町大字志波屋字六本松	舌状の浜轟台地上	後期後半	10.3 無	SJ1541		
				「玉室六本松遺跡」神埼町文化財調査報告書第9集 1983 SJ001	1982		
二和田山遺跡	神埼町古野・里野・田東畠原村	舌状の浜轟台地上	後期後半	33.5 有	SJ1542		
				「二和田山遺跡」1984(4)年度調査報告書(昭和59年4月1日~) 1984 SJ003	1978~79		
大門西遺跡	佐賀市立町大字金立字一本杉	舌状の浜轟台地上基部	後期後半	36.8 有	SJ1543		
				「大門西遺跡~大崎貝合遺跡とその周辺の古墳群調査報告書(1)」 1980 SJ001	1978		
大門遺跡	佐賀市立町大字金立字一本杉	舌状の浜轟台地上基部	後期後半	22.5 有	SJ1544	1	
				「大門遺跡(第二次調査)」佐賀県文化財調査報告書 第1回集 1973	1973		
西原遺跡	佐賀市久保原町大字川久保	丘陵上	後期後半	無	SJ1545	3	
				後期後半	SJ1546		
西原遺跡	佐賀市久保原町大字川久保	丘陵上	後期後半	35 有	SJ1547		
				無	SJ1548		
西原遺跡	佐賀市久保原町大字川久保	丘陵上	後期後半	35 有	SJ1549		
				無	SJ1550		
鶴林遺跡	佐賀市久保原町大字川久保	舌状の浜轟台上	後期後半	32.9 有	SJ1551		
				「鶴林遺跡~久州新発白動車沿岸埋蔵文化財調査報告書(3)」 1983 SJ003	1980		
丸山遺跡	佐賀市久保原町大字川久保	丘陵上	後期後半	10.8 有	SJ1552		
				「丸山遺跡~1980(1)年度調査報告書(1)」 1980 SJ008	1977~82		
西の西古窯	多久市多久町西の原	丘陵上	後期後半	有	SJ1553		
				無	SJ1554		
田田遺跡	神埼町大字浅成	平地	後期	25.8 有	SJ1555		
				無	SJ1556		

## 埋甕 熊本県内出土一覧

遺跡名	所在地	立地	時期	埋甕	報告書	遺構名	調査年
柏山遺跡	天草郡河浦町今富	台地上	後期後半	天城 有	「柏山遺跡」熊本国文化財調査報告書第10集 1989		1987
				天城 無		1号	
				天城 無		2号	
				天城 無		3号	
				御腰 有		4号	
				天城 有		5号	
				天城 無		6号	
				天城 有		7号	
				天城 有		8号	
				天城 有		9号	
古開原遺跡	下益城郡豊野町大字下郷字清水寺	台地上	後期後半	天城 有	「古開原遺跡」豊野町教育委員会 2000		1992~93
				天城 無		11号	
				天城 無		12号	
				天城 無		13号	
				天城 有		14号	
				天城 無		15号	
				天城 無		16号	
				天城 無			
				天城 無			

			地點	古聞	有		17号	
			地點	天城	無		18号	
			地點	古聞	有		19号	
			地點	天城	有		20号	
			地點	天城	有		21号	
			地點	天城	有		22号	
			地點	天城	有		23号	
			地點	天城	無		24号	
			地點	天城	有		25号	
			地點	古聞	有		26号	
			地點	天城	有		27号	
			地點	天城	有		28号	
			地點	天城	有		29号	
			地點	天城	有		30号	
			地點	天城	有		31号	
			地點	古聞	無		32号	
			地點	天城	無		33号	
			地點	天城	有		34号	
			地點	天城	有		35号	
古聞原道路	下益城郡豊野町大字下郷字清水寺	台地上	地點	25.4	天城	有	「古聞原道路」豊野町教育委員会 2000	1992~93
			地點	天城	無		36号	
			地點	天城	無		37号	
ワクド石道跡	柴池郡大津町杉木	台地上	地點	47.5	天城	有	「ワクド石道跡」群馬県文化財調査報告第164集 1999	1993~96
			地點	天城	有		38号	
			地點	113.5	天城	有	39号	
上中野道路	柴池郡栗橋町大字中川	林斜面上	地點	32.9	天城	有	「上中野道路」栗橋町文化財報告第1集 1998	1996~97
			地點	天城	有		40号	
			地點	天城	無		501号	
			地點	天城	有		502号	
			地點	天城	無		901号	
			地點	天城	有		1001号	
			地點	天城	無		1301号	
			地點	天城	有		1303号	
			地點	天城	有		1303号	
大久保道路	柴池郡七城町林原	河岸段丘上	地點	16.2	天城	有	「大久保道路」群馬県文化財報告第143集 1994	1986~87
			地點	天城	有		1号	
			地點	天城	無		2号	
			地點	天城	有		3号	
			地點	天城	有		4号	
			地點	天城	無		5号	
			地點	天城	有		6号	
西田道路	柴池郡七城町大字西田	台地上	地點	17.5	西平	無	「西田道路」群馬県文化財調査報告第135集 1993	1989~90
			地點	西平	無		1号	
			地點	西平	有		2号	
			地點	西平	有		3号	
			地點	西平	無		4号	
			地點	西平	有		5号	
			地點	西平	無		6号	
伊佐上野道路	柴池郡加志村	台地上	地點	15.0	西平	無	「伊佐上野道路」群馬県文化財調査報告第70集 1990	1982~84
			地點	西平	有		7~1号	
			地點	西平	有		1~2号	
			地點	西平	無		1~3号	
			地點	西平	有		3~1号	
			地點	西平	無		3~2号	
			地點	西平	有		3~3号	
			地點	西平	無		3~4号	
太郎沢道路	群木市太郎沢町	台地の斜面	地點	17.0	三万田	無	A区S008	1994~97
			地點	三万田	無		A区S010	
			地點	三万田	有		A区S013	
			地點	三万田	有		A区S014	
			地點	三万田	無		A区S045	
			地點	三万田	有		A区S050	
			地點	三万田	有		A区S058	
			地點	三万田	無		B区S010	
			地點	三万田	無		B区S011	
			地點	西平	有		B区S012	
			地點	西平	無		B区S013	
			地點	西平	有		B区S014	
			地點	西平	無		B区S015	
			地點	西平	有		B区S022	
			地點	西平	無		B区S043	
			地點	西平	無		C区S001	
			地點	西平	有		D区S011	
			地點	西平	無		E区S007	
			地點	西平	有		F区S008	
			地點	西平	無		G区S009	
			地點	西平	有		G区S004	
			地點	西平	無		G区S005	
			地點	西平	有		G区S007	
			地點	西平	無		G区S008	
			地點	西平	有		G区S009	
			地點	西平	無		H区S001	
			地點	西平	有		H区S002	
			地點	西平	無		I区S002	
			地點	西平	有		I区S004	
			地點	西平	無		I区S005	
			地點	西平	有		I区S015	
			地點	西平	無		I区S016	
			地點	西平	有		I区S018	
			地點	西平	無		I区S019	
			地點	西平	有		J区S002	
			地點	西平	無		J区S003	
			地點	西平	有		J区S008	
			地點	西平	無		J区S019	
			地點	西平	有		J区S020	
			地點	西平	無		J区S021	
			地點	西平	有		J区S022	

						J区502.3
						10-01 号
						39-09 号
						39-12 号
						40-03 号
						41-02 号
						41-05 号
						41-06 号
						42-01 号
						42-02 号
						42-03 号
						42-04 号
						42-05 号
						42-06 号
						42-07 号
						42-08 号
						42-09 号
						42-10 号
						42-11 号
						42-12 号
						42-13 号
						42-14 号
						42-15 号
						42-16 号
						42-17 号
						42-18 号
						42-19 号
						42-20 号
						42-21 号
						42-22 号
						42-23 号
						42-24 号
						42-43 号
						42-57 号
						45-13 号
						45-14 号
						46-03 号
						46-04 号
						46-05 号
						46-06 号
						49-52 号
						49-64 号
						1号
						2号
						3号
						4号
						5号
						6号
						7号
						8号
						9号
						10号
						11号
						12号
						13号
						14号
						15号
						16号
						17号
						理堂通稿 1991～95
						1号
						2号
						3号
						4号
						5号
						6号
						7号
						8号
						9号
						10号
						11号
						12号
						13号
						14号
						15号
						16号
						17号
						18号
						19号
						20号
						21号
						22号
						A 0.1
						A 0.2
						A 0.3
						A 0.4
						A 0.5
						A 0.6
						A 0.7
						A 0.8
						A 0.9
						A 1.0
						A 1.1
						A 1.2
						A 1.3
						1990～92
						1993

中室遺跡	人吉市中神町	河岸段丘上	縄陶片			無		A 2.0	1990・92
			縄陶片			有		A 2.1	
			縄陶片			有		A 2.2	
			縄陶片			有		A 2.3	
			縄陶片			有		B 0.1	
			縄陶片			無		B 0.2	
			縄陶片			有		B 0.3	
			縄陶片			有		B 0.4	
			縄陶片			有		B 0.5	
			縄陶片			有		B 0.6	
			縄陶片			有		B 0.7	
			縄陶片			有		B 0.8	
			縄陶片			無		C 0.1	
			縄陶片			無		E 0.1	
			縄陶片			有		E 0.2	
			縄陶片			無		E 0.3	
			縄陶片			有		E 0.4	
			縄陶片			無		E 0.5	
			縄陶片			有		E 0.6	
			縄陶片			有		E 0.7	
			縄陶片			有		E 0.9	
			縄陶片			有		E 1.0	
			縄陶片			有		E 1.1	
			縄陶片			有		E 1.2	
			縄陶片			有		E 1.3	
			縄陶片			有		E 1.4	
梅治遺跡	山鹿市大字城	食地上	縄陶	38.7		有		2号	1998・99
北郷・木根子遺跡	栗原市木根子	河岸段丘上	縄陶	16.3		無	「北郷・木根子遺跡」栗原市文化財調査報告書第16集 2004	3号	
			縄陶	59.6		無	「北郷・木根子遺跡」栗原市文化財調査報告書第16集 2001	1号	1997
								2号	

## 参考文献

- 木下 忠『埋甕—古代の出産習俗—』雄山閣 考古学選書 1981  
 渡辺 誠『縄文時代甕棺の基礎的研究・1』『考古学論叢』2 別府大学考古学研究会 1974  
 賀川光夫『縄文時代のカメ棺の出現と弥生文化前段の問題』同上  
 古田正隆『長崎県の縄文時代のカメ棺』同上

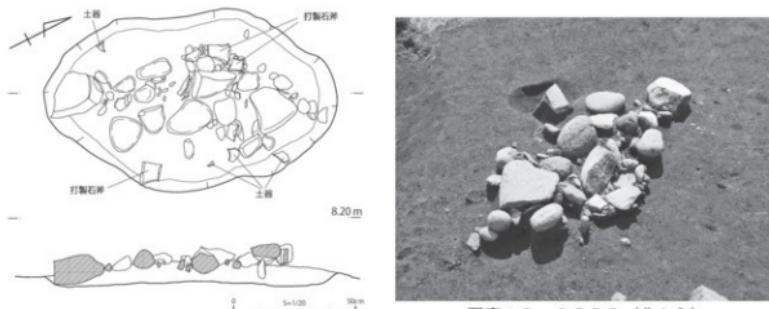
## (5) 集石遺構

集石遺構はC-2区の4層中層から3基検出された。3基とも自然流路（N R 0 1）の西側沿いに位置する。礫と小礫を集めその中に石器や土器片を含む。その検出面や供出した遺物から埋甕と同時期、縄文時代後期末から晩期にかけての遺構と考えられる。今回検出された3基の集石遺構は礫だけでなく石器や土器片を多く含み、埋甕や土塙墓の傍に位置することから祭祀・宗教的な遺構ではないかと考えられる。

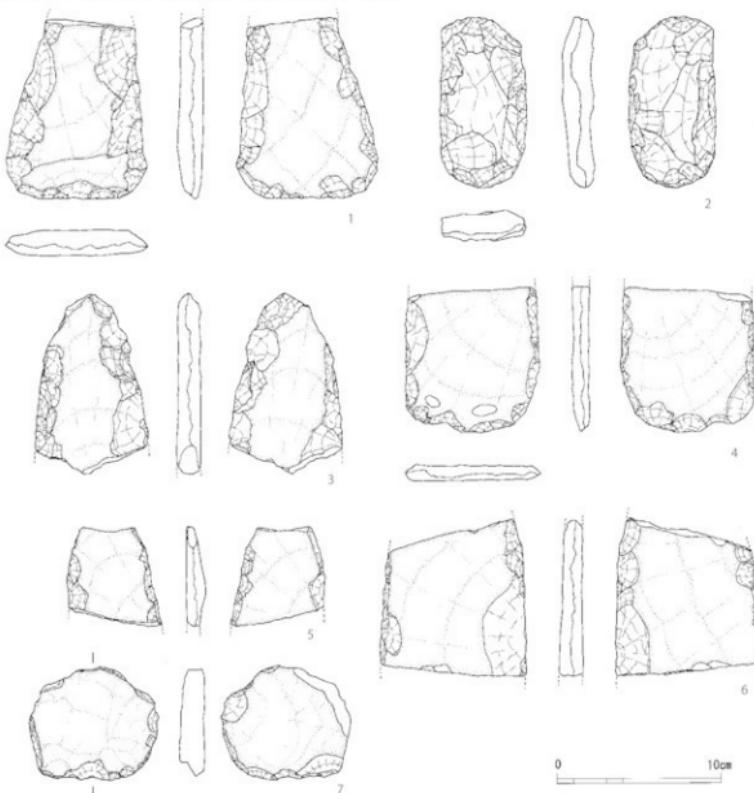
表6 県内縄文時代後期末から晩期の集石遺構一覧

遺跡名	遺構名	規模 (cm) 長径	規格 (cm) 短径	掘り込み (cm)	その他	報告書
朝日山遺跡	第1号集石	80	65	18		「朝日山遺跡」小浜町文化財調査報告書第1集 1981
	第2号集石	75	75	15		
京ノ坪遺跡		80	75		実測図・写真なし、埋甕ソバ	「京ノ坪遺跡」猪俣町文化財保護協会調査報告書第2集 1981
黒丸遺跡	S X 1	500	400	なし		「黒丸遺跡」長崎県文化財調査報告書第201集 2009
	S X 2	260	240	なし	埋甕検出	

**SS02** C-2区の自然流路沿いの4層中層から検出された。長径約120cm、短径約75cmの楕円形の深さ7cmほどの浅い掘り込みに20cm台から拳大の礫を中心に小礫も含めつくなっている。その中に打製石斧6、円盤形石製品1、黒曜石剥片9、サヌカイト剥片1、土器片18を含んでいた。土器片は縄文晩期の粗製土器を中心内5点は丹塗りの跡や胎土から弥生土器と見られるものも含む。弥生土器は集石の位置が自然流路の傍であるため上流の竹松遺跡方面からの流れ込みと考えられる。また、火を焚いた跡や被熱を受けた礫はなかった。



第18図 SS02 (集石遺構) 実測図 (1/20)



第19図 SS02 出土石器実測図 (1/3)

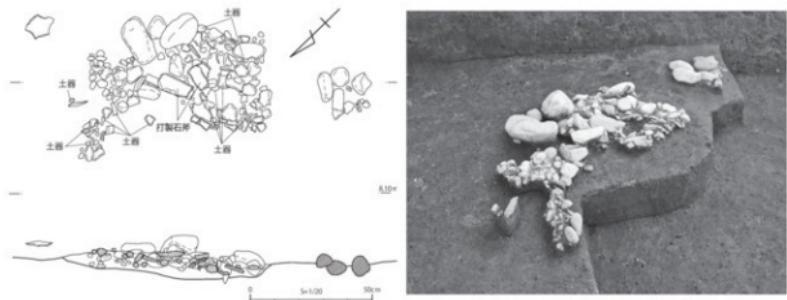


写真19 SSO2 出土石器

表7 SSO2出土石器観察表

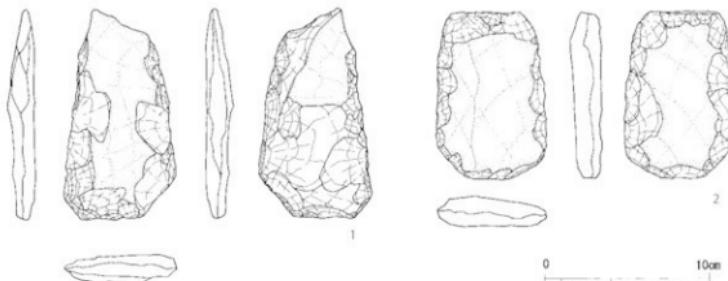
図版番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	その他
1	打製石斧	安山岩		8.8	1.6		バチ形
2	打製石斧	安山岩	10.4	5.3	1.9	150	短冊形
3	打製石斧	安山岩		7.0	1.5		バチ形基部
4	打製石斧	安山岩		8.4	1.1		短冊形刃部
5	打製石斧	安山岩		5.9	1.2		短冊形基部
6	打製石斧	安山岩		9.1	1.5		短冊形基部
7	円盤形石製品	安山岩	8.0	7.0	1.7	130	

SSO3 SSO2の1mほど南西のC-2区の自然流路沿いの4層中層から検出された。長径約7.5cm、短径約6.0cmの平面プランに5cmほどの浅い掘り込みの中に数個の砾と多数の小砾を入れ、つくられている。その中に打製石斧2、黒曜石剥片10、サヌカイト剥片4、弥生土器片10、縄文土器片23点が含まれる。焼けた砾や焦土面はない。



第20図 SSO3実測図 (1/20)

写真20 SSO3 (北から)



第21図 SSO3出土石器実測図 (1/3)

表8 SSO3出土石器観察表

団版番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	その他
1	打製石斧	安山岩	13.0	6.9	1.7	180	バチ形
2	打製石斧	安山岩	10.4	6.8	1.9	185	短冊形

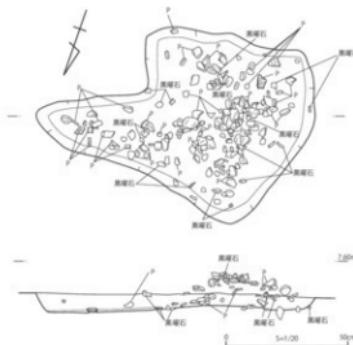


写真21 SSO3出土石器

SSO4 SSO2・3の5mほど西のC-2区の自然流路沿いの4層中層から検出された。長径約115cm、短径約80cmの平面プランに5cmほどの浅い掘り込みの中に多数の小砾を入れ、つくられている。その中に黒曜石剥片27、弥生土器片13、縄文土器片63点が含まれる。焼けた砾や焦土面はない。



写真22 SSO4 (北から)



第22図 SSO4実測図 (1/20)

第23図 SSO4出土土器実測図 (1/3)

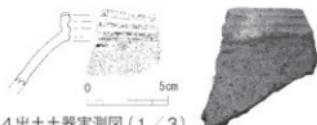


写真23 SSO4出土土器

表9 SSO4出土土器観察表 (縄文時代後期末から晩期)

器種	部位	法量(cm)		調整		色調		焼成	胎土
		口径	器高	内面	外面	内面	外面		
浅鉢(波状口縁)	口縁			ヘラ削り、ナデ	横ナデ	明黄褐色	黄褐色	良	砂粒・黒雲母を含む

## (6) 壁柱穴

E・F-2区からF-3区にかけての5層上面から径20cm深さ10cmほどの小ピットが8穴検出された。推定平面プラン長径約5m、短径約4.5mの楕円に並ぶ。F-2区の自然流路の東側からF-6区にかけては竹松農場の水田を作る際に4層まで削平されており縄文時代後期末から晩期にかけては包含層・遺構面はなくなっていたため、5層上面での検出となった。埋甕の検出面から推測すると縄文時代後期末から晩期にかけての遺構面から5層上面までの層厚は20から30cmと考えられるので同時期の遺構と考えると小ピットの深さは30から40cmあったと想定できる。調査区の北壁面にも竪穴建物のものと考えられる掘り方が2層と5層の間にかすかに確認でき、壁柱で上部構造（屋根部分）を支えるタイプのものと考えられる。これは九州では縄文時代後期中葉から普及するタイプである。残存する小ピットの深さが浅かったためか遺物は検出されなかったが、自然流路（NR01）の対岸、すなわち西側に隣接するF-1区の4層中層からは縄文時代後期末から晩期と考えられる大量の遺物が出土していることからも当時代の竪穴建物の壁柱穴群を見てよいと考えられる。

### 参考文献

渋谷文雄「竪穴住居の小柱穴位置について」『松戸市立博物館紀要5号』1998.3

林 潤也「九州における縄文時代竪穴住居の変遷」『日韓新石器時代の住居と集落』

第7回日韓新石器時代研究会発表資料集 2007

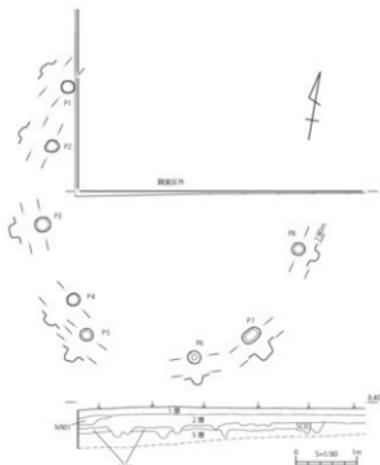


写真2.4 SC03 (南西から)

第2.4図 SC03 (竪穴建物壁柱穴群) 実測図 (1/80)

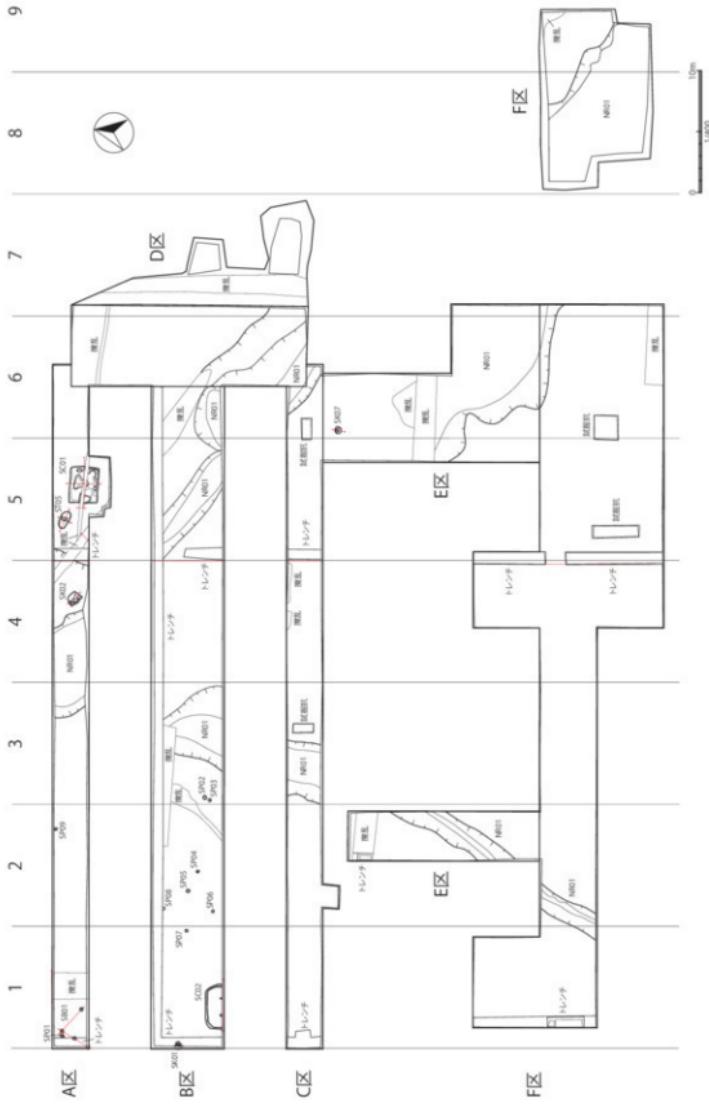
表10 県内縄文時代後期末から晩期竪穴建物一覧

遺跡名	所在地	時期	立地	遺構名	平面プラン	高さ(m)	直径(m)	伊	柱穴	埋甕	報告書
留ノ下人遺跡	大村市池田字留ノ下	後期初期	耕作地	円形	4.5	4.5	無	竪窓4、内4	無	「九州縄文自転車道建設に伴う縄文文化財緊急発掘調査報告書V」長崎県文化財調査報告書第72集 1995	
				円形	4	4	無	不明	無		
佐世保市下木山町字佐世保	後期後葉	後背湿地	楕丸方形	4.8	無	不明	無	無	「佐世保遺跡実測調査報告書」佐世保市教育委員会 1994		

社道跡	霞ヶ浦市国見町神代	後削後葉	沖積台地	円形	3.5~4		無	5	有	【西久保ににおける縄文後期相模原城成立の意義を探る】 国見高校社研部報告 第11号 1970
				SB01	圓方形	7.98	5.38	無	多數	
				SB02	圓方形	7.28	2.2	無	多數	
				SB03	圓方形	7.4	3.2	無	不明	
				SB05	圓方形		3.35	無	壁面8	
				SB06	方形	2.94	2.66	無	壁面2、内2	
				SB07	圓方形	7.03	4.12	無	壁面10、内5	
				SB08	圓方形	7	4.8	無	壁面19、内4	
				SB09	圓方形	6.78	4.2	無	壁面2、内3	
				SB10	圓方形	9.72	4	無	壁面2、内5	
				SB11	圓方形			無		
				SB16	圓方形	7		無		
				SB17						
				SB19	不定形	7.22	5.92	無	多數	
				SB20						
				SB22	圓方形	4.34	2.5	無	不明	
				SB24	圓丸方形	3.64		無		
				SB25	圓方形	8.13	4.98	無	5	
				SB26	圓方形	5.74	4.44	無	不明	
				SB27	圓方形		6.08	無	壁面7、内4	
小原下道跡	島原市有明町大三東	後削後葉	丘陵	SB28	圓方形	8.96	4.98	無	壁面6、内6	有 【小原下道跡】島原市文化財調査報告書第12集 2011
				SB29	圓丸方形	4.18	3.92	無	壁面4、内2	
				SB31	方形	4.2	3.94	無	壁面3、内3	
				SB32	橢円形	4.1	4.02	無	不明	
				SB41	圓方形	4.7	4.64	無	不明	
				SB42	圓方形	8.32	5.64	無	壁面6、内4	
				SB43	圓方形	7.58	4.18	無	壁面7、内5	
				SB44	圓方形	8.4	4.81	無	壁面4、内3	
				SB46	圓方形	8.41	5.06	集石印	壁面4、内4	
				SB47	圓方形	7.44	4.28	無	壁面13、内4	
				SB48	圓方形		4.96	無	壁面8、内3	
				SB49	圓方形	9.2	5.48	無	壁面7、内2	
				SB50	圓方形	8.2	5.28	無	壁面4、内3	
				SB53	圓方形	7.42		無	不明	
				SB57	圓方形	9.46	4.5	無	壁面5、内2	
				SB60	圓方形	6.9	4.74	無	壁面7、内2	
				SB71	圓方形	9.92		無	不明	
				SB76	圓方形	8.62	4.6	無	壁面2、内3	
				SB77	圓方形	4.32	4.16	無	壁面5	
				SB78	圓方形		3.46	無	壁面2、内2	

## 2 弥生時代

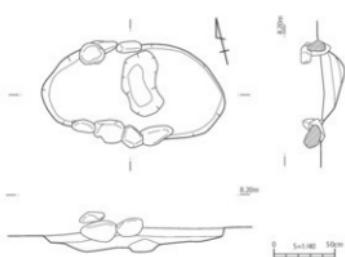
弥生時代の遺構はA-5区の4層上層から配石墓（S T 0 5）と竪穴建物（S C 0 1）が検出された。どちらも覆土から縄文時代の土器片や石器片が出土し、4層中層からは埋甕や大量の縄文時代後期末から晩期にかけての遺物が出土していたため両遺構も縄文時代のものかと思われたが郡川を挟んで位置する冷泉遺跡からS T 0 5と同タイプの弥生時代末と考えられる配石墓が検出されていることからこれらの遺構も弥生時代末のものとした。（第25図）



第25図 弥生時代以降遺構配置図 (1/400)

### (1) 配石墓 (S T O 5)

A-5区の4層上層から1基検出された。長径約150cm、短径約80cmの椭円形の平面プランに深さ約20cmの土坑を掘り、両長辺に砾を4個と3個配置されている。覆土も4層と良く似た暗黒褐色土が入っていた。覆土中からも土坑の床上からも遺物の出土はなかった。検出された現状では配石墓としたが、冷泉遺跡の調査で報告されているように土坑の周囲全体に砾が対置されていないこと、富の原遺跡で検出された弥生時代中期から後期初頭にかけての甕棺の多くが土坑に甕を埋設するときに砾をその支えに入れていることなどから木棺等の埋設の支えに砾が置かれていた可能性も考えられる。



第26図 STO5実測図 (1/40)



写真25 STO5 (北から)

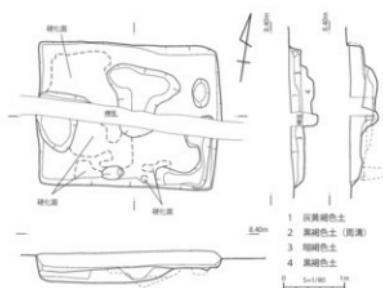
### 参考文献

『黒丸遺跡ほか発掘調査概報』Vol.3 1998～2002 大村市文化財調査報告第25集 2003

『富の原』大村市文化財調査報告書 第12集 1987

### (2) 竪穴建物 (S C 01)

A-5区の4層上層から1基検出された。平面長方形で長径約3.1m、短径約2.3mを図る。竪穴の西半には床面と考えられる硬化面が残存していた。床面までの残存深度が約20cm、掘り方の底までが20cm確認された。また、東西に擾乱の溝が、中央と西側に樹根による擾乱と思われるものがあった。竪穴建物に伴うと見られる柱穴は確認できなかった。遺物は覆土から石鎚、打製石斧、砥石、黒曜石剥片の破片が4点出土したが竪穴の床面からの出土はなかった。



第27図 SC01実測図 (1/80)



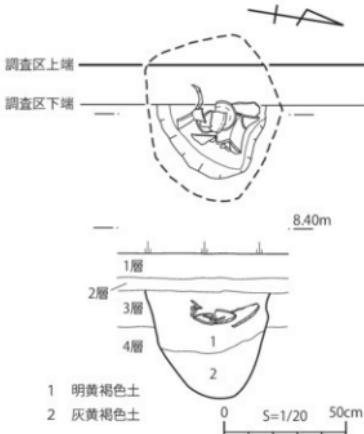
写真26 SC01 (北から)

### 3 古墳時代以降

#### (1) 土坑

古墳時代の土坑はB-1区の西壁沿いの3層上面から1基（SKO1）とA-5区の自然流路（NRO1）の底の5層から1基（SKO2）検出された。

**SKO1** B-1区の西壁沿いの3層上面から掘り込む形で検出された。古墳時代中期、5世紀後半と考えられる土師器の甕片2点と塊1点、壺1点が入っており、廃棄土坑と見られる。



第28図 SKO1実測図 (1/20)



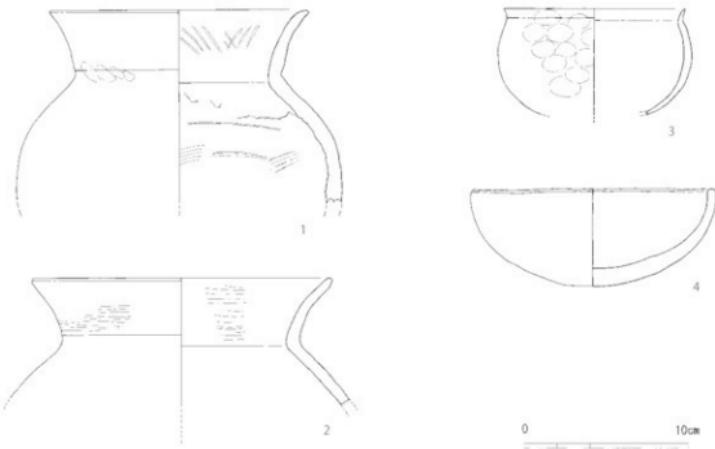
写真27 SKO1検出状況 (東から)



写真28 SKO1半截 (東から)



写真29 SKO1出土土器

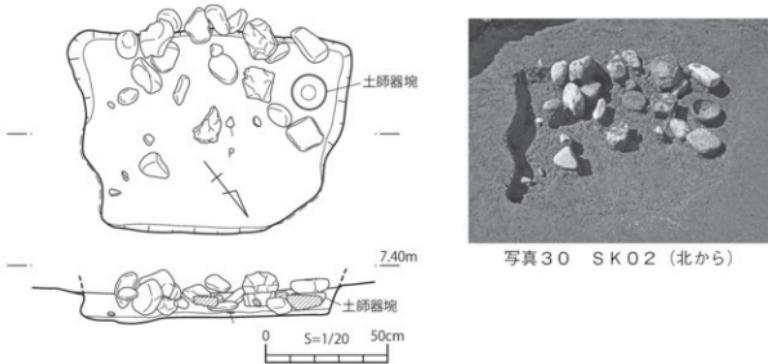


第29図 SKO 1出土土器実測図 (1/3)

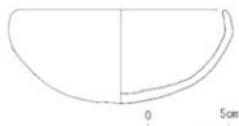
表11 SKO 1出土土器観察表

図版番号	器種	部位	法量 (cm)		調整		色調		焼成	胎土
			口径	器高	内面	外面	内面	外面		
1	土師器 壺	口縁	16.2	20.4	刷毛目	ナデ	明褐色	明褐色	良い	雲母・長石・砂粒を含む
2	土師器 壺	口縁	18.8		刷毛目	ナデ	明褐色	明褐色	良い	微細な砂粒を含む
3	土師器 壺	口縁	11.4	12.0			赤褐色	赤褐色	あまり	きめ細かい
4	土師器 壺	口縁	15.2	6.1	20.4	削り	ナデ	明褐色	明褐色	良い
										石英・長石・雲母等を粒を含む

SKO 2 A-5区の自然流路 (N R 0 1) の底の5層から検出された。自然流路の氾濫によって上部は殆ど破壊され深さ約10cmが残存していた。底面には砾と土師器塊が配置されていた。



第30図 SKO 2実測図 (1/20)



第31図 SKO 2出土墳実測図（1／3）

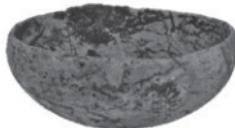


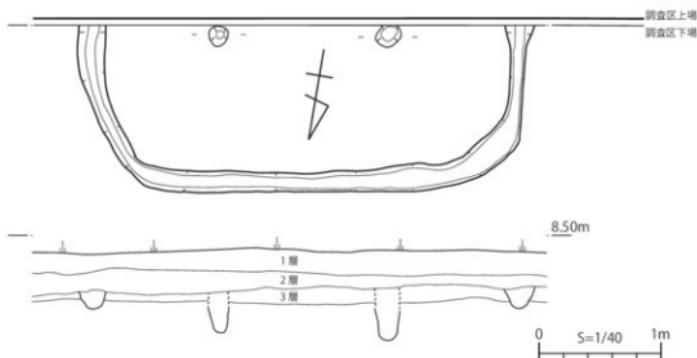
写真31 SKO 2出土墳

表12 SKO 2出土土器観察表

図版番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土
			口径	器高	器径	内面	外面	内面	外面		
1	土器類 墳		12.8	5.8	13.8	ナデ	ヘラ削り、ナデ	黄褐色	明褐色	良い	緻密で良い

## (2) 竪穴建物周溝

B-1区の南壁側の3層上面から竪穴建物の壁周溝と支柱穴2基が検出された（SC 02）。床面等は水田の造成により削平されていた。形状は隅丸方形の中央に4支柱穴のタイプの竪穴建物と考えられる。規模は残存長3.3mほどである。時代はSK 01と同じ検出面であることから5世紀後半と見られる。この遺構に伴う遺物の出土はなかった。



第32図 SC 02実測図（1／40）

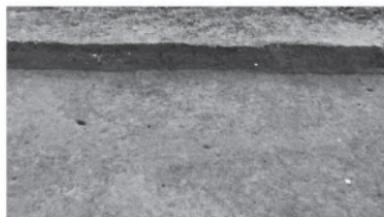


写真32 SC 02検出状況（北から）

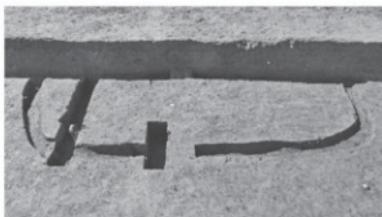


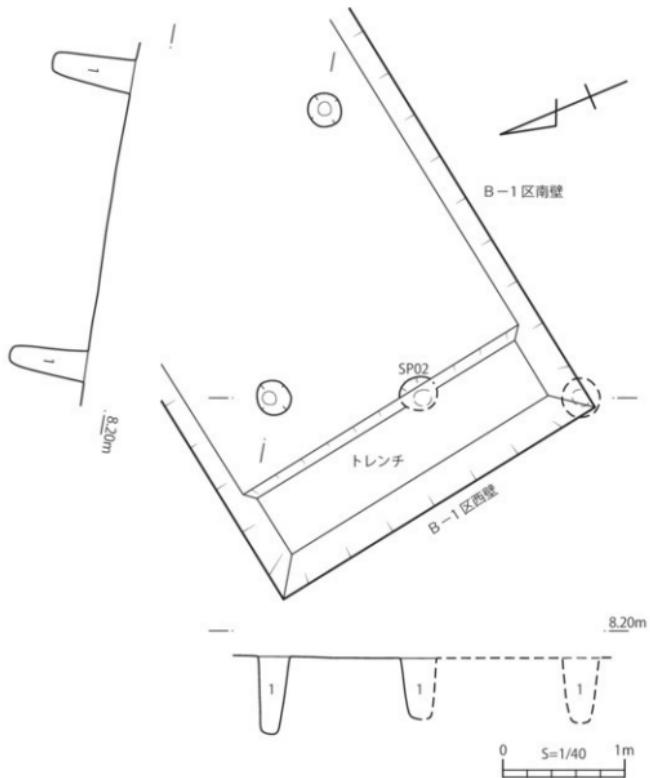
写真33 SC 02（北から）

### (3) 掘立柱建物

A-1区3

層上面から北東から南西に約125cm間隔で2間、北西から南東に240cm間隔で1間の掘立柱建物が検出された(SB01)。

柱穴の大きさは径約30cm、深さは50から70cmほどである。埋土は粘性がない灰黄褐色土が入る。柱底は観察できなかった。検出面から古墳時代中期以降の遺構と考えられる。遺物の出土土はなかった。



第33図 SB01実測図(1/40)



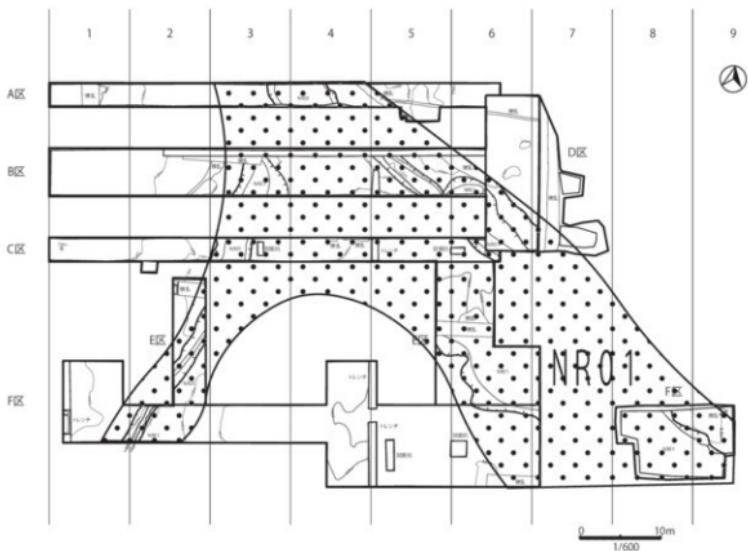
写真34 SB01(北から)



写真35 SB01 SP02断面(西から)

## VII 自然流路 (N R O 1) の遺物

今回の調査で郡川、東南方向から調査区で南北に分岐して東から西に流れる自然流路が確認された(第34図)。これは阪口和則氏が大村市史のなかで確認されている郡川の坂口から放射状に流れている旧河道の内の2本と一致する(阪口和則「旧河道について」『大村市史』第一巻第一章第四節第七項)。2層下から5層中層までがこの自然流路(N R O 1)により抉られている。この自然流路は5層の古土層を削り流れており、5層堆積後の1万年前頃から1957年7月25日から26日にかけて発生した諫早大水害時もJR線や国道を越えて郡川から大村湾に向ふ氾濫していることからその間、幾多も氾濫があり形成されたと考えられる。それを裏付けるように出土する遺物も縄文時代後期末から近現代のガラス瓶や農機具まで混在して出土した。



第34図 調査区内自然流路 (N R O 1) 状況図 (1/600)

### 1 自然流路 (N R O 1・旧河川) 出土の宗教関係遺物

1は五輪塔の空風輪である。地元西彼半島産の滑石製である。空輪・宝珠の部分はやや大きめである。風輪部分は上半分に蓮弁が丁寧に彫出されている。上と下半分の間には2重の沈線が彫られ、下半分にも沈線で何か彫出されていたものと思われるが破損していて図柄は判明できない。その風輪の下には火輪・傘の部分にはめ込んだと考えられる柄(ほぞ)と考えられる部分が一部残っている。平安末～鎌倉時代の建塔と考えられる。

2は宝塔の露盤と考えられる。これも地元西彼半島産のきめ細かで良質な緑色片岩製である。側2面に格狭間が彫出されているが2区に分け彫られるのが一般的であるので元々の横幅は20cmほどあったと考えられる。鎌倉時代(1200年から1300年代初め)のものと思われる。(こ

れらの石造遺物の評価については大石一久氏にご教授いただいた。)

大石氏によると旧大村藩地域では石塔は、まず13世紀後半（鎌倉時代後期）をピークとして平安時代後期から室町時代後期にかけて西彼島産の緑色片岩を使用して建塔され、大型ないし中型で石質、彫出技術も優れたものが多く、造塔者は中世の有力寺院の高僧・有力名主層以上の者とのことである。（大石一久「第六章 石造物から見た中世・大村の様相と仏教文化」『新大村市史』第2巻、中世編 2014）

郡川周辺には中世に郡七山十坊といわれる寺院群があり、文献から鎌倉末から室町初期には既に存在していたとみられる。その中の極楽寺が今回の調査区の南に隣接していたと考えられ、今回出土した五輪塔の空風輪および宝塔の露盤との関係が窺われる。

3・4はキリスト教徒の用いる数珠のことである。数珠全体ではコントツ（conta）またはロザリオという。当初は青色系で風化により乳白色を呈する鉛ガラス製で心棒に溶けたガラスを巻き取る方法でつくられている。3はさらにガラスが軟らかいうちにまわりに五つの縞れを入れたカボチャ型に成形している。

ロザリオの祈りは16世紀のヨーロッパで確立し、そのタイプも十五玄義の默想を行いやすい50の倍数の珠を重ねたものに固定されていく。日本にも宣教師たちの手によってロザリオの数珠が持ち込まれ、キリストianたちが自身の徳を重ねようとコントツを手に入れていたものと考えられる。

大村藩では大村氏12代当主大村純忠が1563年（永禄6年）日本初のキリストian大名となり、長崎港を開港し、領内の寺社を破壊し、領民にキリスト教を強制した。しかし、秀吉が1587年、純忠の死後2か月後にバテレン追放令をだし、さらに、その19年後の1606年（慶長11年）に大村藩初代藩主、大村喜前がイエズス会の神父との交わりを断ち、その若干名を監禁するというキリストian統制を実施し、領内の多くのキリストianが棄教したとされる。このことから今回出土したコントツは1563年から遅くとも1605年頃のものではないかと考えられる。

今回出土したガラス製のカボチャ型のコントツの出土例を見ていきたい。まず、県内であるが、長崎市の興善町遺跡の八尾宅跡から出土している。この宅の当主若江・八尾城主池田丹後守正は1563年、ヴィレラ神父から洗礼を受け1582年、明智光秀の乱により領地を失っている。原城跡からは青色のガラス製のものが2点出土している。1637年から1638年にかけての島原の乱のときのものと考えられる。県外では大分の中世大友府内町遺跡から4点出土している。その内第8次・第48次調査区から出土のものは乳白色の鉛ガラス製で、第28次調査区出土のものはカリガラス製である。大友宗麟によって府内にキリストian文化が隆盛を極めた1570年から1587年ころにかけてのものと考えられている。

参考文献 浅野ひとみ・後藤晃一「コントツ論」「純心人文研究」第14号 2008

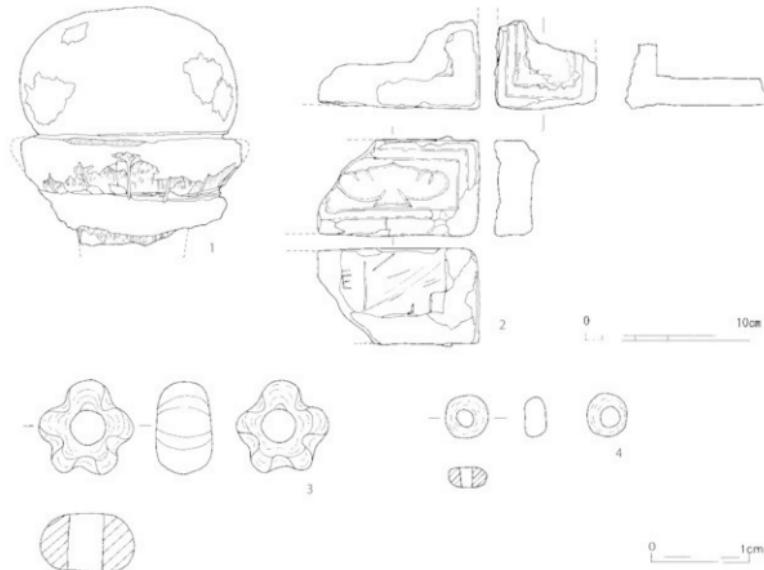
後藤晃一「コントツ論」「キリストian遺物の考古学的研究」株式会社 2015

結城了悟「キリストian遺物」「興善町遺跡」長崎市教育委員会 1998

註 大石氏のご教授によると大村藩におけるバテレン追放は以前は1605年（久松氏論考）といわれていたが、イエズス会カタログや宣教師書簡資料から1606年2月24日が正しいとされる。

表13 カボチャ型コンタ出土遺跡一覧

遺跡名	数量	年代	出土遺跡など	報告書
興善町遺跡	1	1563～1582	八尾宅跡	「興善町遺跡」長崎市教育委員会 1998
原城跡	2	1637～1638	島原の乱	「原城跡」南有馬町文化財調査報告第2集 1996
中世大友府内町跡	4	1670～1587		「豊後府内1」大分県教育厅埋蔵文化財センター調査報告書第1集 2005 「豊後府内4」大分県教育厅埋蔵文化財センター調査報告書第9集 2006



第35図 自然流路（N R O 1）出土 宗教関係遺物実測図 1・2（1／3） 3・4（2／1）



写真36 自然流路（N R O 1）出土 宗教関係遺物

## 2 その他の遺物

### (1) 土器 (第36・37図、写真37・38)

1～5は漁撈用の土錘である。6～9は縄文晩期の深鉢である。6は口縁部と屈曲部外面に刻目突帯を有し、晚期山の寺式並行期に位置づけられる。7は横方向、やや叉状の刺突文を持つ。8は外面に条痕文を施し、内側からの穿孔をもつ。9は粗製深鉢の底部で、外反する張り出し部と厚みを持ち、突帯文期に長く続く器形である。10は黒色磨研された縄文晩期末葉(山の寺夜臼式並行期)の精製浅鉢で、11もリボン状突帯を屈曲部に施した黒川式並行期の精製浅鉢と思われる。

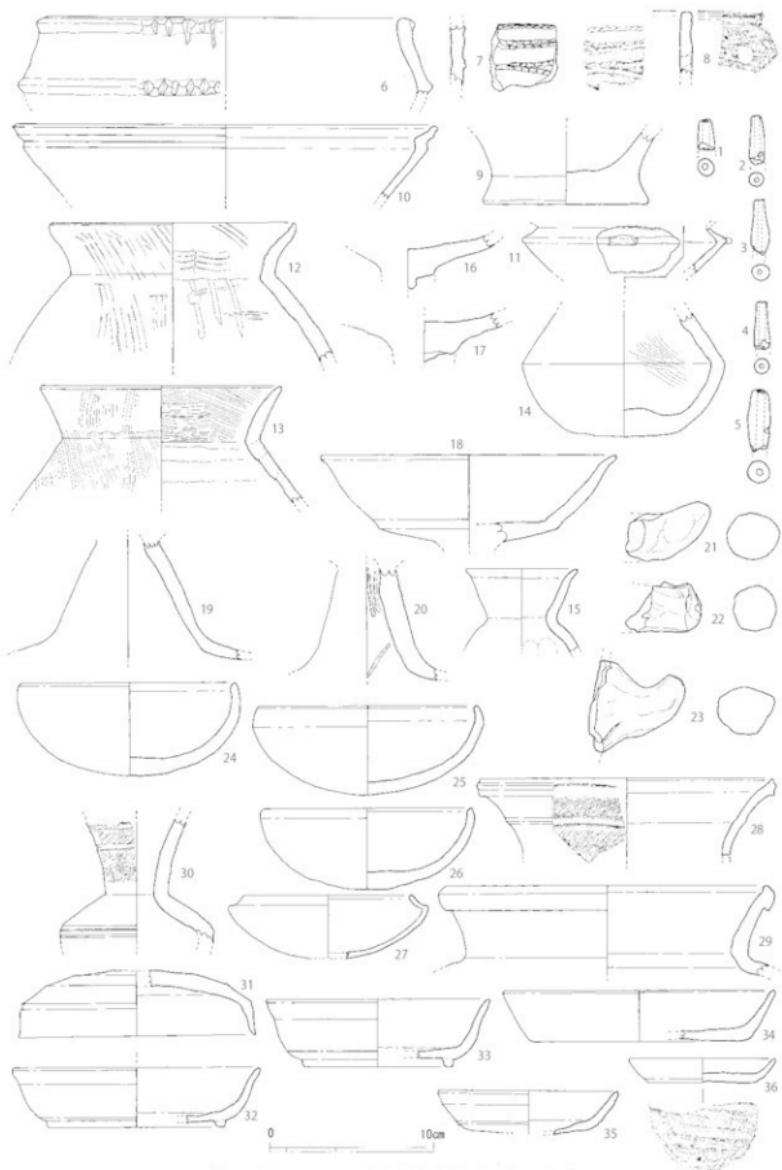
12・13は土師器甕であり、調整はいずれも粗い。14は丹塗りの土師器の長頸壺で、15はロクロ成形の土師器壺である。16～20は土師器の高杯であり、流路でのローリングが激しく、外面調整は窓いがたい。成型や内面の調整も精緻なものではなく、流路の上流の水辺(竹松遺跡地内)における集落祭祀での部屋の廃棄が用途として想定される。21～23は瓶の取手であり、古墳時代後期の北九州での竈付き竪穴住居の普及と関連し、流路上流の竹松遺跡内での6世紀半ばの集落の盛行に対応する。24～26は古墳時代の土師器碗である。27は蓋の受け部を持ち、薄手に整形された須恵器模倣の土師器の杯である。

28～34は古墳後期から古代前期の須恵器である。28は頸部に二重の精緻な波状文を施した須恵器甕であり、29は壺の口縁部である。30は列点文を頸部に持つ須恵器の甕である。31は須恵器の杯蓋で、全体の器形はやや扁平だが、体部と口縁部を区切る稜線からはTK43並行の牛頭編年ⅢB期(6世紀後半)に比定される(舟山他編2008)。九州内の同時期の杯蓋の中では扁平で14cm台とやや大ぶりであり、体部下半の稜線は畿内の一段階前(TK10・陶邑Ⅱ-2)の特徴を引き継いでいる。同時期の肥後の元米の山窓跡・当尾窓跡(Ⅲ期)出土品に法量や器形が類似する(坂本健郎1980参照)が、口縁近くの内湾がやや強い。32・33は高台付の碗で、体部と底部の境が丸く不明瞭で口縁が外反する。VII A期新相(標式:宮ノ本9号窓)ないしVII B古相(石坂C-1号窓)の特徴を備え、8世紀半ばに位置付けられる。34は口径17cmの須恵器皿である。体部が鋭角に立ち上がり口縁が丸みを帯びる点から、8世紀前半に位置づけられる(中島2015)。32～34は郡家・周辺施設の整備が進み、大人数への給食活動に備えた段階の地方官司の土器様式を示す。

35は回転ヘラ切りの土師杯で、口径11cm程度で体部上方がやや内湾し、底部中央が下垂することから、11世紀前半の杯a(山本信夫編年X期)に相当する。36は口径9.2cmで回転糸切りの土師器小皿aであり、12世紀後半に当たる。37～41は平安期の高台付の土師器碗である。37は直線的だがやや外反する体部と高台位置から9世紀前半(山本VII期)、38は体部に丸みがあるが高台は低いため9世紀後半(山本VII期)、39・40は高台が高く細くなつて口縁が外反に向かう10世紀前半(山本VIII期)、41は高台が縮小して体部が再び内反して緩やかな弧を描く11世紀(山本X・XI期)に、いずれも時期比定される。42は古代の土師器甕で、口縁部に最大径を有する器形である。43は鞆の羽口で、融解した先端に鉄分が付着している。44～46は中世の輸入陶磁器である。44は外面の体部下半から底部が無釉の白磁、45・46は青磁である。

### 参考文献

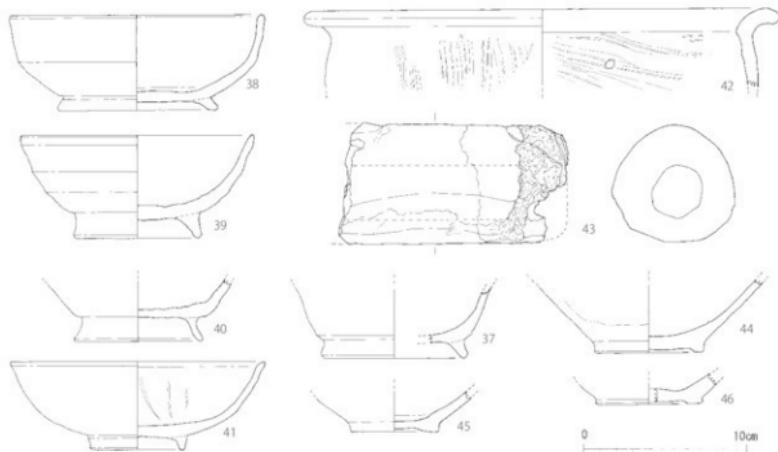
松本建郎「須恵器生産をめぐる諸問題」(『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ—須恵器窓跡・瓦窓跡・陶磁器窓跡』)熊本県文化財調査報告第48集)1980



第36図 N R O 1 出土土器実測図1 (1 / 3)



写真37 N R O 1出土土器 1



第37図 N R O 1 出土土器実測図2 (1/3)

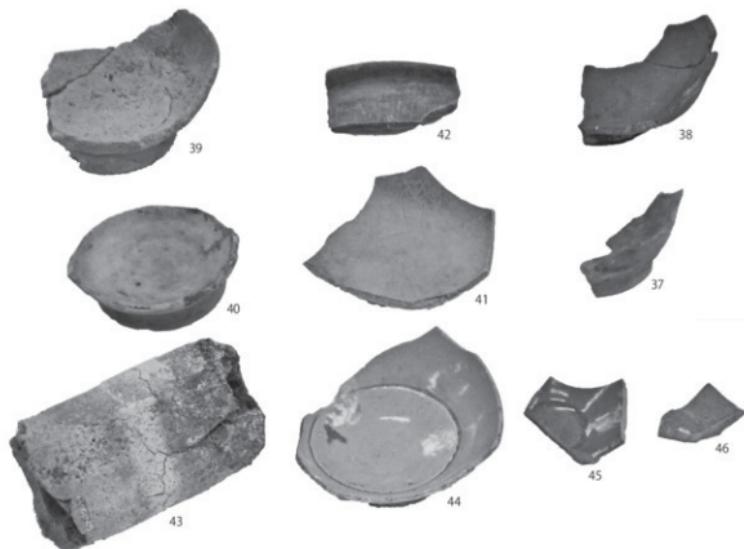


写真38 N R O 1 出土土器2

表14 NRO1出土土器観察表

団体 番号	器種	部位	出土区	法量(cm)		調整		色調		焼成	胎土	備考		
				口径	器高	径差	内面	外面	内面	外面				
1.	土鉢	—	A-4区	—	(1.9)	1.1	—	—	—	墨褐色	良好	雲母	欠損あり	
2.	土鉢	—	B-3区	—	(3.0)	0.95	—	—	—	褐灰色	良好	雲母	欠損あり	
3.	土鉢	—	B-3区	—	(3.45)	1.15	—	—	—	褐灰色	良好	雲母	欠損あり	
4.	土鉢	—	B-3区	—	(2.95)	1.0	—	—	—	灰色	良好	雲母	欠損あり	
5.	土鉢	—	F-2区	—	(3.85)	1.4	—	—	—	褐色	良好	長石・雲母	欠損あり	
6.	深鉢	口縁部	B-3区	23.7	—	—	ナテ	ミガキ・突変文	浅黃褐色	褐色	良好	長石・金雲母	刮削あり	
7.	深鉢	脚部	E-2区	—	—	—	横方向ナテ	ミガキ・刺突文	に赤い褐色	褐色	普通多し	—	—	
8.	深鉢	口縁部	E-2区	—	—	—	横方向ナテ	条文	墨褐色	褐色	良好	雲母	穿孔あり	
9.	深鉢	底部	A-3区	—	(4.5)	10.5	ナテ	ミガキ・黄褐色	褐色	甘美	石英・雲母	粗製・平底	—	
10.	浅鉢	口縁部	E-2区	26.6	—	—	丁寧なナテ	横方向のミガキ	墨褐色	褐色	普通	角閃石	墨色摩研 摩滅	
11.	浅鉢?	脚部	B-3区	—	—	132	丁寧なナテ	横方向のミガキ	に赤い褐色	褐色→墨褐色	良好	雲母・石英	リボン状突変 黒色摩研 摩滅	
12.	土師器骨	口縁部 脚部	C-6区	15.4	(8.7)	—	横・直角	右下がりのヘラカッタリ	褐色	褐色	甘美	石英・長石・雲母・赤色粒子	内面くびれ部に輪積み形成層が3段残る	
13.	土師器底	脚部	A-4区	15.1	(7.2)	—	横方向ハケ目	右下がりのハケ目	褐色	明赤褐色	甘美	やや島	—	
14.	土師器底	脚部 底部	B-4区	—	—	6.0	右下がりのハケ目 目調整+ナメリ	横方向のミガキ	灰黄色	明赤褐色	良好	真	内面底部は粗いヘラカッタリ	
15.	土師器底	口縁部	C-6区	7.0	—	—	横ナメリ/脚押さ	ロクロ+ナテ	浅黃褐色	浅黃褐色	良好	赤色粒子	—	
16.	土師器底	脚部	A-3区	—	—	—	横ナメル	横ナメル	褐色	褐色	やや島	石英・長石・雲母	摩滅らしい	
17.	土師器杯	脚部	B-3区	—	(2.5)	—	横ナメル	不明	に赤い褐色	褐色	やや島	結晶片岩・石英・赤色粒子	ローリング著しい	
18.	土師器杯	脚部	A-4区	18.4	(5.4)	—	ハケ目+ナテ	回転ナメル	黄褐色	黄褐色	やや島	石英・長石・雲母・赤色粒子	ローリング著しい	
19.	土師器杯	脚部	B-4区	—	(7.4)	—	右上がりのハケ目 調整+棒ナメ	不明	に赤い褐色	黄褐色	やや島	雲母	ローリング著しい	
20.	土師器杯	脚部	A-4区	—	(7.0)	—	ハケナメスリ	不明	褐色	褐色	良好	ローリング著しい	—	
21.	瓶	手	A-3区	—	—	—	—	—	—	褐色	良好	長石・角閃石	器體に貼付タイプ	
22.	瓶	手	A-3区	—	—	—	—	—	—	灰白色	良好	良好	—	
23.	瓶	手	B-5区	—	—	—	—	—	—	黑色	良好	雲母	—	
24.	土師器瓶	变形	A-4区	13.7	5.7	13.8	丁寧なナテ	丁寧なナテ	褐色	褐色	良好	石英	丸底 麻純	
25.	土師器瓶	ほぼ平行	A-4区	13.6	5.5	14.4	丁寧なナテ	丁寧なナテ/口縁付近に指ナメ	褐色	褐色	良好	良好	先底 外周底にケズリ調整	
26.	土師器瓶	口縁一部	A-4区	13.0	5.0	13.4	指ナテ	指ナテ	浅黃褐色	褐色	良好	石英・雲母・赤色粒子	口縫付近に鉛付着 砂や平底	
27.	土師器杯	ほぼ平行	A-4区	10.4	3.9	12.4	回転方向のナテ	ミガキ	褐色	橙→黒色	良好	雲母	擦痕模倣杯	
28.	須恵器底	口縁部	E-6区	18.4	—	—	ロクロ	ロクロ+流狀文	褐色	灰白色	良好	—	僅かに突起を揉んで脚部外間に二段の波状文を施す	
29.	須恵器底	口縁部	B-3区	20.0	(5.6)	—	ロクロ	ロクロ	灰白色	灰白色	良好	石英	—	
30.	須恵器	須	A-3区	—	(7.65)	—	ロクロ	ロクロ+点突文	灰白色	灰→灰白色	良好	—	須底中央に列点突文あり	
31.	須恵器底	口縁一部	A-4区	14.8	4.1	14.8	ロクロ	ロクロ	灰白色	灰白色	やや不規	石英・赤色粒子	やや扁平 天井部は厚いが、内面は薄い	
32.	須恵器底	口縁部	C-4区	15.4	3.7	15.4	ロクロ	ロクロ	明赤褐色→灰白色	灰白色	不規	—	高台付き瓶 底径11.0cm 内面の擦痕不規	
33.	須恵器底	口縁一部	C-4区	14.0	4.2	14.0	ロクロ	ロクロ	灰白色	灰白色	やや島	石英	高台付き瓶 底径9.2cm 貼付高台	
34.	須恵器底	口縁一部	B-5区	17.0	3.15	17.0	ロクロ	ロクロ	褐色	褐色	やや島	—	底径13.4cm	
35.	土師器杯	口縁一部	C-3区	11.3	(2.7)	11.3	ロクロ	ロクロ+ヘラナメリ+ナメ	浅黃褐色	浅黃褐色	良好	雲母	細a 存在率2/3 底径7.65cm	
36.	土師器皿	口縁一部	C-6区	9.2	1.5	9.2	ロクロ	ロクロ/素切り	浅黃褐色	浅黃褐色	良好	石英・赤色粒子	存在率1/2 底径6.8cm	
37.	土師器杯	口縁一部	F-2区	—	(4.5)	—	ロクロ	ロクロ	に赤い褐色	に赤い褐色	やや島	高台付き瓶 底径9.1cm 麻純	—	
38.	土師器杯	口縁一部	F-2区	15.8	5.9	15.8	ロクロ	ロクロ+黒色	褐灰色	黒色	良好	石英・雲母	高台付き瓶 底径9.8cm	
39.	土師器杯	口縁一部	F-2区	14.5	6.4	14.5	ロクロ	ロクロ	灰白色	褐色	やや島	石英・角閃石	高台 内面麻純 底径8.0cm	
40.	土師器杯	口縁一部	E-2区	—	(3.85)	—	ロクロ	ロクロ	浅黃褐色	浅黃褐色→黒色	やや島	—	高台 内面黒色 麻純 底径8cm	
41.	土師器杯	口縁一部	F-2区	15.8	5.5	15.8	ロクロ+突変文?	ロクロ	灰白色	灰白色	良好	—	底径5.9cm	
42.	須恵器底	口縁部	B-3区	29.6	—	—	右下がりハケ目/口縁付脚ナメ	強い縮のヘラカッタリ	に赤い褐色	赤褐色	良好	—	内面に窪みあり	
43.	縁器口	—	E-2区	—	7.5	14.3	—	—	に赤い褐色→灰白色	やや島	—	先端に縁が付着し、村井が灰色に変化	—	
44.	白磁碗	脚部	E-2区	—	(4.5)	—	施釉	施釉/露胎	灰白色	灰白色	良好	—	底径6.8cm	—
45.	青磁碗	脚部	C-6区	—	(2.5)	—	施釉	施釉	オリーブ黄色	オリーブ黄色	やや島	—	底径5.6cm 内外面に薔薇・唐草	に目録模
46.	青磁碗	底部	E-2区	—	(1.8)	—	施釉	裏面施釉 高台 内は部分施釉	裏面施釉 高台	—	—	—	底径6.6cm 幅広高台	—

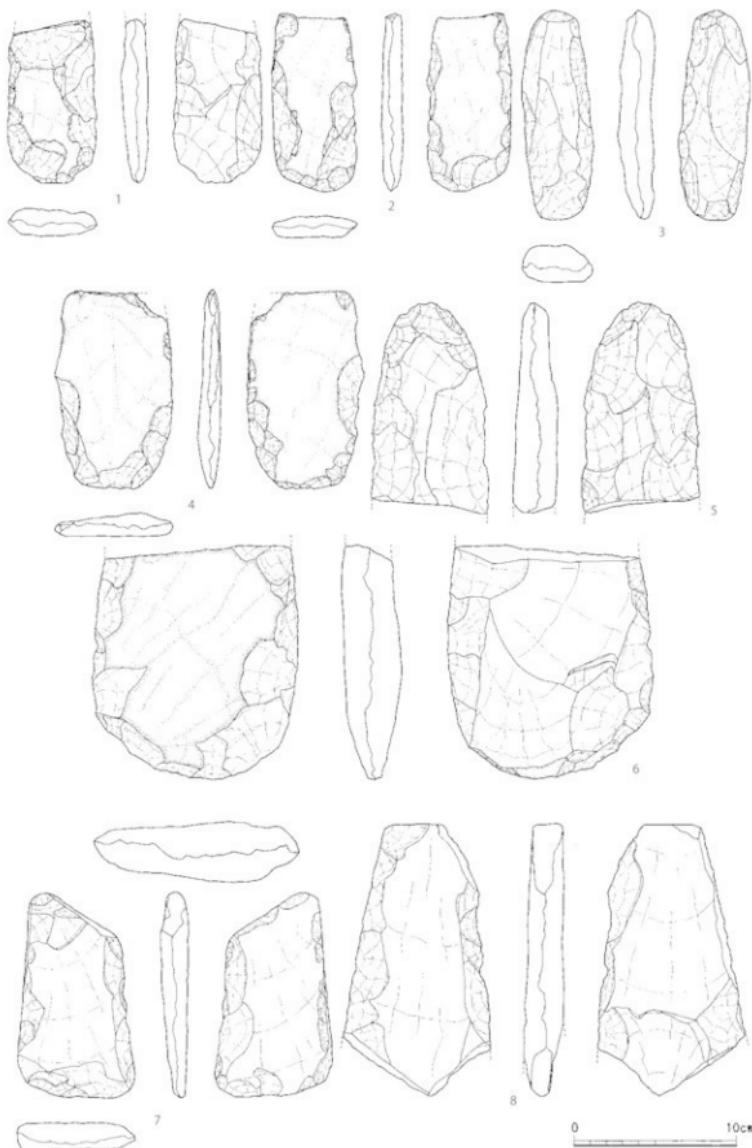
(2) 石器 (第38・39・40図、写真39)

1～10は、いずれも安山岩製の打製石斧である。近隣遺跡の出土例から縄文後期・晩期に位置づけられ、共伴土器の年代とも符合する。多良山系を侵食した郡川の流域で広く石材の採取が可能である。1～6は短冊型で、3のみが完形である。6は復元最大長30cm以上にも達する超大型品であり、祭祀具としての象徴的用途も想定される。総重量は1600 g前後となると思われる。7～9は撥型で、8は使用による刃部欠損が見られる。10はラケット型だが、残存率が低い。11・12は木材加工に用いられる磨製石斧で、11は蛇紋岩製、12は安山岩製である。13は縱長の安山岩製の敲石で、上部に円形の窪みを持ち、下端の刃部に使用痕が見られる。14は円板状の凹石で、周囲4ヶ所にも使用痕の窪みがある。

15～19は黒曜石製の石鎌である。15・17・18・20が鍔形、16・19が円基で、16のみが正三角形状の全体形状を示す。17は最大長40mm以上の大型製品の脚部のみが残存する。18のみが半透明の青白色を呈す石材であり、残りは腰岳系の漆黒色の石材を使用している。21・22は黒曜石製の石錐で、いずれも基部を欠き、先端刃部が僅かに欠損して廃棄されたものと考えられる。

表15 N R O 1出土石器観察表

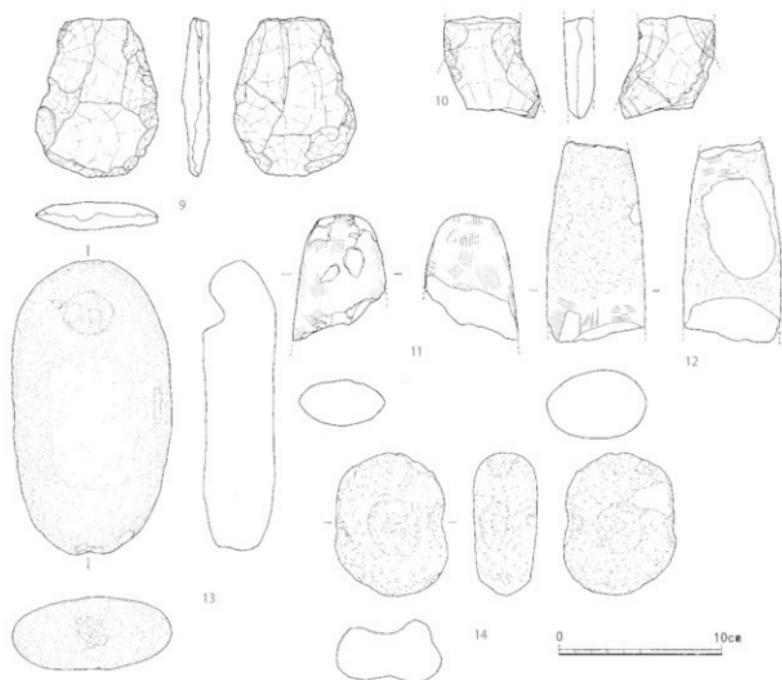
図版番号	器種	出土地区	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	打製石斧	F-2区	安山岩	(110)	64	17	—	短冊型
2	打製石斧	A-4区	安山岩	(108)	52	13	—	短冊型
3	打製石斧	A-4区	安山岩	127	43	22	170	短冊型 完形
4	打製石斧	B-5区	安山岩	(121)	72	14	—	短冊型
5	打製石斧	B-6区	安山岩	(129)	72	27	—	短冊型 基部のみ残存
6	打製石斧	B-3区	安山岩	(143)	126	37	(855)	短冊型 30cm以上の超大型
7	打製石斧	B-4区	安山岩	(125)	72	12	—	撥型
8	打製石斧	F-2区	安山岩	(166)	(91)	25	—	撥型 刃部欠損
9	打製石斧	E-2区	安山岩	(96)	75	17	—	撥型
10	打製石斧	E-2区	安山岩	(61)	(59)	18	—	ラケット型 基部、両側刃部欠損
11	磨製石斧	B-3区	蛇紋岩	(77)	(57)	(28)	—	下半欠損
12	磨製石斧	F-2区	安山岩	(122)	61	42	—	上端下端欠損
13	敲石	E-2区	安山岩	179	97	44	880	丸い窪み 下端に使用痕あり
14	凹石	F-2区	安山岩	88	68	39	275	裏表及び側面四方向に窪み
15	石鎌	C-3区	黒曜石	21.0	17	4.0	0.97	鍔形 完形品
16	石鎌	C-3区	黒曜石	21.0	(22)	3.5	(0.98)	円基 正三角形状
17	石鎌	B-5区	黒曜石	(27.0)	(14)	5.0	(1.29)	鍔形 大型品の片側のみ残存
18	石鎌	A-3区	黒曜石	(20.0)	(15)	3.0	(0.54)	鍔形 両側欠損
19	石鎌	E-2区	黒曜石	(27.0)	(20)	4.0	(0.85)	円基 両側欠損
20	石鎌	B-3区	黒曜石	(20.0)	(15)	3.5	(1.52)	鍔形 両側欠損
21	石鎌	B-5区	黒曜石	(40.5)	(21)	11.0	8.08	基部欠損
22	石鎌	E-2区	黒曜石	(38.0)	20	9.0	(6.97)	基部欠損



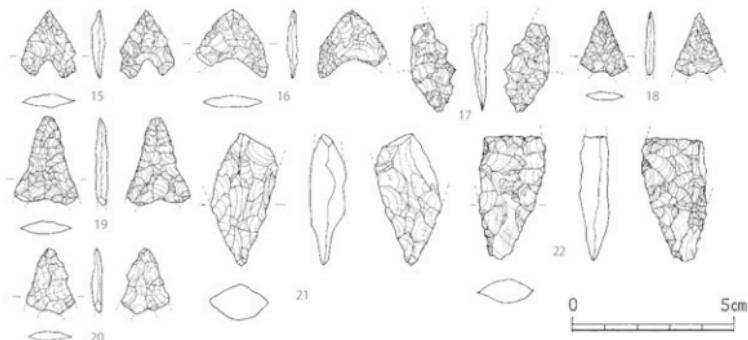
第38図 NRO 1出土石器実測図1 (1/3)



写真39 N R O 1石器 (1/3)



第39図 NR01出土石器実測図2 (1/3)



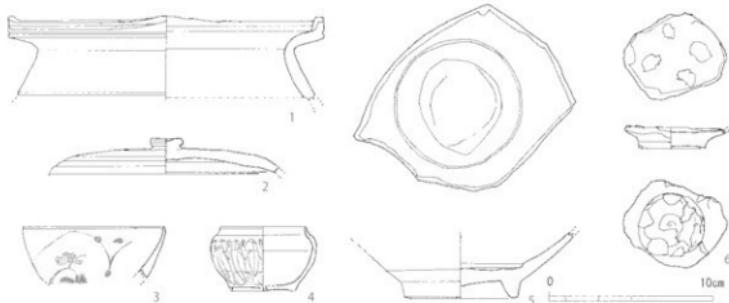
第40図 NR01出土石器実測図3 (2/3)

## VIII 各層の遺物

### 1 1・2層の遺物

#### (1) 土器 (第41図、写真40)

1は黒色磨研された縄文晩期黒川式期の精製土器である。口縁部は波状をなし、外面に沈線の縁取りがされる。頸部はきつくすぼまり胴部へ広がり、肩部と胴部の繋ぎ目に内外面ともに沈線が施される。2はつまみ付きの須恵器の杯蓋である。器高は不明だが、中央が窪んだ径2cm程度のボタン状つまみを有し、平坦な天井部の形状や器径などの特徴から、牛頭編年VII A期（8世紀前半）の新相ないしやや下る（小田富士雄1977・舟山良一他編2008）のものと思われる。3は18世紀前半の波佐見焼の百貫西窯染付椀である。6は朝鮮王朝前期の砂目積磁器である。高台幅が4.1cm、同高が0.6cmで全面施釉される。4は中世の輸入青白磁の合子で、蓋と接する口縁部内側が釉剥ぎされ、底部及び胴部下半三分の1は施釉されない。5は近世初期の肥前産白磁の底部である。



第41図 1・2層出土土器実測図 (1/3)

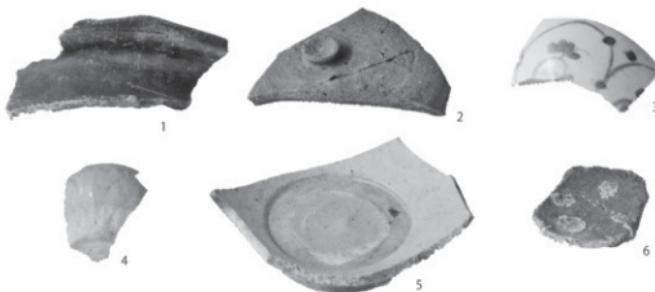


写真40 1・2層出土土器

表16 1・2層出土土器観察表

団版番号	器種	出土区	層位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土
				口径	器高	器径	内面	外面	内面	外面		
1	深鉢	F-1 区	1層	19.6	1.3	—	横ヘラ／ミガキ	ヘラ／丁寧なミガキ	黒色	黒色	良好	精良 白色粒子
2	須恵器杯蓋	F-1 区	1層	—	—	—	ナデ／回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	良好	—
3	染付碗	A-2 区	2層 (8.8)	—	—	—	—	達統草花文	—	—	—	—
4	青白磁合子	B-5 区	— (5.2)	4.0	(6.6)	—	—	—	—	—	精良	精良
5	白磁	F-6 区	1層	—	—	—	蛇の目釉はぎ	高台は施釉なし	—	—	やや粗	やや粗
6	磁器	A-4 区	1層	—	—	—	砂目積	施釉	—	—	やや粗	粗雑 白色粒子

## 参考文献

小田富士雄『天鏡山窯跡群』北九州市遺跡調査会 1977

中島恒次郎『土器から考える遺跡の性格』『官衙・集落と土器1』(第18回古代官衙・集落研究会報告書) クバプロ 2015

中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981

舟山良一・石川健編『牛頭窯跡群 総括報告書1』大野城市文化財調査報告書第77集 2008

宮崎貴夫・村川逸朗『波佐見町内古窯跡群調査報告書』波佐見町文化財調査報告書第4集 1993

## (2) 石器 (第42・43図、写真41・42)

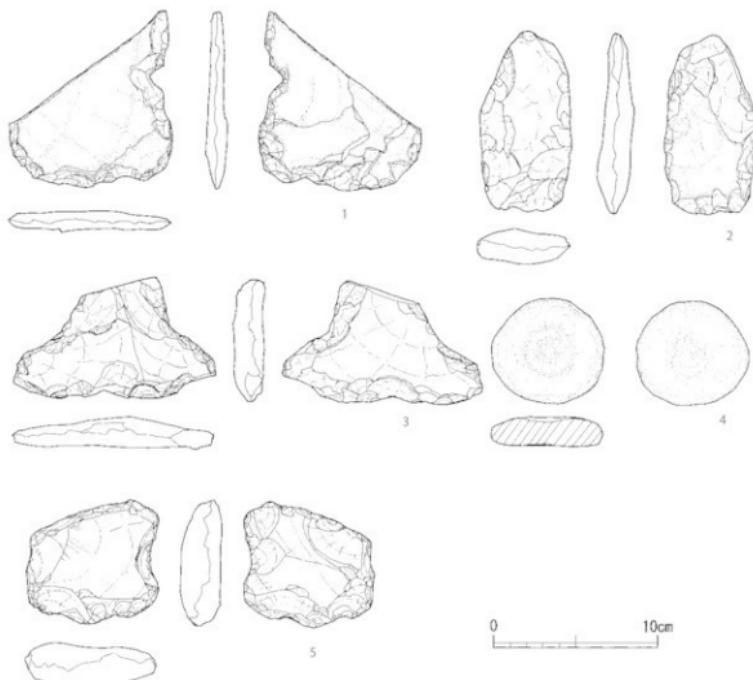
1・2は短冊形の両刃型打製石斧である。縄文後期後半に出現した土掘り具と思われる。1は側面に抉りが少なくとも一ヶ所あり、2は風化している。3は安山岩製の凹石、4は横刃型打製石斧で、ラケット形を呈する。5は獲物の加工に使われた両刃形のスクレイパー。6・7は狩猟具たる黒曜石製石鎌であり、6は凹基で光沢が強い。7は平基で灰白色を呈する。恐らくは針尾産の石材を使用している。石器は全て1層から出土したもので、洪水や耕転による位置移動が想定される。

表17 1・2層出土石器観察表

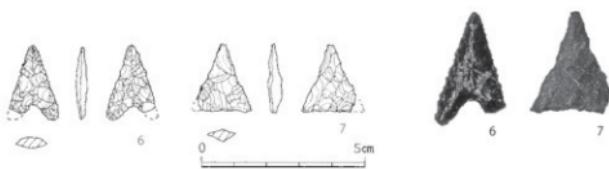
団版番号	器種	出土地区	石種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
1	打製石斧	F-1 区	安山岩	(103.0)	96.0	11.0	115.0	抉りあり
2	打製石斧	—	安山岩	105.0	55.0	18.0	140.0	表面風化
3	打製石斧	F-2 区	安山岩	71.0	118.0	18.0	145.0	ラケット形、横刃
4	凹石	D-6 区	安山岩	65.0	59.0	19.0	110.0	小型
5	スクレイパー	F-5 区	玄武岩	73.5	77.0	23.8	160.0	—
6	石鎌	B-1 区	黒曜石	23.0	15.0	4.0	(0.7)	—
7	石鎌	A-5 区	黒曜石	21.0	16.0	4.0	0.8	—



写真41 1・2層出土石器



第42図 1・2層出土石器実測図 (1/3)



第43図 1・2層出土石器実測図 (2/3) 写真42 1・2層出土石器

## 2 3層の遺物

### (1) 土器 (第44・45図、写真43・44)

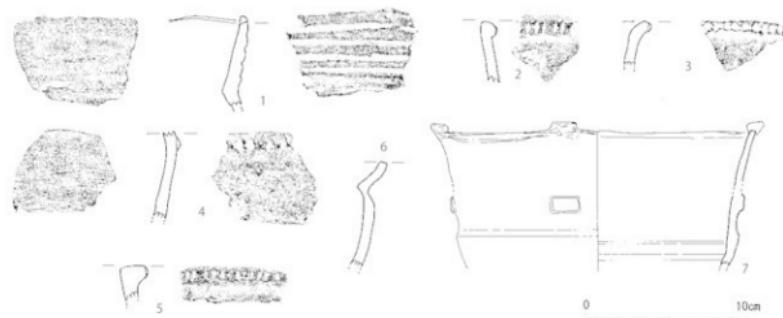
1～7は縄文晩期の土器である。1は波状口縁を成し、外面に多重沈線を施す。外面から頸部内面にかけて横ナデ調整を施し、屈曲部から下の胴部内面にはヘラナデを施す。2・3・5は刻目突帯を口縁部に有し、3は指押さえ調整、2・5はヘラ押さえ調整による。4は刻目突帯を施した胴部で、刻目はやや不均等で深いヘラ押さえによる。6は粗製の浅鉢である。器形は土壤墓ST04出土の精製浅鉢に似て、「くの字」状の屈曲部から僅かに外反した後に、胴部下半から滑らかに円形を描くものと思われる。7はリボン状突起飾りを口縁部に有する精製深鉢である。胴部最大径付近でやや内湾していく、口縁部へ緩やかに外反する器形であり、近隣では肥賀太郎遺跡出土の深鉢C類に類品が多く見られる(中尾2006)。内外面に貝殻条痕文を施し、胴部中位から底部へ焦げた炭化物が付着する。8～11は古墳時代・古代の土師器、須恵器である。8・9はヘラ切りによる高台付きの椀、10は口径18cmの土師器甕、11は須恵器の高盤である。

#### 参考文献

中尾篤志『肥賀太郎遺跡』長崎県文化財調査報告書第189集2006

平田賢明『黒丸遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第201集2009

本多和典・大坪芳典他『權現脇遺跡』深江町文化財調査報告書第2集2006



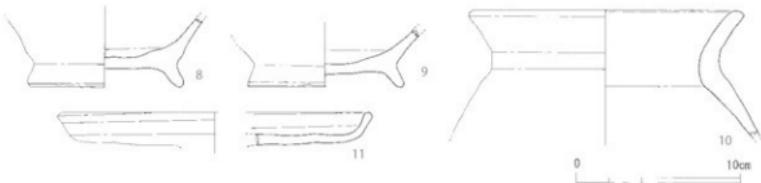
第44図 3層出土縄文土器実測図 (1/3)



写真43 3層出土縄文土器

表18 3層出土繩文土器観察表

図版番号	調査区	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
				口径	器高	器径	内面	外面	内面	外面			
1	A-1区	深鉢	口縁	—	—	—	横ナデ／ ヘラナデ	横ナデ	褐色	黒褐色	やや良	石英・長石・ 角閃石・雲母	波状口縁、多重 沈線文
2	C-2区	深鉢	口縁	—	—	—	横ナデ／ ナデ	横ナデ	にぶい黄 褐色	にぶい黄褐色	良好	同上	刻目突蒂口縁
3	C-2区	深鉢	口縁	—	—	—	横ナデ	横ナデ	にぶい褐色	暗褐色	良好	石英・雲母	刻目口縁
4	C-1区	深鉢	胴部	—	—	—	ヘラナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良好	同上	刻目突蒂あり
5	A-5区	深鉢	口縁	—	—	—	ヘラナデ	横ナデ	褐色	黒褐色	やや良	石英・長石・ 角閃石・雲母	刻目突蒂口縁
6	B-2区	浅鉢	口縁・胴部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	黄褐色	褐色	良好	同上	
7	B-1区	深鉢	口縁～胴部	18.0	—	—	横貝殻 条痕	貝殻条痕	灰褐色	黒褐色	良好	同上	口縁にリボン 状突起



第45図 3層出土土師器・須恵器実測図(1/3)

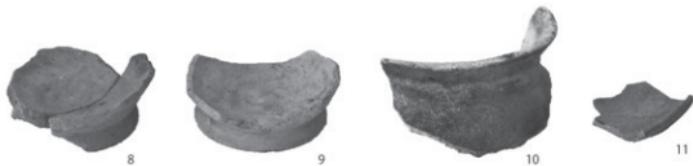


写真44 3層出土土師器・須恵器

表19 3層出土土師器・須恵器観察表

図版番号	調査区	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
				口径	器高	器径	内面	外面	内面	外面			
8	A-2区	土師器楕	底部	—	—	—	ナデ	ヘラナデ／回 転ナデ	褐色	褐色	良好	石英・雲母・赤 色粒子	底径 9.8mm, 高台高 1.1mm
9	A-2区	土師器楕	底部	—	—	—	左回転楕	左回転楕	浅黄褐色	浅黄褐色	良好	石英・赤色粒子	底径 9.6mm, 高台高 9.0mm
10	B-2区	土師器楕	口縁部	16.8	—	—	回転ナデ めヘラケズリ	回転ナデ／斜 めヘラケズリ	にぶい 褐色	にぶい 褐色	良好	長石・石英・雲 母	
11	A-3区	須恵器盤	杯部	19.3	—	—	同上	回転ナデ	灰白色	灰白色	良好	石英	

## (2) 石器 (第46・47図、写真45・46)

1～3は縄文後期・晚期の安山岩製の扁平打製石斧である。3の表裏面には斜線で示す研磨面が部分的に残り、木材加工用の磨製石斧が破損した後に、打製石斧として再加工されたことを示す。4～6は石匙である。つぐめのはな遺跡（平戸市田平町、正林・村川1986参考）など長崎県内の出土例を基準とした橈分類によれば（橋1980）、4・5は縦型で、4は鋭利な先端部を持たない片刃の黒曜石製Ⅲ類、5も破断面を生かした縦型Ⅲ類であり、一般的な海産物加工に用いられる汎用品である。6は直線的な刃部と鋭利な先端部を有する鰯・大型魚類解体向け専用品の縦型Ⅰ類である。7は安山岩製のスクレイパー、8はサスカイト製の石核、9は堅果類の加工などに使用された敲石である。以下は12のサスカイトを除いて黒曜石製品であり、13,14,21を除いて、腰岳產と思われる漆黒色の光沢ある石材を使用している。10は石鎌の未製品と考えられるが、石錐の可能性もある。11～28は狩猟に用いられた無頭の石鎌である。下記の県内の先行報告書を参照して、器形により分類した。11は基部が緩やかな楕円形を示す凸基であり、両刃部分も僅かな膨らみを示す。12～17は平基で、12は刃部の膨らみが11より強く、13・14は尖頭部が円形を呈す。18～22は円基で、18～20が正三角形に近い全体形状に復元される。23～25が鍔形鎌である。26は下部が欠損して全体の器形を知りがたく、27・28は未製品である。石鎌の法量、重量のばらつきは破損後の再加工の積み重ねを示す（阿部1993）ものとも思われる。

### 参考文献

阿部祥人「石器の折損と再生加工」『史学』62-3（慶應義塾大学）1993

上條信彦「縄文時代石皿・台皿類・磨石・敲石類の検討」『人文社会論叢』（弘前大学）31号 2014

橋昌信「石匙 一西北九州における縄文時代の石器研究三一」『史学論叢』11（別府大学）1980

生田次男・杉原敦史編『今福遺跡』長崎県佐世保文化財調査事務所文化財調査報告書第8集 2013

正林護・村川逸朗「つぐめのはな遺跡」（「長崎県埋蔵文化財調査集報」IX）長崎県文化財調査報告書第82集 1986

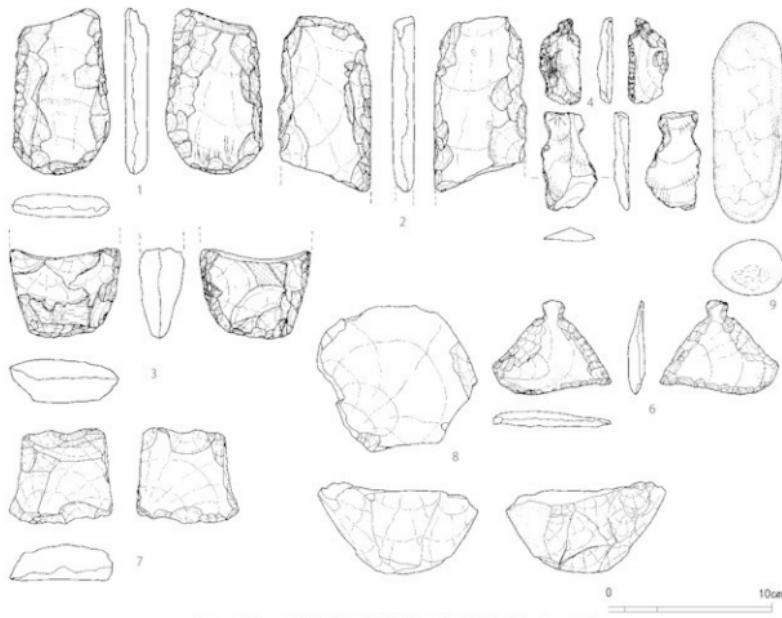
副島和明・伴耕一朗編『西輪久道遺跡』（「諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」II）長崎県文化財調査報告書第74集 1985

福田一志編『伊木力遺跡II』長崎県文化財調査報告書第134集 1997

表20 3層出土石器観察表

図版番号	器種	出土地区	石種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g) ( )は残存部重量	備考
1	打製石斧	C-2区	安山岩	102.0	60.0	14.0	125	短冊形両刃
2	打製石斧	A-2区	安山岩	108.0	57.5	14.0	140	
3	打製石斧	C-2区	安山岩	55.0	68.5	27.0	115	
4	石匙	C-1区	黒曜石	53.0	25.0	9.0	10.97	
5	石匙	A-1区	サスカイト	61.0	34.0	9.0	15.55	
6	石匙	A-2区	サスカイト	58.5	74.0	10.0	32.28	
7	スクレイパー	B-1区	安山岩	59.0	63.5	22.0	95	
8	石核	A-3区	サスカイト	56.5	99.0	90.0	520	
9	敲石	C-3区	安山岩	124.0	44.0	34.0	230	
10	石鎌	A-2区	黒曜石	33.5	12.5	5.0	1.72	石鎌の未製品か
11	石鎌	C-2区	黒曜石	25.0	17.5	4.0	(1.36)	凸基 尖頭部欠
12	石鎌	A-2区	サスカイト	22.0	12.0	3.0	0.8	平基 定形
13	石鎌	B-2区	黒曜石	31.5	14.0	3.0	3.0	平基 定形
14	石鎌	A-1区	黒曜石	27.5	21.0	5.0	1.64	平基 定形
15	石鎌	B-1区	黒曜石	23.0	16.0	3.0	(0.94)	平基 上下左下端欠
16	石鎌	A-1区	黒曜石	21.0	16.5	3.0	(0.98)	平基 左下端欠
17	石鎌	B-1区	黒曜石	23.5	19.5	3.0	0.96	平基 定形

18	石鏸	A-5区	黑曜石	20.0	17.5	5.0	(1.06)	円基 左下端欠
19	石鏸	A-6区	黑曜石	18.0	16.5	3.0	(0.72)	円基 左下端欠
20	石鏸	A-1区	黑曜石	16.5	18.0	4.0	(0.83)	円基 上端左下端欠
21	石鏸	C-2区	黑曜石	20.0	19.0	4.0	(0.98)	円基 上端左下端欠
22	石鏸	B-1区	黑曜石	24.0	14.0	2.5	0.67	円基 欠損あり
23	石鏸	C-2区	黑曜石	19.5	13.0	3.5	0.49	圓形
24	石鏸	A-5区	黑曜石	26.0	18.0	3.0	(1.00)	圓形 上端左下端欠
25	石鏸	C-2区	黑曜石	24.0	15.0	3.5	(1.15)	圓形 上端左下端欠
26	石鏸	A-1区	黑曜石	28.0	16.0	6.0	(1.58)	下端部が欠損
27	石鏸	C-2区	黑曜石	23.5	12.5	5.0	1.31	未製品
28	石鏸	A-5区	黑曜石	27.5	16.5	6.0	1.51	未製品



第46図 3層出土石器実測図（石鏸除く）(1/3)

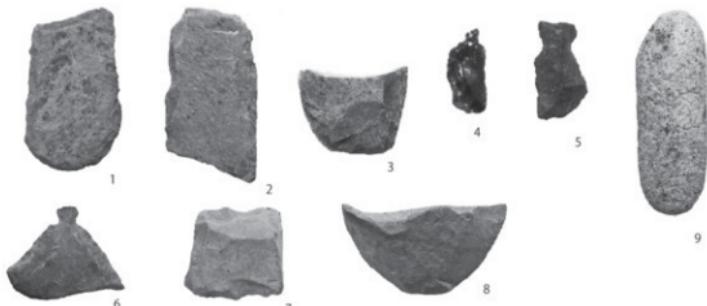
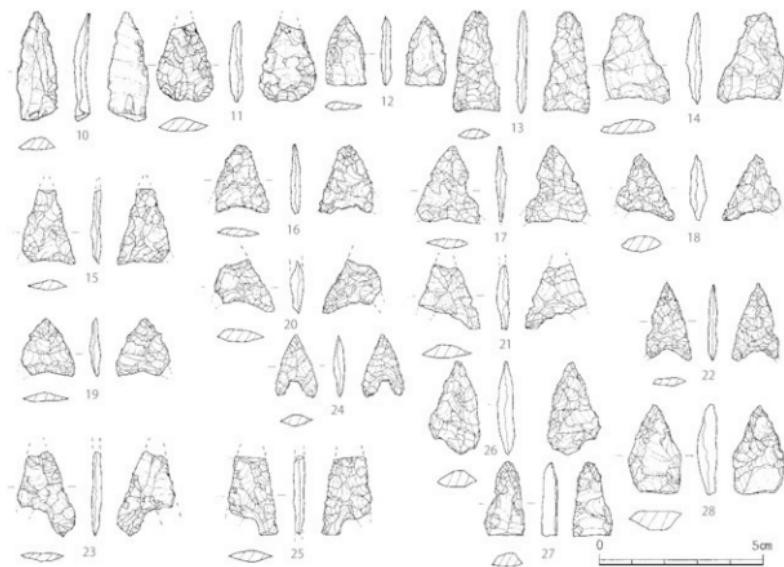


写真45 3層出土石器（石鏸除く）



第47図 3層出土石器実測図 (2/3)

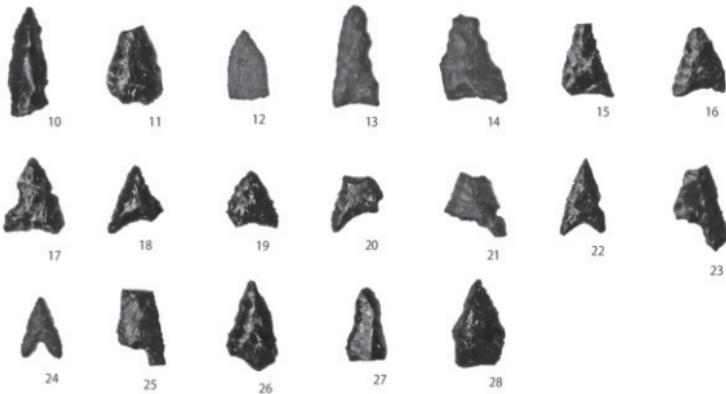


写真46 3層出土石器

### 3 4層の遺物

#### (1) 土器

##### ① 土器（第48図、写真47）

4層からは縄文時代晩期をとおした遺物が出土した。

1は屈曲形を呈する深鉢である。口縁にリボン状突起をもつ。また口縁端部がやや内湾している。2、3は砲弾形を呈する深鉢である。3は口縁に平行に沈線を4条巡らされている。4は残存状況から器形による分類は不可能なものである。頸部片で蝶ネクタイ状の突起をもつ。5は鉢である。口縁に平行に沈線を4条巡らされている。6は口縁の外面に沈線が巡り屈曲部は深く内傾し口縁にいたる浅鉢である。7は胴部から口縁にかけてゆるやかに外反する深鉢である。黒川式段階に属するものと考えられる。8は残存状況から器形による分類は不可能なものである。口縁部片で波状をなしている。9は屈曲形を呈する深鉢である。口縁端部が外反しており口縁下に6mm程穿孔されている。10は胴部から口縁にかけてゆるやかに外反し屈曲形を呈する深鉢である。口縁端部は面取り気味である。11はゆるやかな屈曲形を呈する二重刻目突帯文深鉢である。ヘラによる刻み目である。突帯部断面が三角形を呈している。また丹が塗られている。山の寺式段階に属するものと考えられる。12はゆるやかな屈曲形を呈する刻目突帯文深鉢である。ヘラによる刻み目である。突帯部断面が三角形を呈している。13は残存状況から器形による分類は不可能なものである。口縁部片で口縁に刻み目がほどこされ突帯部断面が三角形を呈している。ヘラによる刻み目である。14はヘラによる刻目を口縁にもち砲弾形を呈する深鉢である。15は屈曲形を呈する刻目突帯文深鉢である。突帯部断面が三角形を呈している。山の寺式段階に属するものと考えられる。16は深鉢である。胴部片で丹が塗られ突帯部断面が三角形を呈している。ヘラによる刻み目である。山の寺式段階に属するものと考えられる。17は深鉢である。胴部片で突帯部断面が三角形を呈している。ヘラによる刻み目である。山の寺式段階に属するものと考えられる。18は残存状況から器形による分類は不可能なものである。頸部片である。左から刺突文を施され1条の沈線を巡らされている。19～22は短めの頸部を持ち胴部の張りが緩やかな浅鉢である。19は内外面ともに磨き上げられ黒色で仕上げられている。21は内外面ともに磨き上げられ赤褐色で仕上げられている。22は口縁内面に段を外面に沈線をもつ。黒川式段階に属するものと考えられる。24、25は頸部で強く外反しながら口縁部が立ち上がる浅鉢である。また23～27は内外面に段をもつ浅鉢である。25、26は内外面ともに丁寧に横へ磨き上げられ黒色で仕上げられている浅鉢である。28は胴部に下位で強く外反する頸部をもち口縁に浅い段をもつ浅鉢である。29は口縁内に段をもち口縁が波状をなす浅鉢である。本来頸部基部にあたる部分が間延びしたものと考えられる。30は残存状況から器形による分類は不可能なものである。口縁部片で口縁にヒレ状突起をもつ。31は口縁内外面に段をもち短い頸部を持ち波状口縁をもつ浅鉢である。32波状口縁をなしており波状頂点の下にくぼみおさえ（指頭による押さえ）がある深鉢である。また口縁と水平に沈線を巡らしている。33～37は底部である。そのうち平底のもの(33,34,37)、凹底のもの(35)、上げ底のもの(36)が確認できた。また34は底部外面にケズリを持つ。



第48図 4層出土土器実測図 (1 / 3)

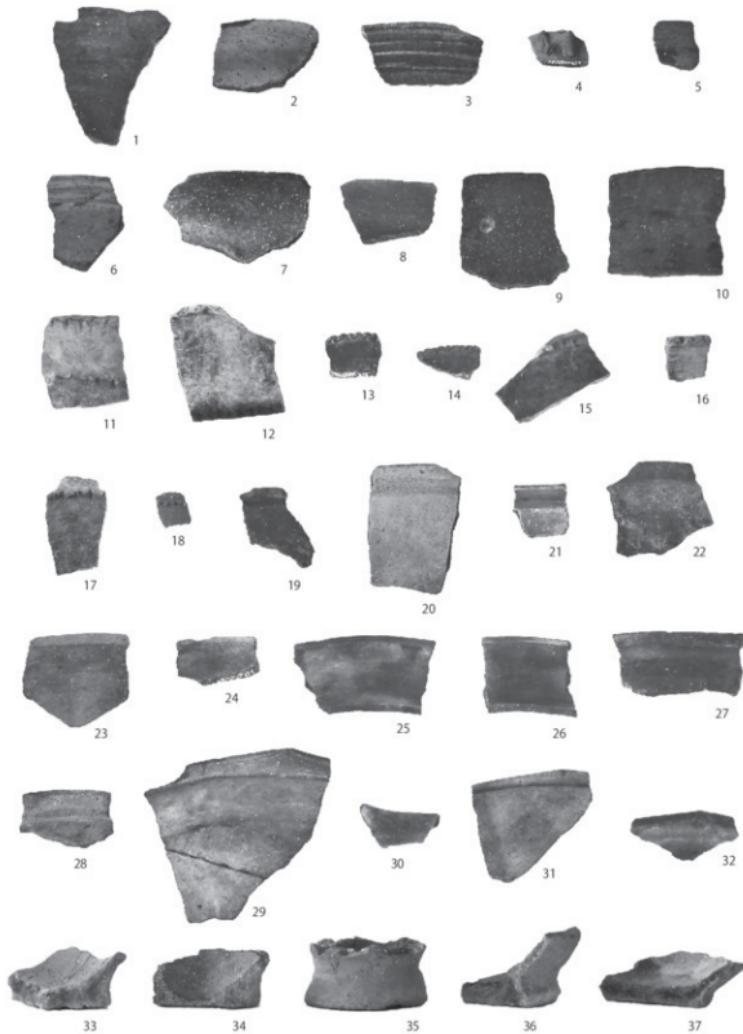


写真47 4層出土土器

表21 4層出土器觀察表

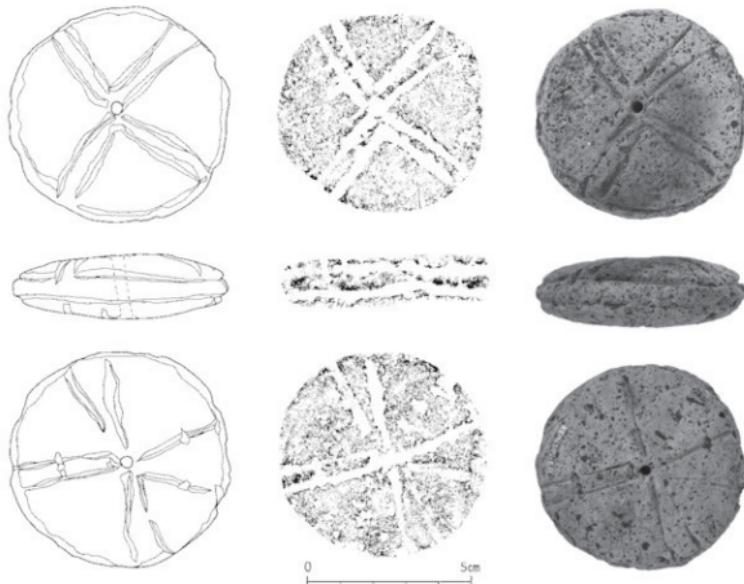
図版番号	調査区	器種	部位	法算(cm)		調整		色調	地成	胎土	備考	
				口径	底高	基径	内面					
1	B-1	粗製深鉢	口縁				ナデ	貝物条痕	黒褐色	に青い 黄褐色	やや甘い 長石、角閃石含む	リボン付口縁
2	C-1	鉢	口縁				ナデ	ナデ	黒褐色	褐色	良好	砂粒をまばらに含む
3	F-1	深鉢	口縁				ナデ	ナデ	黄褐色	暗褐色	良好	石英、長石、角閃石、雲母、赤色粒子含む 沈線を4条
4	B-2		頸部	丁寧なヨコナデ	丁寧なヨコナデ			褐色	褐色	褐色	良好	角閃石、黒雲母、長石をまばらに含む リボン状突起
5	B-1	鉢	口縁				ナデ	ナデ	褐色	明褐色	良好	角閃石、黒雲母、長石をまばらに含む 沈線を4条
6	E-2	浅鉢	口縁	丁寧なヨコナデ	丁寧なヨコナデ			黒褐色	灰褐色	良好	雲母、長石、石英、微細な 砂粒を含む	
7	F-1	粗製深鉢	口縁				貝物条痕	貝物条痕	黄褐色	黄褐色	良好	大さめの砂粒を多量に含む 施期
8	B-2		口縁	ヨコナデ	ヘラケズリ			褐色	黒褐色	良好	石英、角閃石	波状口縁
9	A-5	粗製深鉢	口縁				貝物条痕	貝物条痕	暗灰色	黒褐色	やや甘い	石英、角閃石、長石、雲母 を多量に含む
10	B-2	粗製深鉢	口縁				貝物条痕	貝物条痕	橙色	黒褐色	良好	石英、角閃石、長石を多量に含む
11	B-2	鉢	口縁	ナデ→ ケズリ	ナデ→ ケズリ			樹脂 にぶい 樹脂	褐色	褐色	良好	石英、角閃石、長石を多量に含む 二重刻目実等文 丹塗り
12	C-2	深鉢	口縁				ナデ	ナデ	にぶい 褐色	褐色	良好	石英、長石、角閃石 口縁に剥み目
13	C-4		口縁				ナデ	ナデ	褐色	黒褐色	良好	石英、長石、角閃石をまばらに含む 口縁に剥み目
14	F-1	深鉢	剥み口縁				ナデ	ナデ	灰褐色	明褐色	良好	砂粒をまばらに含む 板付系統か
15	B-2	粗製深鉢	頸部	ヨコナデ	細い ヨコナデ			褐色	黒褐色	良好	石英、雲母をまばらに含む 剥目突変文	
16	C-2		頸部				ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	良好	石英、角閃石、長石、雲母 を含む 剥目突変文 丹塗り
17	B-3	鉢	頸部	ケズリ				褐色	褐色	良好	石英、角閃石、雲母を含む 剥目突変文	
18	A-1	鉢					ヘラケズリ	赤褐色	赤褐色	良好	石英、角閃石、雲母を含む 左から剥変文 丹塗り	
19	B-3	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ			黒褐色	黒褐色	良好	濃度でよい 黑色墨研	
20	B-2	浅鉢	口縁				ナデ	ナデ	黒褐色	灰褐色	良好	石英、赤色粒子、微細な砂 を多く含む
21	F-1	浅鉢	口縁	ミガキ→ 丹塗り	ミガキ→ 丹塗り			赤褐色	丹塗り	丹塗り	濃密で微細な砂を多く含む 丹塗り	
22	C-2	浅鉢	口縁	丁寧なナデ	丁寧なナデ			黒褐色	褐色	良好	石英、長石、雲母を多く含む	
23	F-1	浅鉢	口縁	ヨコナデ	ヨコナデ			乳白色	灰褐色	良好	石英、長石、雲母、赤色粒子	
24	C-1	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ			灰褐色	にぶい 褐色	良好	角閃石、雲母含む 黄色	
25	F-1	浅鉢	口縁	丁寧な 横ミガキ	丁寧な 横ミガキ			黒褐色	黒褐色	良好	雲母 黑色墨研	
26	F-1	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ			黒褐色	黒褐色	良好	濃密で微細な長石、石英 黑色墨研	
27	C-2	浅鉢	口縁	丁寧な ヨコナデ	丁寧な ヨコナデ			黒褐色	黒褐色	良好	長石、石英を多く含む	
28	B-2	浅鉢	口縁	ヨコナデ	ヨコナデ			褐色	褐色	やや甘い	角閃石、雲母、長石を多量に含む	
29	A-1	浅鉢	口縁	32.2	ヘラケズリ	ヘラケズリ→ ミガキ		黒褐色	黒褐色	良好	波状口縁 口縁に沈線	
30	B-2		口縁				ナデ	ナデ	褐色	褐色	良好	角閃石、長石を多く含む リボン状突起
31	B-2	浅鉢	口縁	丁寧な ミガキ	丁寧な ミガキ			灰褐色	黄褐色	良好	石英、角閃石、雲母を含む 波状口縁	
32	A-5	粗製深鉢	口縁				ミガキ	ミガキ	灰褐色	褐色	良好	角閃石、長石を含む 波状口縁 沈線 波状溝点の下にぼみ
33	F-1		底部	ケズリ→ ナデ	細い ヨコナデ			細い 褐色	細い 褐色	良好	石英、雲母を含む	
34	B-1	鉢	底部				ナデ	ヨコナデ	灰褐色	褐色	良好	大さめの雲母を含む 底部にケズリ
35	C-2		底部				ナデ	ナデ オサエ	黒褐色	赤褐色	良好	赤色粒子を多く角閃石を含む
36	F-1		底部				ナデ	ヨコナデ	黒褐色	黒褐色	良好	白色粒子を多く角閃石を含む
37	F-1		底部				ナデ	ナデ オサエ	黒褐色	赤褐色	良好	微細な角閃石、石英

## ②有孔円盤形土製品

F-1区4層の縄文時代後期末から晩期にかけての遺物包含層から出土した。最大径が約6.8cm、最大厚が2cmほどの円形で中央に径3mmほどの孔をあけ、その孔から2条の沈線を放射状に4箇所両面に施し、側面にも2条の沈線を1周させている。色調は明褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、表面にはその砂粒が抜けた痕が多く残る。調整は表面を簡単にナデている。焼成は良い。用途としては弥生時代から普及する紡錘車が考えられるが、時代的に紡績が行われていたかということ、円盤が真円でないこと、穿孔の大きさが小さいこと、円盤に対して穿孔がやや斜めであることなど紡錘車としては疑わしい。4層の縄文時代後期末から晩期の包含層や遺構からは円盤形石製品も数点出土しているのでこれらと合わせ考える必要があると思われる。この有孔円盤形土製品や石製品は佐賀県鳥栖市の縄文時代後期末から晩期前半にかけての蔵上遺跡からも多数出土しており、また、東関東を中心とした関東の縄文時代晩期前半の遺跡からも出土例が多い。この頃の人々の精神文化を特徴付けるものと考えられる。蔵上遺跡からは埋甕も多数検出されており興味深い。

### 参考文献

- 町史編纂古代・中世部会「コラム 土製有孔円板」『高根沢町史』通史編I 第二編第二章第五節三 精神生活の道具 1995.3  
久山高史『蔵上遺跡Ⅲ』縄文時代遺構・遺物編 蔵上土地区画整理事業関係埋藏文化財調査報告書(4) 鳥栖市文化財調査報告書第61集 2000.3



第49図 4層出土有孔円盤形土製品実測図 (2/3) 写真4-8 4層出土有孔円盤形土製品

## (2) 石器

### ① 石鏃・石錐 (第50図、写真49)

4層からは石鏃18点が出土している。そのうち片脚部のみの小片を除き15点を図化した。1は平基である。2~7は円基でうち3・4は完形である。8~12は鍔形基でうち8は完形である。13は未製品とおもわれる。14は剥片鏃で未製品とおもわれる。15は大型で片脚部のみ残存している。3のサスカイト製を除き多くは漆黒色の黒曜石製である。そのうち7は灰白色という特徴をもつ。4層からは石錐が2点出土した。16・17は漆黒色の黒曜石製である。

4層出土の土器から石鏃・石錐の時代は縄文後期末～晩期のものと考えられる。

表22 4層出土石鏃・石錐観察表

回収番号	器種	出土地区	石種	色調	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g) 変形の有無	形状、その他
1	石鏃	B-1区	黒曜石	漆黒	26.0	20.0	2.5	1.14	平基
2	石鏃	F-1区	黒曜石	漆黒	21.0	18.0	4.3		円基
3	石鏃	E-2区	サスカイト	漆黒	32.0	23.0	5.0	2.50	円基 完形
4	石鏃	F-1区	黒曜石	漆黒	21.0	11.0	3.0	0.58	鍔形基 完形
5	石鏃	F-1区	黒曜石	漆黒	17.0	15.0	3.0		円基
6	石鏃	F-1区	黒曜石	漆黒	24.0	16.0	5.0		円基
7	石鏃	F-1区	黒曜石	灰色	17.0	14.7	3.5	0.60	円基 完形
8	石鏃	E-2区	黒曜石	漆黒	27.0	19.0	4.5	2.05	鍔形基 完形
9	石鏃	F-1区	黒曜石	漆黒	25.0	12.0	3.0		鍔形基
10	石鏃	F-1区	黒曜石	漆黒	29.5	16.0	4.0	1.00	鍔形基
11	石鏃	C-2区	黒曜石	漆黒	36.0	18.5	7.7	2.93	鍔形基
12	石鏃	A-2区	黒曜石	漆黒	20.0	25.0	3.0		鍔形基
13	石鏃	F-1区	黒曜石	漆黒	25.5	17.0	2.5		未製品
14	石鏃	F-1区	黒曜石	漆黒	33.0	13.5	2.0	0.81	剥片鏃 未成品か
15	石鏃	F-1区	黒曜石	漆黒	24.7	15.9	3.6	1.01	大型石鏃で片足部のみ残存
16	石錐	C-1区	黒曜石	漆黒	37.0	15.0	6.0		
17	石錐	A-1区	黒曜石	漆黒	32.0	17.0	6.0		

本調査で出土した石鏃40点を形状ごとに分類した。すると円基が1/4をしめるものの形状に偏りがないことがわかった。

表23 出土石鏃形状別一覧表

出土層位・遺構	出土点数	形状(基部)			
		平基	三角基	円基	鍔形基
1・2層	2	1	1	1	
3層	18	3	3	3	1
4層	15	1		6	5
NR 01	5		2	1	
合計	40	5	6	10	6

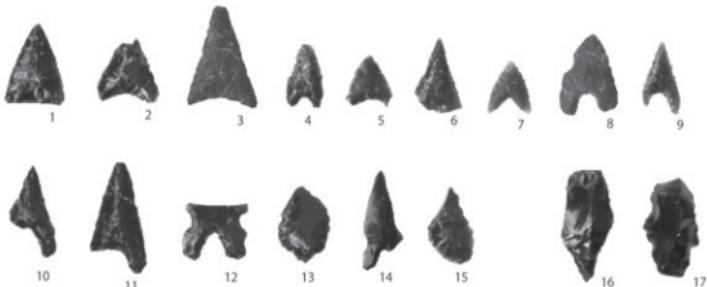
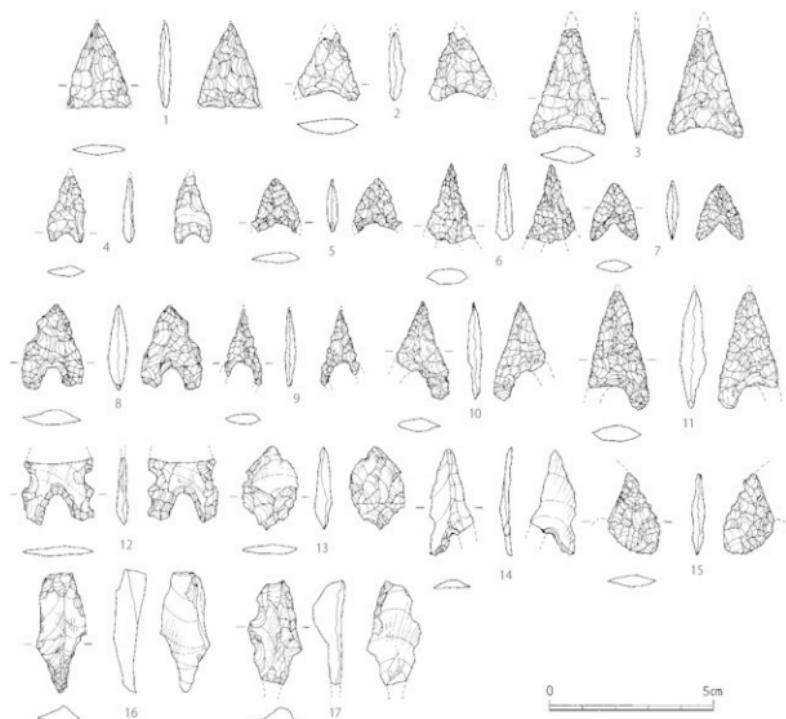


写真49 4層出土石鏃・石錐



第50図 4層出土石鎌・石錐実測図 (2/3)

(2) 打製石斧 (第52・53図、写真50)

4層からは打製石斧が48点出土した。このうち完形品や特徴のある16点を図化した。1～9は短冊形である。1は大型で5は基部に抉りをついている。10～12はバチ形のものである。10は大型で12は大型で刃部をくの字形につくっている。13は横刃形である。14・15はラケット形である。16は短冊形であるが脛部がくの字形に屈曲する。石材は大村扇状地疊層の安山岩が使用されている。出土土器からこれらの打製石斧も縄文時代後期末から晩期にかけてのものと考えられる。

表24 4層出土打製石斧観察表

図版番号	石材	出土区	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	形状その他
1	安山岩	B-2区		11.7	2.6		短冊形基部、大型
2	安山岩	B-2区	14.9	5.9	1.4	180	短冊形完形両刃
3	安山岩	F-3区		5.7	1.6		短冊形 両部折れ
4	安山岩	B-2区	13.5	5.9	1.5	150	短冊形完形 両刃
5	安山岩	A-2区	10.3	5.7	1.5		短冊形 両部折れ基部両側に抉り
6	安山岩	B-2区		6.5	1.7		短冊形 基部折れ 両刃
7	安山岩	B-2区	9.4	5.0	2.2	120	短冊形 完形 両刃
8	安山岩	A-1区		7.1	0.9		短冊形 両部 両刃 薄い
9	安山岩	A-1区		9.8	0.7		短冊形 両部 両刃 薄い

10	安山岩	B-2区		9.1	2.9		バチ形基部、大型
11	安山岩	D-6区	11.7	6.6	1.6		バチ形 側面一部削れ両刃
12	安山岩	F-9区			2.3		バチ形 刃屈くの字形 両刃 大型
13	安山岩	A-1区	6.0	10.5	1.5	125	横刃形 両刃
14	安山岩	C-2区		7.2	1.4		ラケット形 両刃
15	安山岩	B-2区		7.2	1.6		ラケット形 両刃
16	安山岩	B-2区		6.9	2.6		短冊形（くの字形）両刃

今回の調査では打製石斧が112点出土した。そこで、打製石斧の形状別の出土点数をまとめてみた（表25）。形状は第51図のように平面的な形状と刃部の刃の作り方に注目して分類した。平面形で見ると短冊形が91点、バチ形が12点、ラケット形が3点、横刃形と考えられるのが1点であり短冊形とバチ形で約92%を占めた。刃部の形状は殆どが両刃でありその先端が刃潰れしているものが多く、鍬や土掘り棒として使用されたものではないかと考えられる。7点片刃とみられるものがありこれらは鍬として使用されたものではないかと考えられる。ラケット形は3点で短冊形、バチ形の大型のものとともに大きく厚みもあるので土を掘るにしても粗彫り等に使用されたのではないか。確実に横刃と見られる1点は小ぶりで大型のスクレイパーとともに穂積具として使用されたものではないかとも考えられる。

調査区の立地を見てみると郡川によって形成された大村扇状地の中にあり、出土石器の組成をも考えると狩猟等に使用される石鎌やスクレイパーなどの出土が少なく、縄文時代後期末からこの地域で何らかの植物採集や耕作が行われていたものと考えられる。

#### 参考文献

板倉有大「石器から見た九州晩期農耕論の課題」

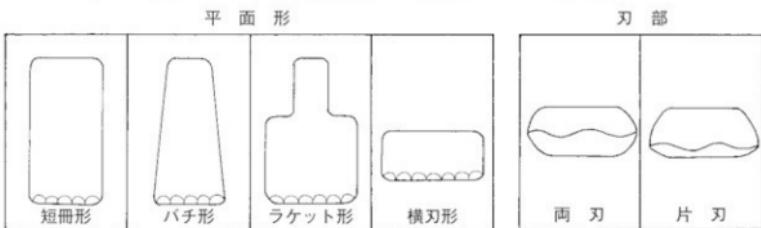
第25回九州縄文研究会福岡大会『九州縄文晩期の農耕問題を考える』2015

川口雅之「石製土堀具」「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書」79

「大坪遺跡」2005

山田昌久 金姓旭「初期農耕開始期の打製石斧に関する日韓共同研究」

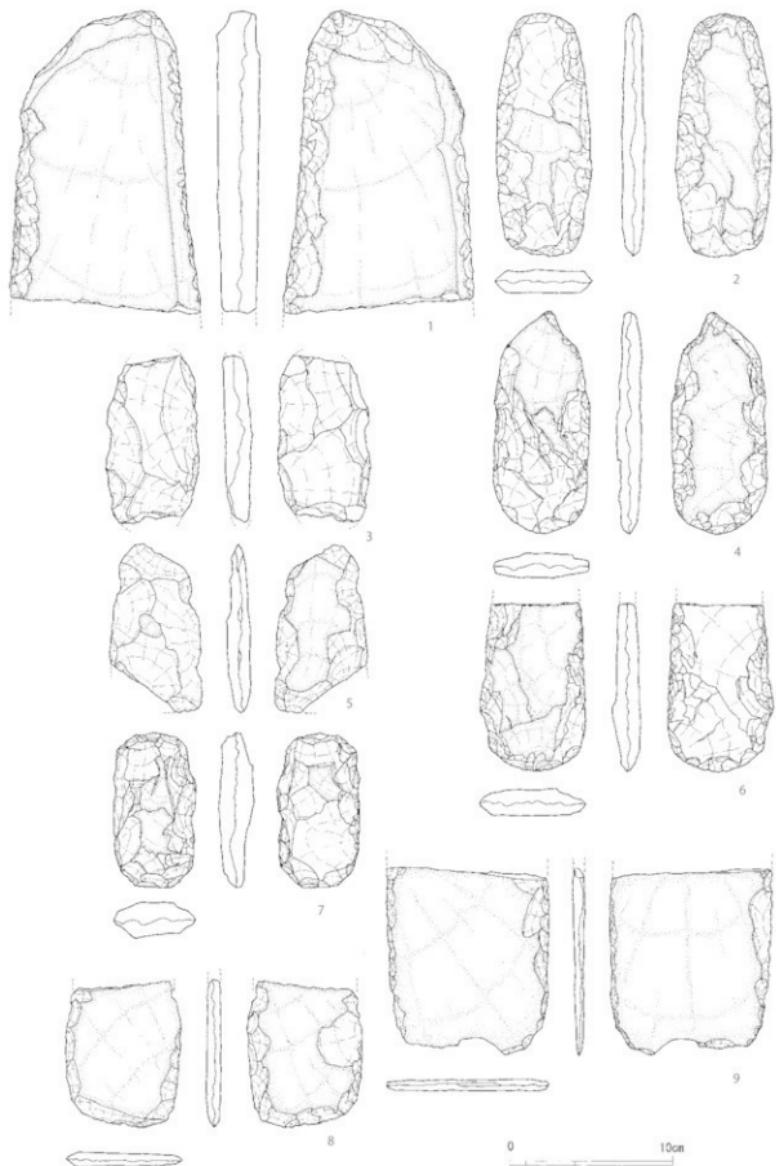
『2010年度アジア歴史研究報告書』公益財團法人JFE21世紀財團 2010



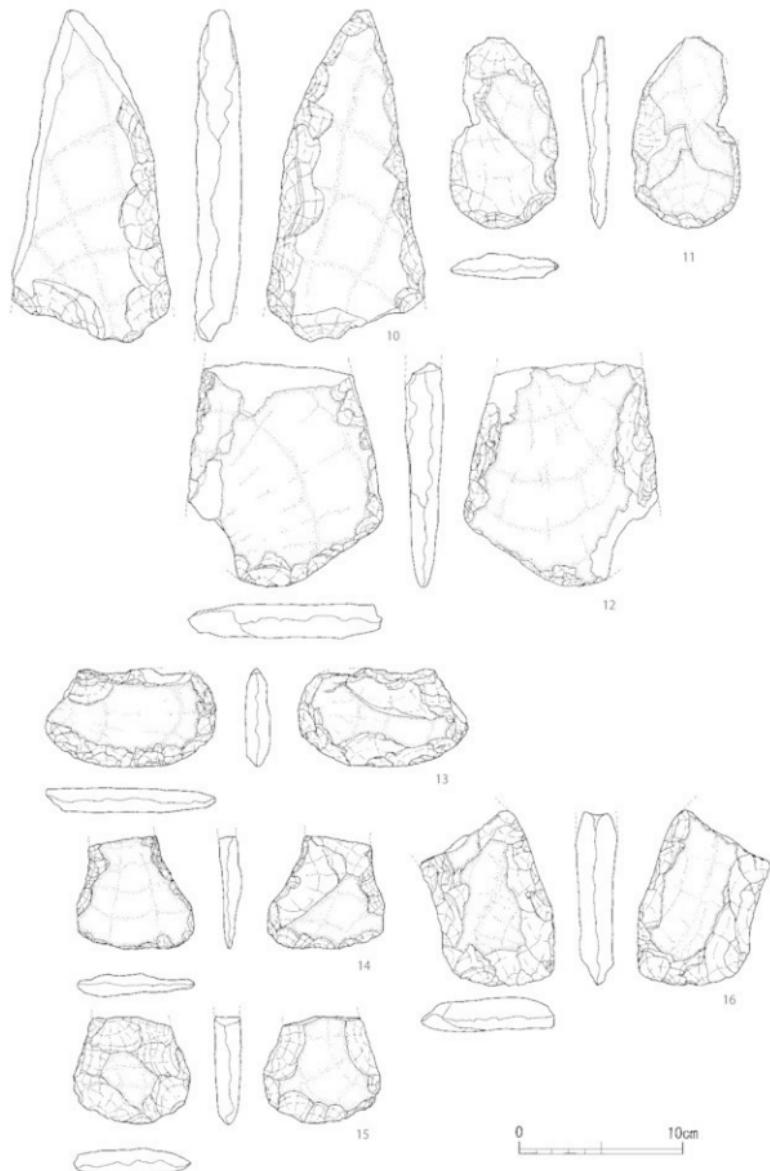
第51図 打製石斧形状分類図

表25 出土打製石斧形状別一覧表

出土層位・遺構	出土点数	形状				刃部	
		短冊形	バチ形	ラケット形	横刃形	両刃	片刃
1・2層	16	15				7	短1
3層	11	8	2	1			3
N R O 1	27	23	3	1		8	短1 バチ1
4層	48	39	4			19	短3 バチ1
S S O 2	6	4	2				3
S S O 3	2	1	1				2
S T O 4	2	1				1	2
合計	112	91	12	3	1	44	短5 バチ2



第52図 4層出土打製石斧実測図1 (1/3)



第53図 4層出土打製石斧実測図2 (1/3)

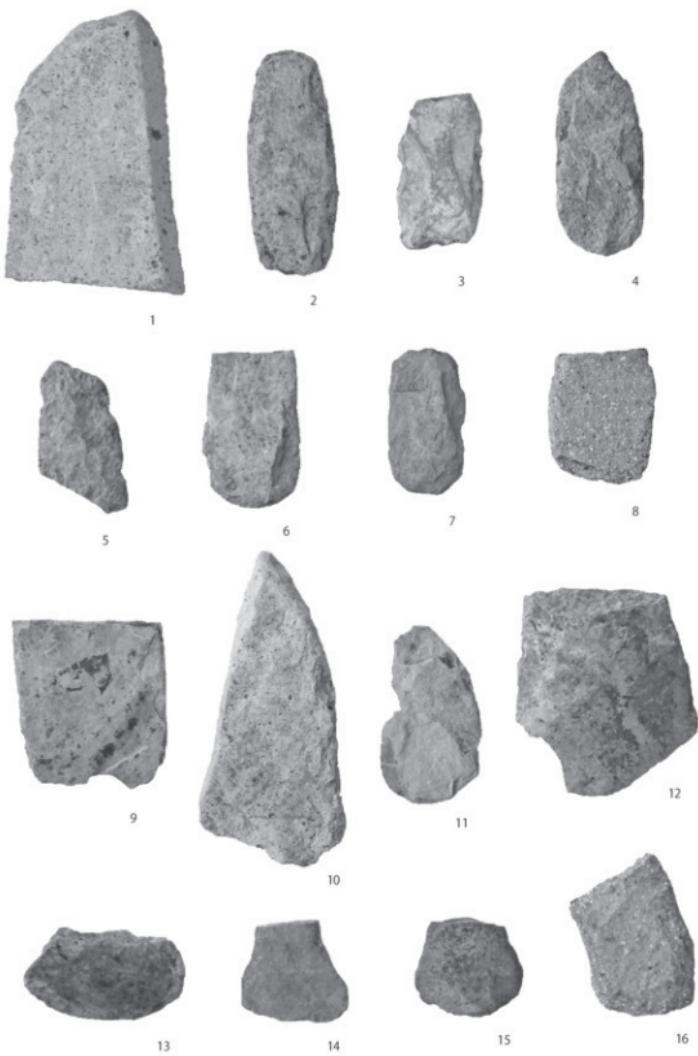
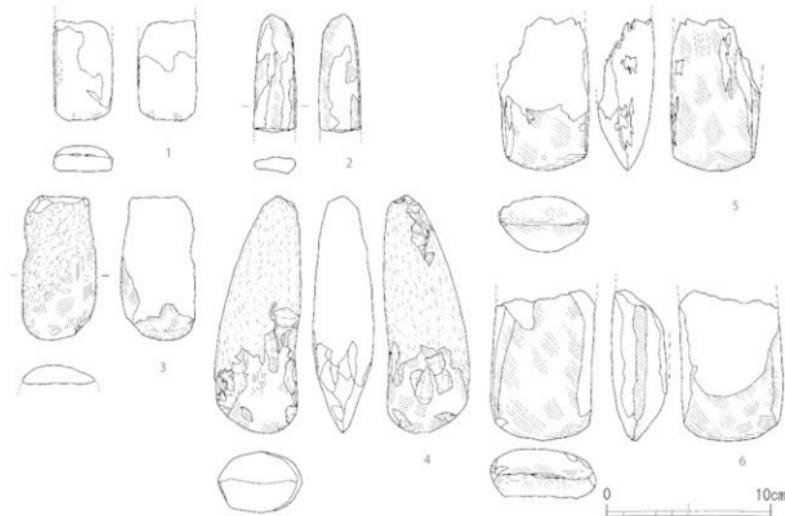


写真50 4層出土打製石斧

③磨製石斧（第54図、写真51）

1～6は、木材加工用の磨製石斧である。1は蛇紋岩製で、小ぶりの片刃手斧と思われる。全体に被熱を受けているが、目的は不明である。2は泥質変岩製で、刃部を欠き、石ノミ状を呈す。3～5は安山岩製である。3は欠けた刃部を再加工し、基部は細かく敲打調整される。4はやや細長い完形品で、上刃へ向かって窄まる基部を敲打調整が施される。5は刃部のみ残る。6は蛇紋岩製で、使用により刃部中央を欠く。5・6は全体を滑らかに研磨し、刃部以外を丸く整形している。



第54図 4層出土磨製石斧実測図（1／3）



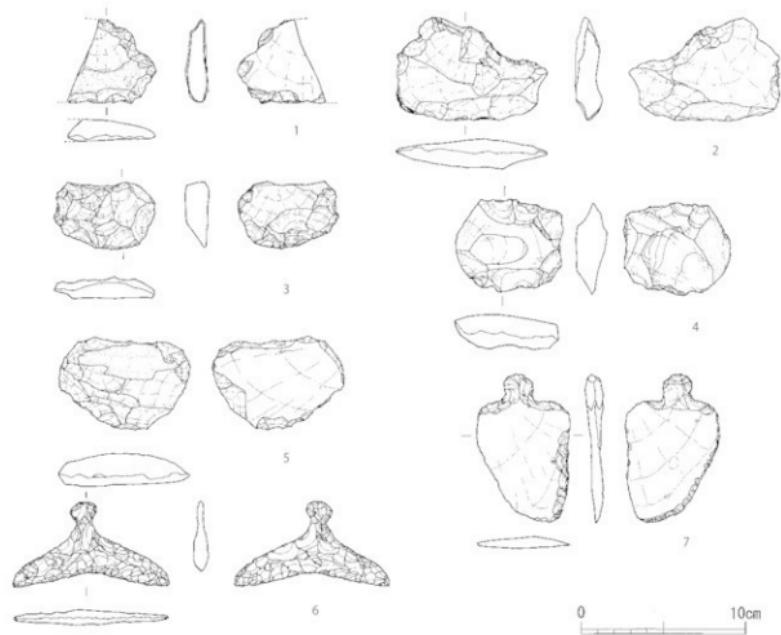
写真51 4層出土磨製石斧

表26 4層出土磨製石斧観察表

図版番号	石材	出土区	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	形状その他
1	蛇紋岩	B-2区		3.6	1.6		幅が細く小振りでやや片刃折れ、被熱を受ける
2	泥質變岩	C-2区		2.5	1.0		手斧の基部か
3	安山岩	F-1区					磨製石斧の刃部の再加工品、基部敲打調整
4	安山岩	B-1区	14.5	5.3	3.8	385	系部敲打調整
5	安山岩	F-1区		5.4			刃部
6	蛇紋岩	B-2区		6.4			刃部、刃部中央刃潰れ

④スクレイバー・石匙（第55図、写真52）

1～5はスクレイバー（削器）である。いずれも刃部が丸く反りあがる形状で、長方形状の製品は見られない。1は安山岩製で残存率は半分程度、側面全体に丹念な剥離加工を施している。2も安山岩製で、細かな剥離加工は一方向の刃部に限られる。3～5の石材はサヌカイトであり、3は基部側面に自然面を二面残し、手の平に収まる程度の中型製品である。1・2・4は原石を素材とし、背面に自然面を一部残す。3・5は剥片石器を素材とする。6・7はサヌカイト製の石匙である。6は橋分類（橋昌信 1980）の横型I類に当たり、丹念に全面的な刃部を作り出しており、大型魚介類の解体、切削に用いられたものと考えられる。7は汎用の縦型III類と思われる。



第55図 4層出土スクレイバー・石匙実測図（1／3）

表27 4層出土スクレイバー・石匙観察表

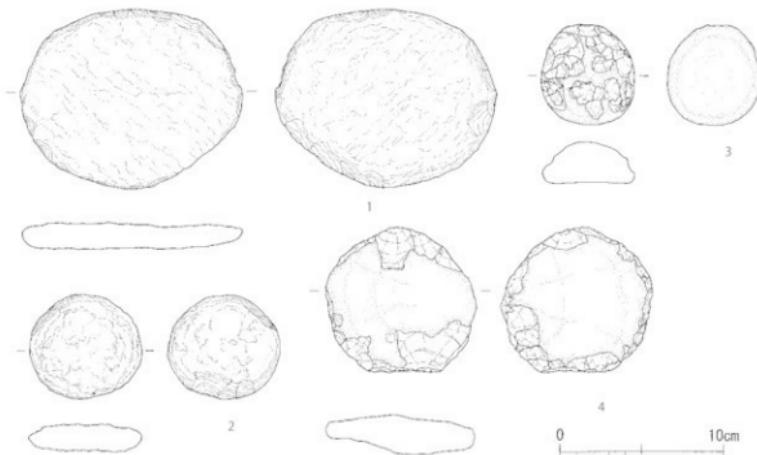
図版番号	器種	出土地区	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	スクレイバー	B-2区	安山岩	(51)	(54)	13	—	欠損あり 残存率5割弱か
2	スクレイバー	A-2区	安山岩	62	92	18	80	変形
3	スクレイバー	C-2区	サヌカイト	41	60.7	13.7	40	変形 基部に自然面残る
4	スクレイバー	D-6区	サヌカイト	56	65	20	86.6	変形
5	スクレイバー	B-1区	サヌカイト	56	81	20	90	変形
6	石匙	A-2区	サヌカイト	51	95	9.4	21.5	変形 横型
7	石匙	B-2区	サヌカイト	90.5	52	11	40.0	変形 縦型 片刃



写真52 4層出土スクレイバー・石匙

⑤円盤形石製品（第56図、写真53）

1～4はいずれもB-2区から出土した円盤形石製品である。1・2は結晶片岩を使用する。1は長径135cm、短径110cmの楕円状であり、平面部は板状の片理面をそのまま利用し、側面のみに2～3cmほどの間隔で打撃を加え、全体を丸く整形する。2は直径6cm台とやや小ぶりである。3・4は安山岩製である。3は直径6cm程度で、自然面を生かした背面に対し、腹側には1～2cmほどの間隔でほぼ全面的な打撃調整を加えている。4は直径約9cmほどで、0.5～1.0mmの気泡を多く含み、角閃石が混じる。やや直線状の自然面を側面一方向に残す他は側面全体に丸く打撃調整を加え、円の中心に向かって直線状に厚みをましていく形状をしている。



第56図 4層出土円盤形石製品実測図（1／3）

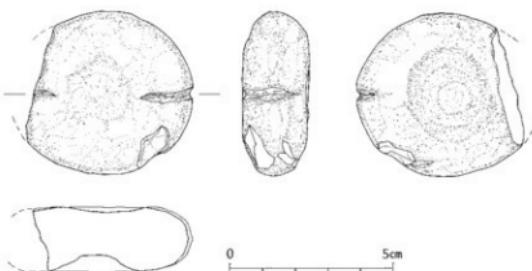


写真53 4層出土円盤形石製品

表28 4層出土円盤形石製品観察表

団版番号	器種	出土地区	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	円盤形石製品	B-2区	結晶片岩	110	135	17	365	
2	円盤形石製品	B-2区	結晶片岩	63	68	14.5	100	
3	円盤形石製品	B-2区	安山岩	61	58	26	135	腹面のほぼ全面に剥離痕
4	円盤形石製品	B-2区	安山岩	87.7	92	24	210	

#### ⑥小型凹石



第57図 4層出土小型凹石実測図 (2/3)



写真54 4層出土小型凹石

干回転による擦れ痕が観察される。このような径が7cm程の小型の凹石は縄文時代晩期の遺構と考えられるST04から(P18 第16図・写真17-5)と1・2層から(P49 写真41・P50 第42図)も出土している。凹石は堅果類の種子の殻を削ったり、石器の作成するために使用するとされるが、これらの3点は石材も、その窪みも小さく上記のための使用とは考えにくい。サイズ的には手のひらに程よく入ること、回転による擦り痕もやや見られることか

F-1区4層の縄文時代晩期の遺物が多数出土した層から小型の凹石が出土した。長径は推測5.7cm、短径は5.0cm、厚みは2.0cmの平たい円盤を利用して両面に5mmと1.5mmの窪みをつけている。長径方向の約4分の1程が欠けている。長径方向には両端から刻み目が施され元々は石錐であったと考えられる。石錐であったためか石材は風化した安山岩である。深い方の窪みは、上端の径が3cm程、底の径が8mm程でまず敲いて窪ませた後、底部部分を中心に若干

ら、推測の域は出ないが縄文時代から使用されていたと考えられている、火鑽（ひきり）具の紐鑽または弓鑽の火きり棒の押さえ具（ハンドピース）ではないかと思われる。

#### 参考文献

東海大学校地内遺跡調査団 第17回 足もとに眠る歴史展 「回せ！一回転運動から考古資料を考えるー」展示解説書 2009

大場正善「小さな凹石は何に使っていたのか？－山形県最上町水木田遺跡における回転・穿孔技術の動作連鎖復原ー」『山形考古』第9巻第3号（通巻41号）2011

#### ⑦その他石器（第58図、写真55）

1～3はいずれも打ち欠き石錘である。1・2は扁平な円礫の長軸両端を打ち欠いて凹部を作っている。3は扁平な円礫の短軸を打ち欠いて凹部を作っている。1～3とも100g未満で軽量である。とりわけ1は手にすっぽりと収まるサイズである。また1～3とも安山岩製である。4・5は砥石である。4は砂岩製で5は泥岩製である。6・7は扁平な円礫を使用し両面に凹みをもつ安山岩製凹石である。8は凹石あるいは石皿と思われる。半円形の凹みをもち凹部は平滑である。厚手で重量感がある。

表29 4層出土その他の石器観察表

団体番号	石種	出土地区	石種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	石錘	F-1	安山岩	44	57	14	45	
2	石錘	B-2	安山岩	70	79	22		
3	石錘	B-3	安山岩	107	64	25	250	
4	砥石	B-2	砂岩	55	60	46		
5	砥石	B-2	泥岩				725	
6	凹石	F-1	安山岩	108	140	43	865	
7	凹石	B-1	安山岩			95		
8	芭石?石皿?	C-2	砂岩					

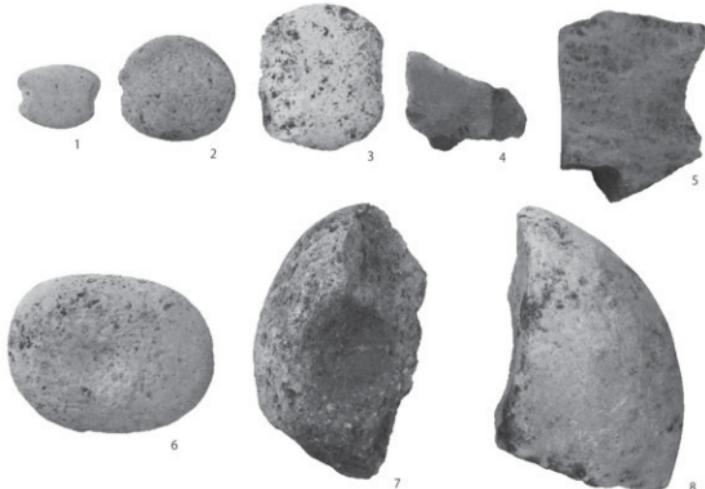
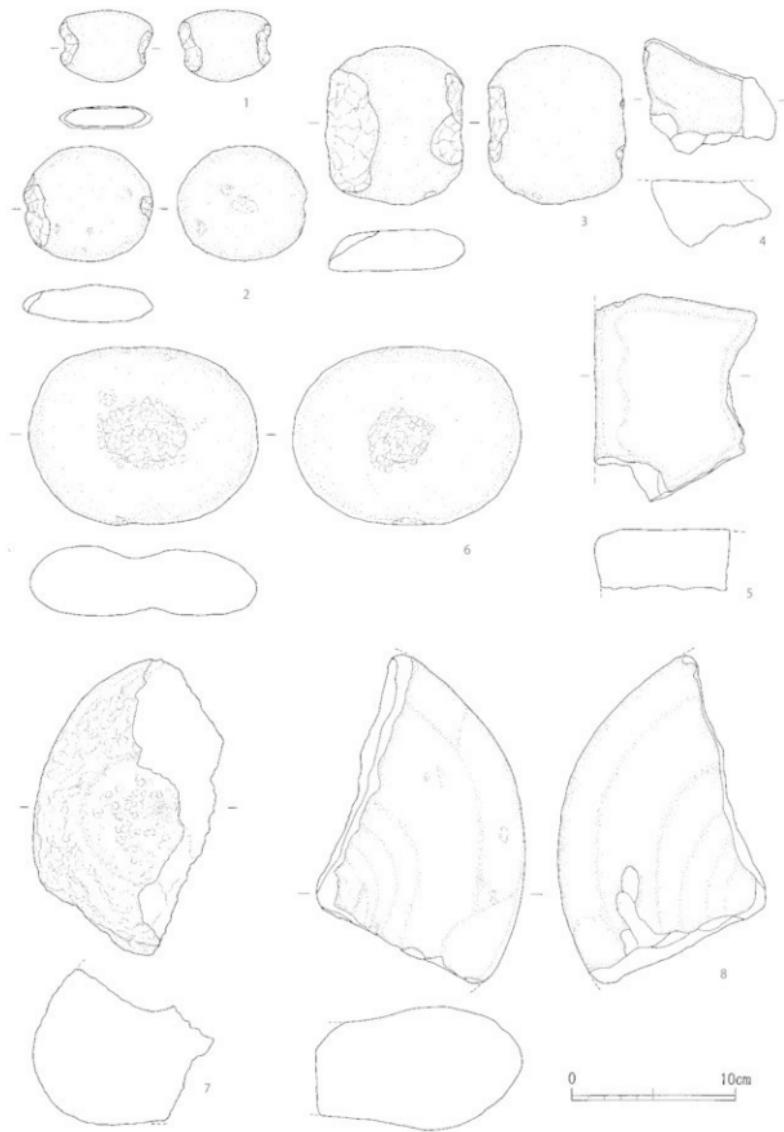


写真55 4層出土その他の石器



第58図 4層出土その他の石器実測図 (1／3)

## IX　まとめ

今回の調査区では、縄文時代早期、縄文時代後期後半から晩期、弥生時代末期、古墳時代中期の生活面が確認されたが、特に調査区全体に広がるのが縄文時代後期後半から晩期にかけての生活面である。4層の中下層からは大量の縄文時代後期後半から晩期にかけての遺物が出土した。その中でも打製石斧が大量に出土し、短冊形を中心に両刃、片刃、横刃のものがあり、この事から鋤、鍬、穂積具などとして使用されたことが窺われ、当時、何らかの農耕が始まっていたことが考えられる。また、4層中層からは埋葬・土坑墓が検出され、農耕の普及により集落が形成され、集落を形成する集団の宗教的観念の表現として、それらが造られたのもと考えられる。さらに、用途不明の遺物として、有孔円盤形土製品や円盤形石製品が多数出土している。これは縄文時代後期後半の集落が検出されている佐賀県鳥栖市の蔵上遺跡からも多数出土している。当時の人々が生活の中で用途は不明であるが必要な道具であったものと思われる。

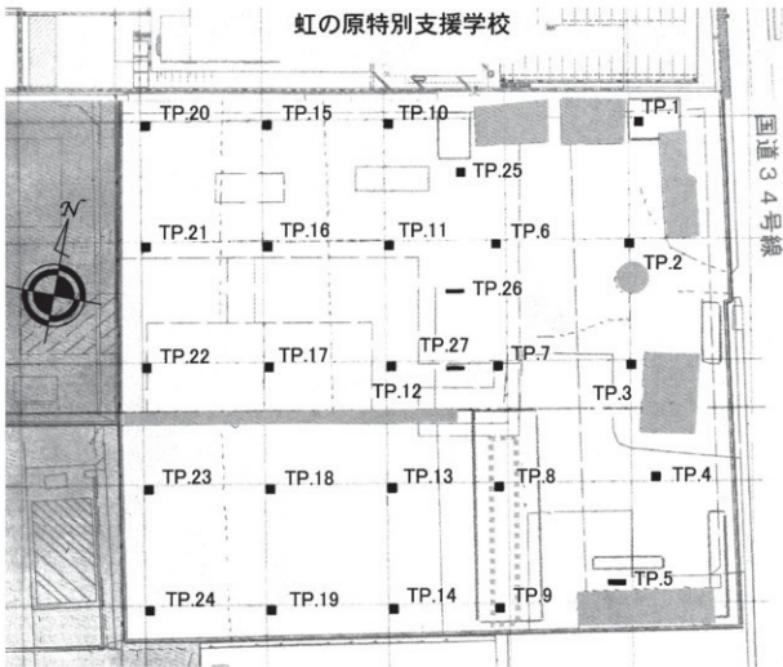
今回の調査区では南西にいくにしたがって縄文時代の包含層である4層の堆積は厚くなり、遺物の出土も多くなる。調査区C～F区の西側の未調査区から調査区の南西に縄文時代後期後半から晩期にかけての墓域や集落が検出される可能性が高いと考えられる。

## X 附編 範囲確認調査結果

### 1 平成 25 年度調査

#### (1) 調査区

竹松農場の東半部(対象面積約 13,750m<sup>2</sup>)に、25 m 間隔で 2m 四方の試掘坑を 24 箇所設けて実施した。途中、遺跡範囲をさらに絞り込むため 3 箇所を追加し、最終的には 27 箇所となった(第 59 図)。



第 59 図 平成 25 年度調査試掘坑配置図 (1/1,000)

#### (2) 土層

黒丸遺跡の範囲は広大で、しかも、郡川の氾濫や農地の造成等により地形は自然的・人為的改变を著しく受けている。今回の調査でも、全ての試掘坑において同一の地層が確認できとはいえない。そのため各試掘坑で得られた層位をもとに基本層序を組み立てるとななるようになる。

第1層 褐灰色土 (10YR 4/1)：耕作が行われている表面の土

第2層 黄灰褐色土 (10YR 4/2)：橙色粒を含むシルト質土壤。小礫をまれに含む。場所によつては、下層に鉄分の沈着やマンガン斑が見られる。

第3層 褐灰色土 (10YR 5/1)：粘性はなく、微細な砂粒で構成される。暗茶色のマンガン粒が斑点状に混在する場所もある。古代～中世の遺物包含層。

第4層 暗褐色土(10YR 3/4)：第3層より粘性が強く砂粒は粗い。弥生～古墳時代の遺物包含層。  
第5層 灰黄褐色～褐灰色土(10YR 4/2～4/1)：砂質土や粘土のブロックをまばらに含む。縄文～弥生時代の遺物包含層。

第6層 にぶい黄褐色土(10YR 4/3)：シルト質でしまりが強い。遺物はほとんど出土しない。

第7層 黒褐色土(2.5Y 3/2)：しまりが非常に強く、細砂で白色粒子をまばらに含む。無遺物層で、所謂「古土層」に相当する。

第8層 明茶色土(5YR 5/6)：微細な粒子でしまりが強い。赤褐色土が斑点状に混在する。遺物は全く出土しない。

第9層 黄褐色土(2.5Y 5/6)：人頭大の礫の間に砂利や粗砂が混在する砂礫層。

基本的に第3・4・5層が遺物包含層で、場所によっては、第3層と第4層または第4層と第5層が混在しているような土層も見受けられた。

特異なのは、TP.7、TP.15の縁辺部においてラミナ状の堆積が顕著に見られたことである。また、TP.26では3層上面と6～7層上面、8～9層上面で筋状に鉄分の沈着が見られ複数回にわたって水田化したことが想定される。なお、10層の黄灰色(2.5Y 4/1)粘質土からは多くのスラグ(鉄滓)も出土した。

### (3) 遺構・遺物

調査では明確なピットや遺構は確認できなかった。

遺物は第3・4・5層の包含層を中心に、縄文時代後晩期から弥生時代、古墳時代、古代・中世までの遺物2815点が出土した。特に遺物の出土が顕著なのは、TP.7・11・15・16・21・22・26である。縄文時代では、後期の御領式・天城式土器や晩期の刻目凸帯文土器、石斧や石鎌、石匙、磨石、叩石、石皿などが出土している。TP.11からは磨石8点と石皿がまとまって出土し、定住生活があったことをうかがわせる。

弥生時代は中期の亀ノ甲・城ノ越タイプの土器が若干みられる程度で、後期から終末期にかけては量的にもさほど多くなく、全体に土器の摩滅が著しい。

古墳時代では、初頭～前期の布留系は皆無で、6世紀以降の土師器甕や須恵器壺の割合が多くなる。加えて朝鮮半島との交流を示す陶質土器の破片も数点あった。

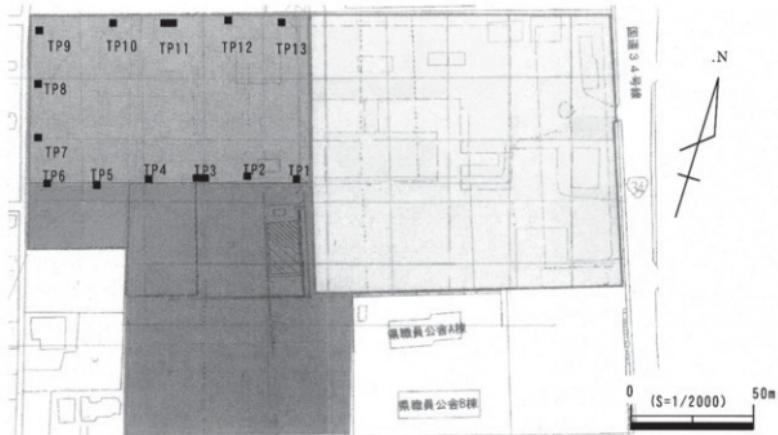
古代～中世では、土師器の壺や椀皿類、黒色土器A・B、瓦器椀、東播系捏鉢、滑石製石鍋や不明滑石製品、中国製の白磁・青磁・青花磁器など8～13世紀頃までの遺物があげられる。

その他、TP.16から鞆羽口が、TP.26からは炉壁と思われる部材やスラグ(鉄滓)が出土したことは鉄器生産関係の遺構が付近に存在したことを思わせる。

## 2 平成26年度調査

### (1) 調査区

調査は県立ろう学校建設予定地のうち、運動場予定地の際に沿って、2m×2mの調査坑11箇所(TP1～TP2、TP4～TP10、TP12～TP13)、2m×5mの調査坑2箇所(TP3・TP11)を設定して人力掘削を行った。人力にていわゆる「古土層」ブロック堆積層まで掘下げた後、遺構の広がりや礫層以下での遺構の有無を確認する目的で、重機によりTP3の深掘りして下層確認を行った(第60図)。



第60図 平成26年度調査 試掘坑配置図 (1/2,000)

## (2) 土層

基本土層としてTP4を取り上げる。土層の特徴は以下のとおりである。

- ・ 1 層：褐灰色(10YR4/1)粘質土。水田耕作土及び床土。
- ・ 2a 層：黒褐色(10YR3/1)粘質土。近現代造成土。
- ・ 2b 層：褐灰色(10YR4/1)粘質土。近現代造成土。
- ・ 3 層：黄褐色(10YR5/6)砂質土。鉄分含む。きめ細かい。
- ・ 4 層：灰黄褐色(10YR5/2)砂質土。直径1~2cmの礫を3%含む。
- ・ 5 層：黄灰色(2.5Y5/1)砂混じり粘質土。鉄分・マンガン含む。ブロック状に粗粒砂含む。
- ・ 6 層：灰黄色(2.5Y4/1)粘質土。白色粒子20%含む。直径1cmの礫3%含む。粘性やや強い。
- ・ 7 層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土。鉄分含む。粘性強い。
- ・ 8 層：黒褐色(2.5Y3/1)粘質土。粘性強い。
- ・ 9 層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質土。上半部に鉄分含む。

下半部を中心にいわゆる「古土層」をブロック状に含み、よく縮まる。

耕作土直下に近現代の造成土が40~50cm程度堆積し、その下にマンガン・鉄分沈着砂質土(粘質土)とこれらを含まない砂質土(粘質土)が互層をなして1~2パターン堆積する土層が典型で、遺物を含まない黒褐色粘質土をはさんで、地表下2.0m前後で9層上面に達する。ただし、調査区東部のTP1~TP2、TP12~TP13では、6~8層が欠落し、地表下1.0m程で9層上面に達する。

3層は遺物包含層、4層上面は第1遺構面(古墳時代)、5層は第2遺構面(弥生時代か)および包含層、6層は第3遺構面(時期不詳)、9層上面は第4遺構面(時期不詳)となる。

## (3) 遺構・遺物

TP11では、3層相当層で古墳時代の土器の包含層を確認したほか、4層上面で南北に伸びる古墳時代の溝状遺構を確認した。また、TP6では4層相当層中から東西方向に溝状遺構を検出している。さらに、TP9では4層相当層上面から古墳時代前期の布留式土器がまとめて出

土しており、4層は古墳時代の遺構面と考えられる。

TP7では、5層相当層上面で土坑1基、ビット3基を確認した。土坑内からは弥生土器片1点が出土している。また、6層相当層中でも土坑1基を確認した。TP11では、6層相当層上面で水田畦畔と推測される粘質土の高まりを検出した。TP11では5層相当層と6層相当層の間にマンガンを多く含む砂層が堆積していて、これにパックされた状態で、北東-南西方向に幅約100cm、高さ約10cm、長さ約200cmにわたって粘質土の高まりを捉えることができた。高まりをはさんで東西に伸びる平坦面には、長軸長20cm程度で粗粒砂を充填する落込みを複数確認しており、足跡の可能性も考えられる。時期は4層相当層で検出した溝状遺構が古墳時代と考えられることから、それ以前と考えられる。

TP1～TP2では、9層相当層上面からビット及び土坑を検出した。9層相当層の直上に堆積する5層相当層からは、縄文晩期～弥生時代の土器が出土しており、9層相当層検出の遺構群は、この時期以前の遺構である可能性が高い。

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	くろまるいせき							
書名	黒丸遺跡							
副書名	県立ろう学校移転改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第215集							
編著者名	浦田和彦・堀内和宏・東郷一子							
編集機関	長崎県教育委員会							
所在地	〒850-8570 長崎県長崎市江戸町2番13号 TEL095-824-1111							
発行年月	西暦2016年12月							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
黒丸遺跡	長崎県 大村市 宮小路	42205	085	32° 57' 19"	129° 56' 33"	20150806～ 20160127	1,813	学校建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
黒丸遺跡	包含地 墓 集石	・縄文 ・弥生 ・古墳 ・古代 ・中世 ・近世	・落し穴3 埋甕2 土壇墓1 集石遺構3 壁柱穴1 ・配石墓1 ・土坑1 ・古墳 ・古代 ・掘立柱建物1 ・中世 ・近世	・縄文土器 石器 有孔円盤形土 製品 円盤形石製品	・土師器 須恵器 ・コンタ 宝塔露盤 五輪等空風輪	縄文時代後期末か ら晩期にかけての 遺構面、遺物包含 層あり		

長崎県文化財調査報告書 第215集

県立ろう学校移転改築工事に伴う

埋蔵文化財調査報告書

## 黒丸遺跡

平成28(2016)年12月発行

発行者 長崎県教育委員会

〒850-8570 長崎市江戸町2番13号

TEL 095-824-1111

印刷所 第一印刷株式会社

〒856-0820 長崎県大村市協和町774番地1

TEL 0957-53-5111